日本ルワンダ学生会議
第 5 回本会議
活動報告書

2010 年 12 月 18 日—2011 年 1 月 6 日

はじめに

『日本ルワンダ学生　第 5 回本会議　日本開催』の報告書を手に取って頂き、誠にありがとうございます。

この報告書を通じて、日本ルワンダ学生会議の 2010－2011 年本会議の活動を皆様にご報告出来ることを非常にうれしく思います。また同時に、この企画の実現にご協力していただきました多くの方々・団体や企業様に、この場を借りて御礼申し上げます。日本ルワンダ学生会議の活動は、現役メンバーと OB・OG だけではなく、多くの方々のお力のおかげで成り立っており、感謝の気持ちでいっぱいです。

昨年の初めての日本招致の反省を活かし、試行錯誤しながら今年は昨年よりも盛りだくさんの計画を無事やり遂げることができました。今年は、大阪・名古屋・東京と広島の 4 ヵ所で活動し、日本メンバーたちも知らなかった日本の側面を経験し、社会の一員として多くのことを考えさせられました。ルワンダ人たちは相変わらず、日本から学び取ろうと一所懸命でした。学生会議では社会現象から若者のファッションなど、お互いの国を取り巻く現状と環境を共有し、相互理解を深めました。

日本側もルワンダ側も日本ルワンダ学生会議にかける思いは偉大なものです。休む時間を惜しまず、何十時間も団体の将来について議論しました。「今までのように企業や団体を訪問し、話を聞き、メンバー同士で議論をするだけではなく、何か社会に還元できるような活動もしたい」という提案が出ました。日本ルワンダ学生会議は団体のさらなる発展とより深い相互理解のため、今年大事な一歩を踏み出したのではないかと思います。

しかし、日本ルワンダ学生会議が素晴らしいのではなく、そこにいるメンバーが素晴らしいと思います。無限の可能性にかけ、頑張り続けるメンバーがいればこの団体の将来も無限であります。早稲田大学の管轄にあったルワンダ・プロジェクトとして活動が始まり、メンバー主体である現在の日本ルワンダ学生会議と生まれ変わってからも「相互理解」をという理念を軸に発展し続けるでしょう。

報告書を通して、日本とルワンダ、そして世界について視野を広げていただけたらと思います。どうぞお楽しみください。

2010 年 3 月 21 日
日本ルワンダ学生会議
メンバー一同

日本ルワンダ学生会議　第５回本会議
日本招致報告書

＜目次＞

はじめに……2

【序章】

日本側代表挨拶
　　東京本部……8
　　関西支部……9
ルワンダ側代表挨拶……10
関係者挨拶……11
日本ルワンダ学生会議団体紹介……12
インダンガムチョ紹介……14
ルワンダ共和国基礎情報……15

【第一章】日本ルワンダ学生会議　第５回本会議　事業全体概要

日本ルワンダ学生会議　第５回本会議　概要・目的……20
日本ルワンダ学生会議　第５回本会議　スケジュール……21

【第二章】日本招致活動報告

大阪
　大阪交流会 NIPPON いらっしゃ～い!!……23
名古屋
　ピースあいち……29
　TOYOTA 自動車工業見学……31
東京
　日本放送協会（NHK）訪問……35

ソニー株式会社見学……38
ピースコンサート……43
ビッグイシュー……48
広島
広島平和記念資料館見学・小倉さんの講演……54
スティーブン・リーパー氏との討論……62

【第三章】日本ルワンダ学生会議　第5回学生会議報告

大阪会議
言語について考える……67
日本のサブカルチャー……68
名古屋会議
自動車産業の未来……69
何を食べている？―食文化から見えるもの―……72
東京会議
結婚観……76
マネジメント……77
Japanese Mass Media……80
無縁社会……83
国家の発展に対する文化の貢献……84
ルワンダにおけるジェンダーの平等……86
在日外国人の人権……86
ビッグイッシューとホームレス……88
長崎原爆（永井隆博士の一生）……90
日本のジェンダーについて……93
JRYCにおける協力の理由と方法……94
乳牛を与え飼育することによる貧しい家庭へのサポート……95
ICT Development in Rwanda Education……96

【第四章】ホームステイ

貴重な一泊@志賀家……100
海原家に久しぶりにお客さんが来た日……101
自然体なアリース……104

ちゃっかり家族……105
ルワンダ人との一週間……106
宮本家でのおもいで……108

【第五章】参加者感想

やらなかったことが一番後悔する……110
バッド・エンディング……111
ルワン団と日本陣……114
相互理解の先に見えてきたもの……115
Exchange……116
A good medicine tastes bitter……118
世の中は広い……119
Cheka!!笑って……119
We meet to depart, and depart to meet……120
Entrance to another world……121
日本でジェノサイドを考える……122
ここから……123
再々会……124
イチゴイチエ……126
大切なこと……127
相互理解の一歩として……128
第一歩……130
充実……132
出会い……133
How Amazing was Japan in My Life……133
日本は不思議……134
マジメかっ!!……134
本当に大切だったこと……135
言葉にできないんだもの

【コラム】日本ルワンダ学生会議　本会議番外編

アフリカンタイムの逆襲
The★Dance Night
モーリス、大田家と再会

AKB市長！
お正月
私にも踊れる！！
アドルフの棒はなんだったのか！？
アドルフ・ザ・恋愛マスター
大晦日だよ！全員集合！

【付録】

メディア掲載
後援
助成団体様
ご協力いただいた団体・個人の皆様
編集後記
おわりに

序章

日本側代表挨拶
　　東京本部……8
　　関西支部……9
ルワンダ側代表挨拶……10
関係者挨拶……11
日本ルワンダ学生会議団体紹介……12
インダンガムチョ紹介……14
ルワンダ共和国基礎情報……15

日本側代表挨拶　東京本部

「11,000km 彼方の人間と交流する、そして相互理解を目指す。」
端的に言えば、私たちの活動はここに集約されます。世界は狭くなったと言われますが、これは並大抵のことではありません。殊に隣人の生活も知らず、通りすがってもあいさつさえ交わさない希薄な人間関係が、刻々と勢力を増していく日本社会に生きる私たちにとっては。殊につい 17 年前に国民全員を巻き込んだジェノサイドを経験し、隣人との関わり方にも大きな変化のあったルワンダ社会に生きる彼らにとっては。

しかし、設立当初はメンバーが僅か二名であった時期もありましたが、「相互理解」という理念と精力的な周知活動を経て、各々の強い思いを持った五十余名が、日本とルワンダに跨ってこの団体に集まりました。そして各自が膨大な時間と労力を注ぎ込み、また幸運にも多くの人々のご厚意を賜り、この企画は成立しました。まずはこの事実に、私は大きな感動を覚えています。「国際交流」・「相互理解」、ぼろ雑巾のように使い古されたものではあるけども、不断の努力無しには決して成立し得ない現象。そこにこれだけの熱意を持って、まだこれだけの人々が集まれるということ、大げさではなく私はそこに日本とルワンダ、そして世界の未来を感じます。

一方で、いまこの文章を打ち出している間にも、近年隆盛を極める中東・アラビア諸国での大混乱が報じられています。日本でもルワンダでも、国の在り方が国際社会から、自国内から厳しく問われています。現実を見ても、僕たちが彼らと未来永劫交流を続けていける保証は何処にもないのです。だからこそこの貴重な機会に少しでも日本のことを知ってほしい、ルワンダのことを知りたい、と企画を山ほど詰め込み、二十日間寝泊りを共にしました。企画詳細は割愛しますが、そこにいかにメンバーの想いが込められ、そして生まれたかが綴られています。ぜひお好きなように、どこからでもページをめくってみてください。この報告書を手にされた全ての人々と、私たちが得た喜怒哀楽と未来へのビジョンを共有できれば、これほど嬉しいことはありません。

団体を代表して、全ての協力者の方々に心から御礼申し上げます。
私たちと、各々の国の、更なる発展と平和を願って。

日本ルワンダ学生会議東京本部　第 4 期代表
大山　剛弘

日本側代表挨拶　関西支部

第 5 回本会議では、初めて「関西支部」が参加できたことに大きな喜びを感じています。2010 年 1 月、日本ルワンダ学生会議(以下 JRYC)関西支部が発足しました。この支部がつくられたきっかけは、2009 年 8 月に、私が日本から遠く離れたルワンダの地で、偶然 JRYC メンバーと出会ったことでした。私は卒業論文でルワンダ紛争をテーマにしており、そのための簡単なアンケートを取りに現地に赴いていましたが、そこで第 2 回本会議を実施している JRYC メンバーに出くわしたのです。「相互理解」という理念を掲げて、ルワンダ・日本双方の大学生が真剣に学び合っている姿に感動し、関西地方でもこのような活動を行い、学生との交流を通じてルワンダへの理解を深める場をつくりたいと考えました。また、私が所属する大阪大学外国語学部スワヒリ語専攻では、アフリカ地域の言語・文化・社会などに関心のある学生が多いので、JRYC の活動がすぐに広がると考えたのです。

ところが発足した当初は、予想に反して、メンバーを集めるのが大変でした。色々なイベントに参加して「関西支部をつくりました！」と主張するも、「へぇ、何人で活動してんの？」という質問に、「え、いや・・・私 1 人です」と口籠る日々。しかしながら、4 月に新入生を対象とした報告会を実施したり、友人の協力を得たりして、少しずつメンバーが増え、現在は大学や学年を問わず 7 人で活動しています。

もちろんメンバーが 1 人でもできることはたくさんありますが、人数が多ければ多いほど、規模の大きな企画を実現することが可能です。これまでは定期的なミーティングにて勉強会を行い、NGO や大阪大学の准教授と協力してアフリカ地域の紛争を考えるイベントなどを実施してきました。さらに今回の本会議では、大阪の交流会や広島の企画を担当し、反省点は多々ありますが、関西支部の各々が責任をもって最後まで会議や企画をやり通したことは、今後の支部の発展への大きな自信に繋がっています。

第 5 回本会議に参加した結果みえてきた、関東やルワンダのメンバーとのより密な連帯という課題も、団体理念である「相互理解」の深化を問うことで、一歩ずつ改善されていくと信じています。まだまだ関西支部の活動は覚束ないものですが、いつも私たちに協力し、刺激を与えてくれる関東とルワンダメンバーに、そして本会議をサポートして下さった全ての方々に、心から感謝申し上げます。

日本ルワンダ学生会議関西支部　第 1 期代表
片山　夏紀

ルワンダ側代表挨拶

Let's me start with greetings and thanks to everybody who have participated in 5th Conference, whether who is a member of JRYC or not. We kindly thank the both Rwandan embassy in Japan and Japan embassy in Rwanda.

I thank all institutions or nongovernmental organizations which have supported this conference and finally greeting and acknowledging all Japanese families which have enabled Rwandan members of JRYC to learn and understand Japanese society.

This 5th conference has many things to talk about and narrate to everyone who didn't participate in its realization during 3 weeks, from 18th December 2010 up to 6th January 2011. In addition, we have to thanks a lot the organizers of this conference and give them advices that will help them to continue their motivation and enhance their organizations.

日本ルワンダ学生会議ルワンダ　第 2 期代表
Maurice Habimfura

関係者挨拶

ルワンダ学生 5 人を招聘して実施した「第 5 回学生会議」の無事終了、お疲れ様でした。

資金集めから訪問先の選定とアポ取り、下見、そして宿泊や移動の手配など、色々な苦労があったと思います。準備期間から本番にいたるまでのプロセスを傍から見ていて、過去のノウハウが後続に引き継がれているなということと、作業分担を振り分けて担当者が責任を持って行っていることを感じました。そして何より「昨年よりも良いものを！」という気迫を感じましたね。

2010 年は、日本でもルワンダの目覚しい経済発展の努力についてたびたび報道されていました。一方で都市と農村の格差の広がりはあまり省みられることはなく、また同年に実施された大統領選挙の前後に野党候補者が逮捕投獄されるなど、「強権的」な側面も日本では取り上げられることは少なかったと思います。当たり前ですが、何事にも良い側面もあれば悪い側面もあるものです。ひとつの視点でしか見ないというのはアンバランスです。こういう中で、現地と独自のチャンネルを持っている JRYC は、どういった視点を発信できるかということも期待されるようになるでしょう。

さて、私はルワンダ学生の招聘中は、みんなとはほとんど一緒にはいなかったのですが、最後のほうでは「日本人もルワンダ人も泣いていた」と聞きました。

きっとそれは、本気で仕事に取り組み、本気で相手と向き合ったからではないでしょうか。泣けるほど本気になれることには人生でそうそうめぐり合えるものじゃないです。そしてそれを日本とルワンダの学生が、だんだんと共有できるようになっていったこと自体、ミラクルなことのように感じます。

ルワンダ側も INDANGAMUCO の中で JRYC-Rwanda チームの組織化が進んできたのは、日本のメンバーの「本気」がルワンダのメンバーの心に通じからでしょう。

そうか、国や言葉や文化の違いを超えて人と人をつなげていくのは、きっと「本気」なんだ。

世界は「本気」で結ばれる。

小峯茂嗣
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）客員准教授
大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）特任助教

日本ルワンダ学生会議団体紹介

＜団体概要＞

略歴

2005 年 10 月 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターが主催するスタディーツアーとして
ルワンダ・プロジェクトがスタート。
2008 年 9 月 ルワンダにて第 1 回学生会議を開催
2009 年 3 月 団体名をルワンダ・プロジェクトから日本ルワンダ学生会議に改名。
同年 9 月 ルワンダにて第 2 回学生会議を開催
同年 12 月 日本にて第 3 回学生会議を開催
2010 年 1 月 日本ルワンダ学生会議関西支部発足
同年 8 月 ルワンダにて第 4 回学生会議を開催
同年 12 月 日本にて第 5 回学生会議を開催

構成人数

日本側メンバー 東京本部 17 名
関西支部 7 名
＊2010 年 3 月現在

ルワンダ側メンバー 35 名（ルワンダ国立大学）

主な活動内容

・週一回の定期ミーティング
・勉強会
・講演会の開催
・報告会（ドキュメンタリー上映会含め）
・専門家による講演会を開催
・ルワンダへの渡航
・日本への招致

連絡先

団体メールアドレス： japan.rwanda@gmail.com
団体ホームページ：http://jp-rw.jimdo.com/

＜活動理念＞

虐殺が行われた教会の壁にかけられている一枚の布には次のような言葉が書かれています。「あなたが私を知っていたら、あなたがあなた自身を知っていたら、こんなことは起きなかっただろう」。

ルワンダにおいて、情報の主体的入手と、偏見を捨てた相互理解は非常に大きな意味を持ちます。我々にとって、それは人類の悲劇から目をそむけたという自責の念に対し、相手を理解し自分を伝えるという地道な活動からアプローチしようとするものです。そしてそれは紛争・貧困などの社会問題にのみ目を向けていくことを意味するものではないでしょう。国際協力において、問題ありきで先進国として支援することばかりを考えていては、依存関係をつくり、かえって発展を阻害してしまうことすらあり得ます。途上国が真に自律し主体的に自らの豊かさを築いていくには、ともに社会問題を考え取り組む「仲間」が必要なのです。我々は実際に生活している人々と交流し、彼らの現状・価値観・人生を知り、相互理解・尊重に基づき信頼関係を築く中で、ルワンダの“Never again”に対し当事者意識を養うばかりでなく、「自由・平等・尊厳・持続可能性・寛容」の視座から真に豊かで平和な社会を考察し行動していく主体となるはずです。

近年世界で頻発する紛争における共通課題として宗教・民族対立があります。ルワンダにおいても植民地分離政策と虐殺におけるプロパガンダは人々の間に「憎しみ」と「偏見」を作ってしまいました。ルワンダの惨劇に対峙しようとする私たちは、「『偏見』を取り除き寛容な『人間同士』の関係づくりがひいては平和な社会を構築する」という信念から学生会議という形で「相互理解」を理念に交流しています。会議では日本・ルワンダ両国の歴史や社会問題を広く議論し双方をより深く理解することで、両国のみならず人類の共通課題に向き合っていきます。

＜公認＞

・駐日本ルワンダ共和国大使館
・アフリカ平和再建委員会
・早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）

＜後援＞

・鶴田綾　一橋大学大学院法学研究科博士課程
・京野楽弥子　英国ブラッドフォード大学院平和学部紛争解決学科修了
・(ARC) 事務局長　小峯茂嗣

インダンガムチョ紹介

インダンガムチョはルワンダの民族伝統ダンス、歌、楽器の演奏を通じて、16 年前のジェノサイドの悲しみから立ち上がろうとする人々に平和と希望の光を届けることを理念とし、活動しているルワンダ国立大学のダンスサークルです。メンバーは総勢 60 名。ルワンダ中の様々な場所へ出向き、その華麗なダンスで観客を魅了します。メンバーの中には海外でのダンスショーで活躍する者もいます。文化が作り上げる平和とは。そんな問いと日々向き合いながら、ルワンダのあたたかい気候と人のぬくもりの中で、伝統ダンスをこれからも後世へと伝えていきます。

ルワンダ共和国基礎情報

Republic of Rwanda

（外務省のホームページより引用 2011 年 3 月 4 日） 一般事情

＜「千の丘の国」と呼ばれる自然豊かな内陸国 ＞

1. 面積

2.63 万平方キロメートル

2. 人口

1,000 万人（2009 年、UNFPA）

3. 首都

キガリ

4. 言語

ルワンダ語、英語、仏語

5. 宗教

カトリック 57%、プロテスタント 26%、アドヴェンティスト 11%、イスラム教 4.6%等

6.略史

年月	略史
17 世紀	ルワンダ王国建国
1889 年	ドイツ保護領 （第一次大戦後はベルギーの信託統治領）
1961 年	王政に関する国民投票(共和国樹立を承認) 議会がカイバンダを大統領に選出
1962 年	ベルギーより独立
1973 年	クーデター（ハビャリマナ少佐が大統領就任）
1990 年 10 月	ルワンダ愛国戦線(RPF)による北部侵攻
1993 年 8 月	アルーシャ和平合意
1994 年 4 月	ハビャリマナ大統領暗殺事件発生をきっかけに 「ルワンダ大虐殺発生」（～1994 年 6 月）
1994 年 7 月	ルワンダ愛国戦線(RPF)が全土を完全制圧、新政権樹立 （ビジムング大統領、カガメ副大統領就任）
2000 年 3 月	ビジムング大統領辞任
2000 年 4 月	カガメ副大統領が大統領に就任
2003 年 8 月	複数候補者による初の大統領選挙でカガメ大統領当選
2003 年 9-10 月	上院・下院議員選挙（与党 RPF の勝利）
2008 年 9 月	下院議員選挙（与党 RPF の勝利）

政治体制・内政

1.政体

共和制

2.元首

ポール・カガメ大統領

3.議会

上院（26 議席）、下院（80 議席）

4.政府

（1）首相　ベルナール・マクザ

（2）外相　ルイーズ・ムシキワボ

5.内政

1962 年の独立以前より、フツ族（全人口の 85%）とツチ族（同 14%）の抗争が繰り返されていたが、独立後多数派のフツ族が政権を掌握し、少数派のツチ族を迫害する事件が度々発生していた。1990 年に独立前後からウガンダに避難していたツチ族が主体のルワンダ愛国戦線がルワンダに武力侵攻し、フツ族政権との間で内戦が勃発した。1993 年 8 月にアルーシャ和平合意が成立し、右合意を受け、国連は停戦監視を任務とする「国連ルワンダ支援団（UNAMIR）」を派遣したが、1994 年 4 月のハビヤリマナ大統領暗殺を契機に、フツ族過激派によるツチ族及びフツ族穏健派の大虐殺が始まり、同年 6 月までの 3 ヶ月間に犠牲者は 80～100 万人に達した。

1994 年 7 月、ルワンダ愛国戦線がフツ族過激派を武力で打倒すると、ビジムング大統領（フツ族）、カガメ副大統領による新政権が成立。同政権は大虐殺の爪痕を乗り越えようと、出身部族を示す身分証明書の廃止（1994 年）、遺産相続制度改革（女性の遺産相続を許可）（1999 年）、国民和解委員会及び国民事件委員会の設置（1999 年）等、国民融和・和解のための努力を行っている。

1999 年 3 月には、1994 年の虐殺以降初めての選挙となる地区レベル選挙（市町村レベルより下位）を実施、2001 年 3 月には市町村レベル選挙を実施、2003 年 8 月には大統領選挙が実施されカガメ大統領が当選。政治の民主化が進展している。同年 9、10 月の上院・下院議員選挙及び 2008 年 9 月の下院議員選挙では与党 RPF が勝利した。

カガメ大統領は汚職対策に力を入れており、他のアフリカ諸国に比して、汚職の少なさ、治安の良さは特筆される。

外交・国防

1.外交基本方針

従来非同盟中立主義が基本路線。冷戦時代は東西両陣営と友好関係を維持、現在は、経済開発のため先進諸国との協力に重点を置く。東アフリカ共同体（EAC）及び東南部アフリカ共同市場（COMESA）メンバー。コモンウェルス加盟（2009 年 11 月）。

2.軍事力

(1)予算　7,600 万ドル(2009 年)

(2)兵役　志願制

(3)兵力　3 万 3,000 人(2009 年)

経済

1.主要産業

　農業(コーヒー、茶等)

2.GDP

　44.6 億ドル(2008 年)

3.一人当たり GNI

　440 ドル(2008 年)

4.経済成長率

　11.2%(2008 年)

5.物価上昇率

　17.4%(2008 年)

6.総貿易額

(1)輸出　257 百万ドル(2008 年)

(2)輸入　880 百万ドル(2008 年)

7.主要貿易品目

(1)輸出　コーヒー、茶、錫

(2)輸入　資本材、半加工品、エネルギー財、消費財

8.主要貿易相手国

(1)輸出　中国、独、米国、タイ

(2)輸入　ケニア、中国、ウガンダ、ベルギー

9.通貨

　ルワンダ・フラン

10.為替レート

　1ドル＝571 ルワンダ・フラン

11.経済概況

(1)農林漁業が GDP の 40%以上、労働人口の 90%を占め、多くの農民が小規模農地を所有。主要作物はコーヒー及び茶(輸出収入の　60%)であり、高品質化により国際競争力を強化する政策をとっている。一方で、内陸国のために輸送費が高いという問題も抱える。

(2)1980　年代は、構造調整計画を実施し経済の再建に努めたが、内戦勃発以降はマイナス成長、特に1994年の大虐殺で更に壊滅的打撃を受けた。その後、農業生産の堅実な回復(1998年には

内戦前の水準を回復)、ドナー国からの援助、健全な経済政策により 1999 年までに GDP は内戦前の水準に回復した。
(3)ルワンダ政府は、1996 年に「公共投資計画」を、2000 年に 20 年後の経済達成目標を定める「VISION2020」を、2002 年には「貧困削減戦略文書完全版(F-PRSP)」を、また、2007 年には、第 2 次世代 PRSP となる経済開発貧困削減戦略(EDPRS)を策定し、これら戦略等を基軸とした経済政策を実施している。2000 年 12 月には、拡大 HIPC イニシアティブの決定時点に達し、2005 年 4 月に完了時点に到達している。
(4)カガメ大統領は、汚職対策にも力を入れており、グッドガバナンスの模範国として世銀等からの評価も高い。

経済協力

1.日本の援助実績
(1)有償資金協力(2008 年度まで、EN ベース) 46.49 億円
(2)無償資金協力(2008 年度まで、EN ベース) 318.28 億円
(3)技術協力実績(2008 年度まで、JICA ベース) 49.80 億円
2.主要援助国(2007 年)
(1)英 (2)米 (3)ベルギー (4)オランダ (5)独

二国間関係

1.政治関係
(1)日本は、ルワンダが独立した 1962 年 7 月に国家承認。2009 年末まで在ケニア日本大使館がルワンダを兼轄していたが、2010 年 1 月に在ルワンダ日本大使館開館。ルワンダは 1979 年 5 月に在京大使館を開設。2000 年 9 月に閉鎖したが、2005 年 1 月に再開。
(2)1994 年 4～6 月のルワンダ大虐殺により国外に避難したルワンダ難民を救援するため、日本は、同年 9～12 月の間、国際平和協力法に基づき、ザイール共和国(当時、現コンゴ民主共和国)のゴマ 等に約 400 名の難民救援隊・空輸隊等を派遣した。
2.経済関係(対日貿易)
(1)貿易額
輸出 4,900 万円(2009 年)
輸入 10 億円(2009 年)
(2)主要品目
輸出 コーヒー、バッグ類、 輸入 自動車、二輪、機械
3.文化関係
国営テレビ局に対し番組ソフトを供与。
4.在留邦人数
40 人(2009 年 10 月現在)

【第一章】

日本ルワンダ学生会議　第 5 回本会議

事業全体概要

日本ルワンダ学生会議　第 5 回本会議　概要・目的……20
日本ルワンダ学生会議　第 5 回本会議　スケジュール……21

日本ルワンダ本会議第 5 回本会議　概要・目的

【開催時期・期間】

2010 年 12 月 18 日（土）～2011 年 1 月 6 日（木）・20 日間

【開催場所】

大阪・愛知・東京・広島

【事業概要】

2008 年度より学生主体での活動を本格的に始める。同年 9 月には日本側の大学生が 8 名ルワンダに渡航し、ルワンダ国立大学において第1回学生会議を開催。議題は日本側より社会の発展に伴う負の側面、ルワンダ側より1994 年の虐殺後の社会、といったテーマが持ち込まれ、それらについてディスカッションを行った。日本とルワンダの学生がこのような討論の場を持ったのは両国の外交上初の試みであり、現地で活動する諸機関の協力も得て第1回学生会議は成功に終わる。引き続き 2009 年 9 月には再びルワンダで第 2 回学生会議を、そして 2009 年 12 月に初の日本開催で第 3 回学生会議を実現。この 2 企画を通し、これらが補完的なもので、両国における実践的な体験が相互理解には不可欠なものであると学ぶ。

そして 2010 年 9 月のルワンダ渡航・第 4 回学生会議と並行して本事業の準備が進められ、開催された。今回は恒久のモットーである「平和追求」に加え、「日本の産業」「社会福祉」にも焦点をあてて多くの企業訪問や対談企画を盛り込んだ。また両国間の理解を深める新たな試みとして、ルワンダの学生自らが 94 年の経験について講演する場も設けた。将来本企画を経た人々全てが、「顔の見える」草の根の関係によって、2 国間の、そしてより広範な地域の関係強化に寄与するものであると考えている。

【事業目的】

1.国家から個人レベルまで多面的な議論を交わし、学生間での日本・ルワンダ両国の理解を促進すること。
2.日本・ルワンダの学生の異なる視点から多くの議題を検証し、地球規模で通用する視点を備えた人材を育成すること。
3.企画のみならず期間中常に生活を共にし、両国の学生間に信頼関係を構築すること。
4.広く一般に開かれたイベントを通じ、当会議関係者以外にも両国の認知度を高めること。
5.本企画を題材として、事後に報告会や映像の作成・上映を行い、継続的に影響力を発揮すること。

第 5 回本会議全体スケジュール

実施日	活動	地域・場所
12 月 18 日	ルワンダ人 5 名日本到着	大阪・関西国際空港
19 日	ウェルカムパーティー 学生会議	大阪大学豊中キャンパス
20 日	移動（大阪⇒愛知） 学生会議	女性会館（名古屋市内）
21 日	学生会議 ピースあいち訪問	名古屋市立大学 ピースあいち（名古屋市）
22 日	トヨタ工場見学 移動（愛知⇒東京）	トヨタ自動車・元町工場、 トヨタ会館（豊田市）
23 日	学生会議	早稲田大学
24 日	NHK 訪問 ソニー訪問	日本放送協会東京渋谷本社 ソニー株式会社（品川）
25 日	学生会議 ミサ参加	早稲田大学 聖イグナチオ教会（四ツ谷）
26 日	ピースコンサート準備	和敬塾ホール（文京区）
27 日	ピースコンサート開催	アムウェイ東京（渋谷）
28 日	BIG ISSUE（講演） 学生会議	東京ボランティア市民活動センター会議室（飯田橋）
29 日	学生会議	同上
30 日	学生会議	同上
31 日	ルワンダ駐日大使と会食	新宿プリンスホテル
1 月 1 日	休息日	メンバーの家でホームステイ
2 日	観光 移動（東京⇒広島）	秋葉原
3 日	宮島・厳島神社 学生会議	厳島（廿日市市）
4 日	平和記念資料館・原爆ドーム 小倉佳子さん講演	広島平和記念資料館（広島市）
5 日	学生会議 リーパーさんと討論 移動（広島⇒大阪）	アステールプラザ（広島市） 広島平和文化センター（広島市）
6 日	ルワンダ人帰国	関西国際空港

コラム「アフリカンタイムの逆襲」 品川 正之介

ルワンダで開催された第4回本会議ではアフリカンタイムが猛威を振るい、ついに日本人メンバーはアフリカンタイムに屈してしまったのであった。（※第四回本会議報告書コラム参照）ルワンダを離れることでその脅威から逃れることができたと思われたのだが、その考えは甘かった・・。この物語はアフリカンタイムがなんと日本においても猛威を振るった物語である。

集合時間前に到着して余裕綽々のルワンダ人メンバー

東京企画でルワンダ人メンバーの一週間のホームスティを受け入れていた僕は、噂に聞くアフリカンタイムの脅威にびびりまくっていた。企画の中には遅刻の許されない企画もあり、電車に乗り遅れたら、集合時間に間に合わなかったらどうしようなどと不安が頭の中をぐるんぐるん回っていた。そして初日の朝、不安は的中する・・・・かと思いきや前日の疲れにも関わらず全員時間通りに起床、朝ごはんもしっかりとる時間もあり、集合時間にも余裕をもって間に合ったのであった。びびりまくっていたわりにはその後もアフリカンタイムの脅威に脅かされることはなく、むしろ自分より先にルワンダ人メンバーが起きて準備を始めている日もあるくらいであった。アフリカンタイムも我らがジャパニーズタイムのホーム、日本の中では猛威を振ることはできないのだなとすっかり僕は油断していた。しかし・・・その時僕は、アフリカンタイムの真の恐ろしさにまだ気づいていないのであった。

東京企画が始まってしばらくすると、毎日の集合場所で待っている間にあることが気になり始めた。

「日本人メンバーの遅刻が多い・・・。」

そう、日本ではおとなしくしているかと思われたアフリカンタイムは、実はルワンダ人ではなく、日本人にその猛威を振るっていたのだった・・！！第四回本会議で日本人に伝染したアフリカンタイムは多くの日本人メンバーにさらに伝染していたのでした。おそらく参加全メンバーが時間内に集合したことはなかったのではないのか。遅刻する日本人を待つルワンダ人。今までにない構図である。

一方ルワンダ人メンバーはジャパンタイムにすっかり適応していた。おそらく以前の学生会議で日本人メンバーが口をすっぱくして時間厳守を訴えていたからだろうか。それなのに日本人メンバーは・・・すこし情けないところである。

【第二章】

日本招致活動報告

大阪
大阪交流会 NIPPON いらっしゃ～い!!……23
名古屋
ピースあいち……29
TOYOTA 自動車工業見学……31
東京
日本放送協会（NHK）訪問……35
ソニー株式会社見学……38
ピースコンサート……43
ビッグイシュー……48
広島
広島平和記念資料館見学・小倉さんの講演……54
スティーブン・リーパー氏との討論……62

大阪

大阪交流会　NIPPON いらっしゃ～い！！

企画者：片山　夏紀

参加者: Maurice, Alfred, Adolphe, Alice, Clarisse 大山、岩井、秋田、今泉、嘉積、片岡、片山、久保、品川、藤沢、藤原、古屋、宮本、山崎、一般の方々約 20 名

【企画目的】

日本ルワンダ学生会議(以下 JRYC)のメンバー以外にも、ボランティアの方々や、大学生、社会人の方々にも参加して頂き、当団体やルワンダへの理解を深め、ルワンダメンバーとの交流を目的とする。

【企画概要】

場所：大阪大学豊中キャンパス　大阪大学教育実践センター・スチューデントコモンズ「カルチエ」

時間：15:00～20:00

【報告】

◆アイスブレーキング

まず場を和ませるために、簡単なジェスチャーゲームを行った。座席の列ごとにチームを編成し、最前列の人だけ一枚の写真を見せて、それを身振り手振りのみで表現してもらい、順番に後ろの人に伝えていく。皆さん言葉を使えずに四苦八苦・・・最初に見せたキリンの写真が、最後

尾に伝わる頃には「バスケットボール」になっているチームもあり、会場がどっと沸いた。

雰囲気がぽかぽかと温まってきたところで、JRYC のプレゼンが始まった。

◆　ルワンダの歴史概要をプレゼン
+JRYC 団体紹介

一人でも多くの人にルワンダについて理解を深めてもらうために、基礎情報、ルワンダ紛争の経緯、JRYC の団体紹介を簡単に説明した。交流会後のアンケートでは、ルワンダについて少しでも情報を得ることができて良かったという声が多数寄せられた。

◆　大阪大学ジャズ研究部
***Desafinado* による演奏**

少々アカデミックなプレゼンの後、颯爽と会場に現れたのは通称「ジャズ研」！クリスマス間近ということもあり、ルワンダメンバーのために『聖者の行進』を演奏して下さった。JRYC メンバー兼ジャズ研の藤原が MC を務め、お洒落な音色に皆さんノリノリで、会場の緊張が少しずつほぐれていった。

◆ルワンダメンバーが虐殺の体験を語る

交流会は山場に差し掛かる。JRYC メンバーのアドルフとアルフレッドが、彼ら自身の虐殺の体験を語ってくれた。多くの参加者が彼らの話に衝撃を受け、「自分には何ができるのか考えさせられた」、「彼らの経験を聴くことができ、そして彼らの素敵な笑顔に出会えて良かった」、「偏見を持たずにこの話を理解して、周囲の人達に正確に伝えていきたい」などの感想を頂いた。今こうして報告書を読んで下さっている方々ともこの体験を共有すべく、以下、スピーチの要約を掲載する。

◆Abijuru Adolfe

虐殺で亡くなった人々に対して、一分間の黙祷。静かな時間が流れる。
やがてアドルフが、ゆっくりと口を開いた。

ジェノサイド(genocide：以下「虐殺」)とは、ギリシャ語の genos(民族)とラテン語の-cide(殺)を合わせた言葉です。つまり単なる大量虐殺ではなく、ある特定の民族やグループを徹底的に根絶やしにすることを意味します。しかし、ルワンダにおいて「ジェノサイド」という言葉を使うと、私たちは混乱します。この言葉の定義からすれば、ツチ#のみの殺戮を指しますが、実際はそれだけではありません。ツチが殺戮されたと同時に、虐殺に反対した多くのフツも殺されたからです。そのことを、心に留めておいてほしいのです。

虐殺を体験したのは 8 歳だったので、今でもよく覚えています。毎朝友達の家の前を通る時、「やあ」と挨拶を交わしていたのに、その日は返事がなかったのです。今思えばあの時、フツがツチを憎むようルワンダ政府に仕向けられ、虐

殺のプログラムが着々と進行していたのだと思います。ルワンダ政府が、虐殺する人を対象にした名簿を作成していました。また、フツの 20 代以下の若者が集められて民兵が組織され、「ツチはお前達の敵だ」と洗脳されて、彼らは虐殺に駆り出されました。1994 年 4 月 6 日に虐殺が始まりましたが、ルワンダ政府はその一か月程前からラジオを通して国民に虐殺の準備をさせていました。「フツは準備が整った。フツはツチを根絶やしにしよう」と放送され、そこで実践されたプロパガンダ(特定の主義の宣伝)によれば、ルワンダが当時抱えていた問題#は、全てツチに起因するものであると説明されました。

虐殺が始まった時、私はルワンダの首都キガリから車で 40 分程離れた東の地域に住んでいました。父と 2 人の姉妹と 2 人の兄弟がキガリにいて、母と兄と従兄弟と祖母が家に住んでいました。銃を持った兵士達が、町の家々に来ていたのです。

例の名簿を手に、軍人や警察がやってきました。彼らが我が家に押し入って、父に「外に出ろ」と叫び、名簿に記載されている者が揃っているか確認して、虐殺する場所に連れて行きました。そこで父を座らせてこう言ったのです、「金を持っているなら渡せ、お前を銃で殺してやる。金を持っていないならナタで殺すぞ」と。父や他の人達はお金を払い、銃で殺されました。母や親戚は殺されて湖に投げ捨てられました。女性が民兵達にレイプされるという悲劇も起こりました。そうです、罪のない人が、たくさん殺されたのです。しかし私は、偶然にも生き残ることができました。

この虐殺は、ルワンダ政府が組織的に行ったことです。しかしその政府は敗北し、結果的にルワンダに侵攻してきた武装勢力が勝利しました。今では平和が訪れて、国家の再建が始まっています。人々も、少しずつ笑顔を取り戻しつつあります。虐殺がなぜ起こったのか、どのような出来事であったのかが、少しずつ明らかになってきました。虐殺を経験した私達には、選択の余地はありませんでした。つまり自分達の歴史を受け入れなければいけなかったのです。より良い未来のために、そしてルワンダ人自身のためにも。

◆Ntaganda Alfred

今から虐殺の体験を簡単に話しますが、その前にお願いがあります。これはツチに対する虐殺だけはなく、フツも殺されています。(以下、大山補足)「ジェノサイドと一言で言っても、彼らはたくさんの出来事を経験してきています。案に言葉だけを口にしても、それは本当に理解したことにはなりません。彼の話を聞いてから、正確にジェノサイドの話を周囲の人々に伝えてほしい、ということだと思います。」

今から伝えるのは本当の話です。この交流会の始めにジェスチャーゲームを行いましたが、伝えるべき情報がどんどん変わっていきましたね。もし皆さんが誰かに虐殺の話をする時は、正確な情報を伝えていってほしいのです。

虐殺の時、私は 9 歳でした。幼かったけれども、何が起こっているのかよく分かっていました。「ジェノサイド」・・・この言葉にはどんな意味があるでしょうか？それはつまり、罪のない人を大量に虐殺することです。ルワンダの虐殺は予め準備されていたもので、民兵には虐殺する人を記載し

た名簿が渡されていました。隣人を敵に仕立てあげて、ナタや銃を使って、多くの人々が殺されました。ルワンダ政府が若い世代の人達に「あなたはツチ」「あなたはフツ」と決めつけ、フツがツチを憎むように仕向けたのです。けれども実際には、ツチとフツに何の違いもありませんでした。背の高い人がツチと言われました。(会場にいる長身の方を指して)だから、あの人はツチですね(会場の笑いを誘う)。その他にもツチは鼻が高いとか、そういう風に決め込んだのは、単に差別を作り出すためでした。

1994 年の 3 月、虐殺の準備が始まりました。隣国ウガンダの近くで私は育ちました。祖母と 5 人の幼い兄弟と一緒に住んでいました。虐殺の対象者を記載した名簿が作成されていたので、それに伴って隣人は殺されました。1994 年の 4 月 22 日の夜 10 時に、とうとう民兵が我が家へやってきたのです。「外に出ろ、お前たちの命はない」と言われました。私は小さかったので、両親がベッドの下に隠れるよう指示し、他の家族はみな外に連れ出されて、後ろで手を縛られました。今彼らがどこにいるのか知りません。そう、それはつまり—・・・彼らは殺されたということです。

翌朝、私は親戚の住む家に向かう途中、武装した民兵に出会いました。「お前はツチだから来い！！」と言われ、「私はツチではない」と返すと、「ツチでなくてもこちらに来い！！」と言われました。彼らの前に立ち、手を挙げました。「お前の父親はどこだ」と聞かれ、咄嗟にフツの知人の名前を口にしました。「お前、嘘をついているな」と脅され、本当に怖くて、「僕はツチじゃない、フツなんだ！！」と叫びました。彼らは私をナタで殺すと言い放ちました。お金は持っているのかと聞かれ、首を振りました。自分のポケットをまさぐると、そこにはクリスチャンにとってとても大切なロザリオが入っていました。それを見た民兵はこう口にしたのです、「もし今我々がお前を殺さなくても、どうせまた別の奴に殺されるだろう。お前の顔など見たくない、どこかへ行ってしまえ」と。

私は隣国ウガンダとの国境近くまで逃げましたが、そこには既に国外に逃亡する人々の予防線が張られていました。その時に誰かのラジオで聞いたのは、もうすぐ国境付近の村に民兵が送られてくるということです。だから私達は、すぐにどこかへ逃げなければいけませんでした。やがて彼らが辿り着き、ナタや銃で攻撃を開始しました。我々は武器を持っていないので、石などで必死に抵抗しながら逃げ回りました。民兵と闘って多くの人々が亡くなりました。あるいは川を渡る途中で行方不明になってしまいました。自分は幸運にも何とか生き残り、ウガンダへ渡って、避難所へ辿り着きました。

本当に話せば長いのですが、自分の体験を簡単に伝えました。虐殺の後、このような活動を通してルワンダで何が起こったのか、それを伝えるようになりました。私には好きなものがたくさんあります。サッカーや音楽やダンスやこのような学生会議に参加することなどです。ルワンダでもこのような集まりを通して、人々の考えを変える為に活動をしています。今日は、ルワンダは虐殺の頃とは変わったのだ、ということを伝えにここに来たのです。現在ルワンダは平和で、確かに虐殺の際に生きる希望を失った人達の問題などは存在しますが、何よりきちんとした政府があります。私たちが切望しているのは、もう二度とこのような悲劇を起こさないことです。よってルワンダだけでなく、スーダンのダルフールなど、様々な紛争地で話をしたいと考えています。そして皆さん、治安が安定していて経済発展を遂げているルワンダに、ぜひ遊びに来て下さいね。ご清聴を感謝します。

◆大阪大学西アフリカの太鼓＆ダンスサークル Talibe による演奏

ドンタカタカタカドンドン・・・Talibe の演奏が聞こえてくると、皆踊り出さずにはいられない。力強い歌とダンスと太鼓のパフォーマンスを見せて下さり、各々が歌ったり、手拍子を叩いたり、リズムに合わせて体を揺らしたり。ジャズ研とのコラボも交え、会場の盛り上がりがピークに達した時、JRYC ルワンダメンバーが「今日のゲストや来場して下さった方々へのお礼として、歌とダンスを送りたい」と切り出した。

ジャズと西アフリカの太鼓とルワンダの歌とダンス・・・一見全く別々のものが心地よく融合して、私達の心を揺さぶってくる。言葉がなくても、私達は通じ合える。音楽の偉大さを改めて実感した一時であった。

◆懇親会

交流会後、食事も兼ねて懇親会を開催した。そこで主役を飾ったのが、ボランティアの方々が作って下さった豪勢な料理の数々でした。「せっかくルワンダの人達が大阪に来るのだから、美味しいものでおもてなししなくちゃ」と、腕によりをかけて下さったのだ。これにはルワンダメンバーも大喜びであった。ボランティアさんの一人が「美味しいご飯があれば、腹を割って話ができる。食事は本当に大切なものだよ」と仰っていた。ルワンダメンバーにも好き嫌いがあるという問題を差し引いても、彼らとの食事をファミリーレストランやファストフードで簡単にすまそうとしていた私は、この言葉を聞いてひどく反省したのであった。

【感想】

企画者：

交流会後のアンケートでは、ルワンダメンバーともっと直接話をする場が欲しかったという意見が多く寄せられた。当初はルワンダメンバーと皆さんとの対話の場を想定していたのだが、時間がとても押してしまい、結局叶わなかった。これ

は今回の交流会の最大の反省点である。事前の打ち合わせでは、アドルフとアルフレッドに「ルワンダが紛争後、どのように平和を紡いできたのか」を身近な話題で語ってほしいとお願いしていたのだが、やはり彼らが一番伝えたかったのは、自分の虐殺の体験と「それを二度と繰り返すまい」という強い意志であった。今回のアンケートで寄せて頂いた感想は取りこぼすことなく、次

回の催しに反映させたい。最後に、この交流会は、演奏して頂いた desafinado や Talibe の皆様、通訳や懇親会の料理や会場設定を担当して下さったボランティアの方々の協力なしには成立しなかった。そして、遠路はるばる大阪にお越し頂いた大田ファミリーの皆様(詳細はコラム参照)、スワヒリ語専攻のアシャ教授とサーダさん、留学生のアイリーンさんと JRYC との交流が、これからも続いていくことを願ってやまない。皆様に心から感謝申し上げます。

コラム　The ★ Dance Night　岩井 天音

ダンス。大学のダンスサークルに所属し、普段からルワンダダンスを踊るルワンダメンバーにとって、それは命。ルワンダメンバーの華麗なダンスが披露された機会、何と言ってもそれは 12 月 27 日のピースコンサートであった。しかし 19 日間寝食を共にした私たちは、それだけではなかったことを知っている。

12 月 22 日。名古屋最終日。

この日は中西家で夕食に頂いた後、リビングでのんびりとしていた。そしてルワンダンらは中西さんの PC でいわゆる流行りの音楽(アメリカの R&B 系など)を聞き始めた。そして次の瞬間、なんとリビングはダンス会場に変わっていたのである。ルワンダメンバーは華麗なステップを刻みながら、音楽に乗って歌って踊っていたのだ！

洋楽に明るい中西さんを「DJ ナカニシ！！」と呼び、次々と音楽を変えては踊る踊る。ルワンダダンスもさることながら、彼らはどんなダンスでもうまいのだなと感心した。

大みそか。品川のコラムにもあるが、年越しは千田家にお邪魔させていただいた。

紅白歌合戦鑑賞中は静かにしていたルワンダンも、年が明けると…これからはルワンダの時代だ！といわんばかりに始まる Dance Night。この日もリビングの PC で youtube から音楽をかけ、CD コンポからシャレオツなジャズの BGM をかけ、踊る踊る。ダンスバトルも始まったりして、ポップで華やかな年明けとなった。

彼らはどんな音楽を聞くのか。盛り上がるのはやはり世界的にハヤりのアーティスト。Black Eyed Peas や Shakira などでは大フィーバー。しかしちょっと疲れたなというときには、2010 年にヒットした B.o.B の Nothin' On You などのゆっくりした曲でしばし休憩。緩急の付け方もうまい。

さて。日本人メンバーはその間何をしていたのか。

なんとなくは知っている曲もあるので、とりあえず一緒に踊ってみる。

しかし、アメリカの高校生のようにプロムなんて習慣もないからダンスなんて踊れないしちょっとリズムに乗ったとしてもステップがぎこちないしカッコイイ振りなんて出来ないの承知で努力したけどあれなんかこれ古めかしいダンスになっているしていうかルワンダ人ダンスうますぎなんだよ手足が長くて綺麗なんだよ日本人にはムリだよじゃあいっそビデオカメラでも回してこの楽しい様子を撮っていた方が団体的に有意義なんじゃ(以下略)……と言う訳でつまりはうまく踊れませんでした。楽しかったけどね！！！！！

名古屋

ピースあいち

企画者:片岡美月

参加者: Maurice, Alfred, Adolphe, Alice, Clarisse、大山、岩井、片岡、久保、品川、宮本、ピースあいちスタッフの方々

【企画目的】

ピースあいちでは、市民が中心となり、地域を軸に、戦争を経験した世代から新しい世代への記憶の伝承や平和へのアピールを続けている。この企画では、ピースあいちの戦争資料を見学することで、戦時下に一般市民がどのような状態にあったのか、空爆は人や街にどのような被害をもたらしたのか、原爆など世界的に有名な破壊活動の他にも、このような悲劇が市民を襲ったということを、ルワンダ人学生と学び、改めて戦争、紛争、虐殺の非人間性について考える。

更に、戦争体験者を含むピースあいちのスタッフの方々との交流を通して、当時の状況をより深く知るとともに、戦争の記憶伝承の大切さや、市民が平和構築活動のうえで果たすべき役割などについて学ぶ。また、この交流では、日本ルワンダ学生会議側からも、ルワンダのジェノサイドと当団体の理念についてのプレゼンを行い、第二次世界大戦とルワンダのジェノサイドという、現在も人々に傷を残すふたつの出来事を共に語り合うことで、双方に新たな視点が生まれることを目指す。

【企画概要】

場所:ピースあいち
日時:2010年12月21日(水)
内容:ピースあいち資料館見学
　　交流会

【報告】

◆ピースあいち資料館見学

まず、ピースあいちの二階に展示されている資料を見学させていただいた。通訳はピースあいちスタッフの方がして下さった。戦争の全体像や実際に使われた爆弾、愛知県を初めとする空襲の被害などと共に、当時の生活の様子が、数多い寄贈品を通して生々しく伝わってきた。ルワンダメンバーだけでなく、日本人メンバーも、第二次世界大戦を本で読むより身近に感じた。

◆交流会・ピースあいち及び日本ルワンダ学生会議の説明

一階の交流スペースで、日本ルワンダ学生会議とピースあいちのスタッフの方との交流会を設けた。まず、ピースあいちの方から、資料館の設立の経緯などをお話いただいた。次に、代表の大山から日本ルワンダ学生会議の理念及びルワンダについてのプレゼンテーションを行い、その後に昨年の渡航についての報告を行った。

◆交流会・ルワンダ学生のジェノサイド体験談及び全体に対する質疑応答

ルワンダ学生の Adolfe(アドルフ)からジェノサイドの定義について、Alfred(アルフレッド)から 1994 年のジェノサイドの体験を語ってもらった。Adolfe による話しは予定されていたものではなく、本人が是非話したいと希望したことから急遽決まったものだった。感情的にならず、真剣に語る2人の言葉に、会場全体も深い緊張に包まれた。

質疑応答では、ルワンダ学生から、日本の戦後の経済復興がどのように行われたか、あるいは未亡人、孤児に対してどのような政策が取られたか、といった質問が出た。ルワンダ国内でもジェノサイド後の経済復興や社会的弱者の救済が第一の課題であったので、似たような状況にあった日本がどのようにこの問題を克服し、現在のような国になったのか興味があったようだ。

ピースあいちのスタッフの方からは、どうしてルワンダであのような大規模なジェノサイドが起こったのか、その'大義名分'は何だったのか、という質問をいただいた。それに対しては、ルワンダ学生が植民地政策と民族分断の観点から、また日本学生が昨年の渡航で得た経験を基に、解答した。

時間が大幅にオーバーするくらい、充実した交流会であった。ピースあいちのスタッフの方々には、通訳や会場のセットなど、大変お世話になった。

【感想】

企画者:

ピースあいちのスタッフの方々からは勿論、寄贈品の数々からも、あの時代を風化させてはいけないという人々の意志を強く感じた。そしてその気持ちはルワンダ学生も同様で、大阪のレセプションパーティの時もそうであったが、本当にルワンダの虐殺のことを'正しく'知ってほしいという気持ちが伝わってきた。確かに私達は、過ぎ去ってしまった事実には成す術もない。だが、だからといって、全くそれらと関わりを断って良いわけではない。彼らの意志を汲み取り、現在と未来のために役立てることは、活かすことは、できる。

また、ピースあいちは、本当に市民の皆さんの気持ちと助け合いで成り立っていた。その気持ちが細部にまで行き届いていた。このような、行政主体ではなく、市民主体の平和構築施設が全国各地にできれば良いと思う。

参加者：

Ishimwe Alice

ピースあいちの活動の目的は、第二次世界大戦をはじめ、何が戦争で起きてしまったかを説明し、その歴史を 2 度と世界中のどこにおいても繰り返さないために、平和へのアイディアを広めていくことだった。

資料館の見学後、ディスカッションの前に日本のメンバーがルワンダについてピースあいちのスタッフに簡潔に説明してくれた。そして、アドルフが「ジェノサイドとは何か」をルワンダの歴史と合わせて説明してくれた。そのあと、アルフレッドがジェノサイドをどうやって生き延びたかという経験を私たちに話してくれた。アルフレッドはルワンダとウガンダの国境からそう遠くないところに住んでいたため、ウガンダに辿り着いて助かることができたのだと話していた。

Habimfura Maurice

12 月 21 日、名古屋市立大学で午前中に行われた学生会議の後、午後からはピースあいちという資料館に向かった。訪問に加え、ピースあいちのスタッフの方々とのディスカッションも目的の 1 つであった。そこで私が知ったのは、戦争の資料館であるピースあいちの開館の第 1 の目的は、自国の戦争の歴史を知らない日本の若い世代に、歴史を知ってもらうためであるということである。彼らは歴史を知る必要がある。次の目的として、より深く日本の歴史を学びたい人々に詳しく知ってもらうためであるそうだ。

ピースあいちのスタッフの方々と JRYC のメンバーが参加したディスカッションでは、ルワンダ人 2 人がジェノサイドの経験を話した。そして平和への主張や、JRYC・ピースあいちに関係する問題について、参加者全員で意見を共有した。個人的な意見として、ピースあいちが行っている平和を説き勧めるという活動を、日本だけではなく世界中の他の地域にも拡大し、主導して行っていくのがよいのではないかと思った。

池上　純平

歴史を知り受け入れたものと、そうでないもの。その差を感じた時間であった。

私達学生会議のメンバーにとって、いつも笑顔を絶やさないアルフレッドが話してくれたサバイバーとしての体験談は、驚きを伴う話であった。もちろんそれはピースあいちのスタッフの方々にとってもそうであったのだろうけれども、時折頷きながら、どこか納得するように話を聞いているように見えた。それは単に年齢の問題ではないと気付くのにそう時間はかからなかった気がする。やはり私達は戦争を知らない世代なのだな、そう思わざるをえなかった。

「嬉しかった。」

ピース愛知の帰り道、一緒に歩いていたアルフレッドに体験談の感想を聞かれ、そう答えると、彼は怪訝な表情をした。「友人としてより君のことを知れたので、話してくれたことが嬉しかった」と、その言葉の意味を説明すると、アルフレッドはもう少し詳しく自分の話をしてくれた。なぜスーツを好んで着ているのか、なぜ時に独身でいいというのか。その日の彼の話と繋がって、アルフレッドのことをもっと近く思えた。

トヨタ自動車訪問

企画者:大山　剛弘

参加者:岩井、池上、大山、片岡、久保、宮本、Maurice、Alfred、Adolfe、Clarisse、Alice

【企画目的】

「東洋の奇跡」と呼ばれた、戦後の日本の経済発展。その中でも自動車産業の寄与は極めて重要だ。総輸出額の半分以上を機械類の輸出が占め現在でも機械類の製造に日本経済の依存するところは大きい。その中でも自動車が9割を占める輸送機器の割合は最大だ。

自動車輸出も国内では飽和状態だが、海外に向けてはますますその数を増やしている。安定性・サービスの充実、今や世界を走る自動車の3割は日本車だ。ルワンダを含めたアフリカ諸国でも存在は際立つが、その中でも抜群のネームバリューを示す TOYOTA。ルワンダ現地の自動車の半数以上にもそのロゴが浮かぶ。一方で、ご多分にもれずこの分野でも、中国・韓国やインドなど新興国との競争は年々熾烈を極める。まだ品質の問題も指摘される彼の国々の製品であるが、ほんの40年前には"made in Japan"は、低品質(低価格)の代名詞であったことを考えれば、脅威を感ぜずにはおれない。

今回の訪問ではトヨタ自動車の工場・資料館見学を通じてその技術と精神、知識・教訓を日本ルワンダ両国の今後にどのように繋げるかを考える機会とすることを目的とした。

【企画概要】

訪問場所　トヨタ自動車・元町工場、トヨタ会館(共に愛知県豊田市内)

日時　2010 年 12 月 22 日　11:00-16:00

①元町工場見学

②トヨタ会館見学

時間	活動内容	活動場所
10:00	トヨタ会館見学	トヨタ自動車 トヨタ会館
11:00	元町工場見学	トヨタ自動車 元町工場
15:00	終了	

【報告】

◆トヨタ会館(企業博物館)見学

工場見学までは時間の余裕があったので、まずはトヨタ会館内を見学。展示は社史から始まり、織機メーカーとしてのスタートからハイブリッド車(以下 HV)の普及、世界戦略、実際の車の展示などがある。進出した地域に根ざした企業であること、環境意識の高い企業であることなどが理念として紹介されていた。印象的だったことをいくつか。

「地域に根ざした」とは使い古されても聞こえるが、トヨタはそれを名実共に徹底的に行っている企業の一つである。国内の工場は全て愛知県に、またその殆どが豊田市内に存在し、トヨタ町など「自治体」の構成で地域連帯を高めようとの試みも行う。同県の大学・高専にも多くの支援を行う。「地域と企業」というと仏・トゥルーズのエアバスや米・シアトルのボーイングが思い浮かぶ。しかし(私の勉強不足もあるだろうが)前者も国内にいくつか拠点はあり、後者も本社が(軍需転換から政治的優位なシカゴに)移転など、大企業でトヨタのようなある種拘りを保ち続けている企業はあまり聞かない。名古屋から1時間強の山奥の豊田は殊更有利な土地でもないだろうが、徹底した地元指向には驚くばかりであった。

又 2010 年国内売上台数 No.1・カローラの売上記録を超えたプリウスを象徴に、先進国を中心に自動車は HV 時代に近づいている。構想は 100 年以上も遡るが、ここ数十年まで技術的困難・石油の比較的安定した供給があったこと等から本格的な開発は進められなかった。研究費が「無駄遣い」言われた時代さえあったが開発を進め、流れにすぐに乗る準備をしていたことにトヨタの先見の明を感じた。前日の僕のプレゼンでもHVを紹介したとき、国で見ないのでピンと来ないと言ったルワンダン達だが、ここで具体的な技術構想やトヨタの政策を紹介され（展示の 3 分の1近くは HV 関係であった気がする）、その「本気度」を理解したようだった。

その後はロボットのトランペット演奏を見るが、これも「余興」とはいえない。それこそ、一般的に「余興」であったハイブリッド車開発が今や中心戦略であり、その実現には高度なIC技術が求められたことを考えれば、足元だけでなく先を見据えた柔軟な取組みこそ企業の将来性を作るのではないか。その先取の精神を忘れないことが時にチェットベイカーばりの甘い音色を出す人工知能を前にそんなことを考えた。

◆元町工場見学

会館の見学を終え、バスに乗り元町工場へ。日本発の本格乗用車工場で国内のクラウン、クラウンマジェスタ、エスティマ、カムリ、マークＸの全てを生産、月産 13,000 台（年産 156,000 台）の能力、160 万㎡の敷地に 4,700 名の従業員が働く。

自動車工場の生産工程は、①プレス工場（鋼板を切断、プレスしてボディ部品を成形）、②溶接工程（ロボットによる溶接で、クルマに部品をつける）、③塗装工程（ボディ洗浄後の、下・中・上の 3 回塗装）、④組立工程（ボディに部品を取り付ける）であり、見学は②溶接→④組立工程で行われた。

まずは全体の流れの説明を受けた後、溶接工程で無数のロボットが複雑でかつ無駄のない動きで火花を散らし多くの部品を接合するのを見学する。そのロボットの動きを見ながらアルフレッド（コンピューター工学専攻）が「僕もあんなロボットをプログラムする事になるから」、と食い入るように見ていたのが印象的だった。

次は組立工程だが、まずトヨタと言えば有名なのがカンバン（Just in time）方式だ。詳しくは各々調べて頂きたいが、在庫状況を逐一シェアし「必要なものを必要なときに必要な分だけ注文する」、具体的には約 4 時間の在庫しか持たない方式だ。トラブルが起きたら生産が止まるリスクを冒してでもムダな在庫を排除する点である。工程の日常的ムダの徹底的排除が、緊急時に備え日頃から労力を割くより有益だ、という方針が分かる。さらに生産順序がバラバラであり、クラウンならクラウンを連続生産するのが効率的と思うが、クラウン→マークX→エスティマと、車種・色もバラバラに生産する。この受注した順番の生産からも、無駄な在庫を持たない方針を重ね重ね感じた。

また印象的であったのが、現場社員の意見を積極的に取り入れていること。例えば工程で車体のドアは全て外されていたが、それも元々は現場の要望であった。案は常時募集され、採用されると 500 円～20 万円の報酬がある。他にも世界中で模倣されたシステムを多く持つトヨタ生産方式だが、「自働化」という信念の元に従業員の人間性やインセンティブも重んじる体制がトヨタを底から支えてきたのだと確信した。「世界一の自動車企業の工場」と聞いて、機械ばかりを想像していたルワンダの学生にとっては新鮮に映ったようであった。

【感想】

企画者:

冒頭から驚いたのは、失礼を承知で言えば、本社のビルが企業規模を考えると小さく見えたことだ。いわゆる大企業のイメージからは少し遠く感じられた。しかし見学を終えた後ではそれをむしろ謙虚さの象徴として感じた。工場内を、誰にでも無料で公開する自信と余裕の裏には、最先端の技術・地域への貢献意識・ムダの排除と従業員の人間性の両立があることがよく理解できた。日本的な発想を推し進めた末に市場の制覇に至った経緯をルワンダの学生と目の当たりに出来たことは誇らしくもあった。

アルフレッドを中心に見学の節々で自分がここにどのように関わっていくかという意見をルワンダ側から多く聞けたことは、日本人には見られず個人的には大きな刺激だった。個人的にも将来の技術者志望者として背筋の伸びる思いであった。

Ntaganda Alfred

私たちは 2010 年 12 月 22 日、早朝に起きて、タの本社を訪れた。本社はとても広大であった。まずは展示室(トヨタ会館)に向かった。ここには多くの人が訪れる有名な(元町)工場もあるのだという。そこで、先進技術を用いていかにトヨタが CO2 排出を抑える、電気も動力源とする(ハイブリッド)自動車を製造するのかを学んだ。ソニーなど多くの企業同様スパイを恐れているのだろうか、展示室では写真を撮れたのだが、会館外の敷地・工場では許されなかった。

次に私たちは工場に向かった。そこでは人間とロボットが共同作業で、部品を配置していき、そして車を完成させるのかを見た。技術者と話す機会がなかったのは残念であった。

Ishimwe Alice

トヨタ自動車は豊田佐吉(とよださきち)によって創設され、彼は会社の名前をその名前と区別するため、また洗練された響きを持たせるためトヨタとした。

トヨタでは真新しい車たちの間を歩いたが、その中にはスポーツカーや、ハイブリッドカーがあった。HV 車はガソリンと電気をエネルギーとして併用する自動車で、二酸化炭素の排出が少なく、環境に良い。

トヨタの使命は、海で泳ぐ魚のように(たくさんいるけれどもぶつからない)、事故を起こさない車を作ること。

東京

NHK訪問

企画者:滝田　智子

参加者:岩井、井上、岩垣、大山、海原、片岡、ガン、久保、品川、嶋田、滝田、古屋、宮本、Maurice、Alfred、Adolfe、 Clarisse、Alice、Aline

【企画目的】

NHKは公共の報道局として長い歴史がある。地理的にアフリカと日本は遠く、日本市民におけるアフリカのイメージ作りに報道される情報の影響は大きい。これからの日本とアフリカ、ルワンダの協力関係を強化するにはメディアの役割は重要と言える。大虐殺が起きている時のルワンダ、そして現在復興したルワンダは他国においてどのように報道されているのかを知ることは、ルワンダ人にとって自国を客観的に見る機会となる。

ディレクター・記者は中立な立場でルワンダを見なければならない。そして、日本のメディアだからこそ放送できるルワンダの側面もある。それらがどのような切り口で描かれたのかを知ることができれば、新たな視点でルワンダについての報道を見ることができる。

【企画概要】

訪問場所　NHK（日本放送協会）東京本社

日時　2010 年 12 月 24 日午前

時間	活動内容	活動場所
10:00	国際放送局見学 エコカー中継車紹介	NHK 東京本社
11:30	長尾さん、小林さんによる講演/座談会	NHK 東京 本社内会議室
12:30	スタジオパーク見学	NHK スタジオパーク
12:40	終了	

また、今回お話を伺った小林雄さんが 2010 年秋にルワンダに取材に訪れて作成なさった、IT に関するドキュメンタリー（2010 年 11 月 26 日『ニュースウォッチ９』にて放送）を事前のミーティングで日本人、ルワンダ人メンバーで見ておき、今日のルワンダが日本でどのように放送されているかの一例を共有した。

【報告】

◆国際放送局内見学（担当：笠原さん）

国際放送局は NHK の海外向けのサービスを行う局であり、テレビサービス以外にラジオやインターネットサービスも行っている。

局内では LED スポットライト、液晶を導入して電力消費量を減らしていることや、鏡を多く使って広く見せる工夫についての紹介を受けた。NHK ワールド TV では英語で日本やアジア、世界の情報を 1 日 24 時間世界中約 120 ヶ国に配信している。この番組で実際に使用するスタジオのセットを見せて頂き、天気予報のコーナーで使用する映像技術についてお話いただいた。

NHK のワールドラジオでは、BBC ラジオの 38 ヶ国語には及ばないものの、日本のアジアの目を通した世界のニュースを日本語、英語を含む 18 ヶ国の言語で放送している。

◆環境に配慮した中継車（担当：松岡さん）

NHK では CO2 の 30%削減を目標としており、その取り組みの一環で日本初のエコカーの中継車を導入している。NHK と三菱の共同で作られた電気軽自動車で、ガスが排出されず、静かなため、『おはよう日本』のような朝の情報番組の中継車として実際に使われているそうだ。

◆講演・座談会

NHK 報道記者でルワンダに取材経験のある長尾香里さん、小林雄さんにお話を頂いた。
長尾さん、小林さんの経歴のご紹介、ルワンダを訪れた感想をお話頂いたのち、『アフリカンドリーム』という番組でルワンダがとりあげられた映像の一部を拝見した。この『アフリカンドリーム』という番組は、貧困、HIV とは違う、アフリカの new image を伝えるために作成されたそうだ。

50、60 年前の戦後復興期の日本はルワンダと似るところがある。また、今の日本に欠けている、強力なリーダーシップ、大きくて明白なビジョン、先へ進もうとするモチベーションをルワンダは持っている、と長尾さんはおっしゃった。

アフリカの豊富な天然資源を求めて、インド、中国、ブラジルのような新興国はアフリカ進出をすでに行っており、日本は遅れを取っている。NHK のアフリカに関するドキュメンタリーに多くの視聴者が関心を示すことから、日本人のアフリカへの興味関心の高まりを伺えるそうだ。しかし実際にルワンダにいる日本人は少ない。小林さんがルワンダに取材でルワンダを訪れた際も、中国人、韓国人、インド人を見かけても日本人を目にする機会は無かったという。

質疑応答では、ルワンダ人メンバーから、アジアとアフリカの対等なパートナーシップを期待しているという話が持ち上がった。ルワンダ人から見て、BBC や CNN の作成するドキュメンタリー

はHIVや貧困、政治の崩壊など、アフリカの悪い側面に焦点が当てられたものばかりだという。その一方で小林さんのドキュメンタリーはフェアなものと捉えられたようだ。さらに、ルワンダのメディアにも話は及んだ。ある新聞社が政治スクープを発刊しようとしたが、コピー会社や輸送トラックが弾圧被害にあったことなどを、長尾さんや小林さんはルワンダで耳にしたという。二人は、報道の自由があるといえるまで、まだ時間がかかるのでは、とおっしゃっていた。

【感想】

企画者:

先方のお仕事の都合上講演会の時間が希望より短くなってしまったことやジェネラルな日本とアフリカの関係についての話が多くなってしまったことは残念であったが、小林さんが作られたドキュメンタリーを事前に見ていたため、日本のメディアがどのようにルワンダを伝えているかのアイディアをルワンダ人が持って今回の企画に参加できたのではないかと思う。メディアに関する方々から見たルワンダの現状に関する話やそれを番組にした経緯は個人的に興味深かった。実際にニュース番組や天気予報コーナーで使用されるスタジオセットの体験をした時のルワンダ人メンバーの表情が忘れられない。

参加者:

古屋亮輔

ルワンダのジェノサイドはラジオ放送による扇動が一因になったと言われていることもあり、「メディア」はこの団体でしばしば議論になる話題である。そのため今回、日本の公共放送として最も信頼されているNHKを訪問して「報道の自由」「ジャーナリズム」といったキーワードからルワンダのメディアとの違いを見つけたかった。その点、映像合成や中継車など放送技術の紹介に留まってしまった感があったのは少し残念だった。

見学中、局員の方が他言語放送について「日本など海外からのニュースの方が信頼される国もある」と語っていた。日本にいてはあまり意識できないことだが、先進国としての責任や、事実を伝えるべきメディアの責任の大きさを改めて考えることになった。

ところで、NHK やディスカッションを通じて思ったことだが、ルワンダ学生たちは日本のメディアにおける国際的なニュースの少なさにとても驚いていた。W杯のテーマソングを歌った歌手が知られていなかったり、新聞の国際面が2ページしかなかったり。グローバル化グローバル化と叫んでいる日本のメディアこそ、グローバル化が必要なのではないかと感じている。

Habimfura Maurice

東京渋谷のNHK本社を訪れ、説明を受けた。東京本社には一万人、日本全国には二万人の社員がいる。NHKはエコカーの使用や、他国の言語での放送を進めている点で進歩していると感じた。スタジオ見学の後、二名の記者とアフリカ、ルワンダ全般についてディスカッションを行った。

Ishimwe Alice

NHKのスタジオは小さめだが、広くみせるために鏡が多く使われていた。また照明や中継車も環境に配慮したものだった。

ソニー株式会社訪問

企画者:海原早紀

参加者:池上、岩井、井上、岩垣、大山、海原、片岡、ガン、久保、品川、嶋田、志賀、滝田、古屋、宮本、Maurice、Alfred、Adolfe、Clarisse、Alice、Aline、SONY 社員の方々、橋谷義典氏

【企画目的】

戦後間もない 1946 年に資本金 19 万円と従業者若干 20 名で始まったソニー株式会社は日本を代表する企業に成長した。ソニーの歴史を通して企業家・技術者の精神を学びたい。

今までの学生会議でルワンダの学生は日本の経済発展に大いに興味を示してきた。現在、経済成長の真っただ中のルワンダの学生が知りたがっていることは、第二次世界大戦で敗戦国となった小国日本がなぜ世界2位を誇れる経済力を持てるようになったのか、ということである。その答えの一つとして、世界で活躍している日本のメーカーを紹介したい。

また日本人学生にとっても、過去の日本人の偉業について勉強することで、将来社会に出る身として日本企業の世界展開について、そして社会における企業と自分たちの使命について考えるきっかけとなるだろう。

【企画概要】

日時:2010 年 12 月 24 日(金)

場所:ソニー株式会社

参加者:日本ルワンダ学生会議メンバー

(ルワンダ人 5 人、日本人 15 人)、ソニー株式会社社員の方々、総務・秘書部担当 VP

内容:ソニー株式会社　本社見学

総務・秘書部担当 VP

橋谷義典氏との意見交換

【報告】

◆ソニー株式会社

1. FeliCa

私たちが使う Edy や PASMO に搭載されている非接触 IC カードのシステム。

2. ザイリスキャンバス

複数の画面が集まって一つの映像を映し出していた。このように角度や並びの順を自由に設置できる機能を、マルチディスプレイ機能という。

3. ハイビジョンカメラ

二つ並ぶ 3D 撮影用のカメラを使って、私たちはスクリーンに 3D で映し出される自分たちの姿を見せてもらった。2010 年 FIFA ワールドカップでは全ての試合をソニーのカメラで 3D 撮影していた。

4. コントロールルーム

ソースモニター、レコーダー、スイッチャーなど、試合の記録と編集に必要な機器が揃っていた。

5. カメラ

私たちにはなじみのない XDCAM という大きなカメラは、ニュースの撮影等で活躍しているそうだ。

6. ビデオ会議システム

会議室に入り、別の部屋にいる男性と画面越しに会議ができるシステムを体験した。高画質、安定したコネクション、容易な操作などの特徴を持つこのシステムでは、画像と声が一秒で相手に届き、自然な会話が可能。

7. コンシューマー向けエレクトロニクス

サイバーショットのデジタルカメラで 3D の写真を撮った。カメラを横に動かして「スイングパノラマ」の機能を使えば、ワイドな 3D 写真を撮ることができる。次にメガネを装着して 3D テレビを観た。

8. エンタテインメント

プレイステーションを体験することができた。超高精細な 4K 映像や、3D の画面で映画のワンシーンを見ることができた。

◆総務・秘書部担当 VP　橋谷義典氏との意見交換

総務・秘書部担当 VP の橋谷氏と一時間に渡る意見交換を行った。以下の 3 つの主なトピックについて私たちから質問をした。

1. ソニーの創業・理念について
2. ソニーの海外展開について
3. ソニーの将来的なビジョン・直面する問題について

(Q)創業時の理念について。

(A)戦時中に軍事用の装置や通信機器を作っていた技術者たちが、戦争が終わると「平和な世界」のために人々の日常生活を豊かにする製品を作ることを志し、それが今のソニーの文化になっている。Happy,exciting,enjoyable を届けることを大事にしている。

(Q)海外の拠点について。

(A)現在、200 以上の国や地域に拠点を持っている。アフリカでも、北部や南部に販売拠点がある。

(Q)ルワンダに拠点を持たないのはなぜか。

(A)ソニーが新たな地域に展開していくには、その製品を使う人が十分にいることが前提にある。そして、購入し使ってくれる人々のために、商品のサポート他を行う話事業で、グローバル市場への展開を目指したジョイントベンチャーである。

(Q)アフリカはたくさんのチャンスがある市場だと思う。まさに成長している今、早めに参入することが得策ではないのか。

(A)アフリカももちろん市場として重要だが、輸入関税の問題と、独自の販売チャンネルを私たちが持っていないこともアフリカに挑戦することを難しくしている。これからはビジネスパートナーを探していかなければならない。

(Q)最近力をつけてきた韓国勢の強みは何か。

(A)韓国や台湾は国が産業育成に力を入れていて、設備投資などに対して税制優遇がある。また、10 年前に韓国ではメーカーを合併して総数を減らしたことにより国際競争力がついた。

(Q)海外マーケットを狙うにあたって、人材に変化はあるか。

(A)今ソニー市場で単独国では日本とアメリカが大きい。地域としては欧州とアジアが大きな市場である。その他地域をこれから伸ばしていく。そのためにも会社は外国人の採用を増やしたいと言っている。

(Q)日本の市場は縮小するのか。

(A)新しい商品を開発すれば今後も日本で売れることは確かだが、グローバルなシェアで言うと売り上げは減るだろう。

(Q)ソニーが今後も展開する上でどんなオリジナリティを大事にするのか。

(A)それは難しい質問だが、'creativity'を大切にして、ニーズを感じ取りアイデアを商品化しなければならない。創業当初は炊飯器を試みたこともある。今や、エレクトロニクス事業に加え、音楽や映画、ゲームあるいは金融にも事業が拡大している。その都度、人々に欲しいと思っていただけるものやサービスを開発し、創造してきたからだ。

【感想】

企画者:

日本人も思わず歓声を上げて喜んでしまうほど、ソニーの商品に圧倒された。「便利」「快適」「楽しい」といった、皆が欲しいと思うことが商品になっていて、まさに make .believe の理念が商品にされていると思った。

私はこの企画を担当するにあたってソニーについて調べ他メンバーへ事前プレゼンテーションも行ったが、音楽や映画のフィールドに進出している点が他のメーカーと違い興味を持っていた。今回の企画を通して、それらの拡大は「楽しい」モノ、「ワクワクする」モノを届けたいというソニーの考え方から発展した事業だという事が理解できた。

また 1950 年代からラジオをアメリカへ輸出して成長した歴史が印象的で、ソニーは海外マーケットへ積極的なイメージがあったため、修理のニーズがあってから販売拠点を作るという流れを消極的に思ってしまった。しかしこれが確実に輸出を成功させる一般的な方法なのか、今後個人的に他の企業と比較してみたいと思った。

ルワンダ学生の感想を読んでみると、本当は工場を見学したかったという声があり、単純に打ち合わせ不足・企画ミスであったことを反省している。しかし「ソニーが成長した秘訣を知る」という企画目的を達成できたか振り返ると、商品を実際に体感し橋谷氏の言葉を聞く事で、消費者のニーズに敏感に事業を拡大しながら、happy を人々に届けるという軸を大切にしている姿勢が、その答えとして見えてきたのではないだろうか。

参加者:

Ntaganda Alfred

12 月 24 日に SONY 本社に訪問した。レセプションから案内されて荷物を置いてからショールームを見学した。私たちは日本語・英語の二つのグループに分かれた。

ショールームでは 3D 技術、VAIO パソコンやデジタルカメラを見学した。SONY はワールドカップのオフィシャルパートナーだったので、

SONY の商品が南アフリカから世界の人々を楽しませていたのを見る事ができた。

ショールームではセキュリティのカメラや他にも商品を見た。SONY は映画製作・音楽作成にも進出していて歌手や映画俳優を輩出している。

ショールームの見学が終わった後、記念に写真をとってミーティングルームに入り、橋谷氏と意見交換をした。日本人学生からは就職機会に関する質問、ルワンダ学生からはアフリカ市場に関する質問が上がった。橋谷氏は 1945 年の SONY の設立について、日本を代表する電気メーカーであることを話してくれた。また、今日本では競争に勝つのが難しいと教えてくれた。

Amahoro Clarisse

12 月 24 日に私たちは渋谷の SONY を訪問した。私の国でも SONY の名が入った商品がたくさんあったので SONY について興味があった。

カメラやラジオを組み立てる機械などを見学すると思っていたが、訪問は私のイメージとは違っていてカメラやワールドカップのセキュリティなど、完成商品を見学した。

記念の写真を撮ってから、この会社の社員と SONY について、そしてルワンダへの展開の可能性について話した。このディスカッションの結論は今の段階では見えていない。

しかし、SONY の方々の暖かい歓迎はとても嬉しくて、もし私が会社を持つことがあれば SONY の女性社員のような日本のサービスを社員に学ばせたい。

大学生として活用できる技術を SONY から学ぶことはできなかったので、アルフレッドのような工学を勉強する生徒は技術者に会うことが有意義かもしれない。

ピースコンサート

企画者：井上真希

【企画目的】

①ジェノサイドのルワンダにて継続的に行われている平和構築の事例として、ルワンダ国立大学のダンスグループ、「INDANGAMUCO」の活動を中心に紹介し、特に若い世代の市民による平和構築の在り方について日本の人々に理解を深めてもらうこと。

②来日したルワンダ国立大学学生に、ルワンダで起こったジェノサイドの歴史を個人的見解や自らの体験を交えて語ってもらうことによって、ルワンダにおけるジェノサイドの重大性を日本の人々に再認識させること。

③個人の「経験」という視点でその事件を振り返ることで、いかにジェノサイドがルワンダにいた人々それぞれの人生に影響を与えたのか理解を深めること。

④伝統文化の力でもって「みな同じルワンダ人」としての絆を深め平和構築を行う INDANGAMUCO の伝統舞踊を実際に披露す

ることによって、ルワンダ文化の魅力を人々に感じてもらうこと。
⑤国士舘大学法学部教授でアフリカの音楽文化に詳しい鈴木氏とルワンダ人学生との座談では、アフリカの音楽やダンスなどをはじめとするエンターテイメントの魅力を語る中で、それらが平和にどのように寄与しているか知ってもらうこと。
⑥ブース出展では、来場者がアフリカ・平和構築・文化交流などさまざまなフィールドで活動する市民団体や学生会議団体のことを知る機会を与え、団体同士および団体と来場者間のネットワーク構築を実現させること。

【企画概要】

イベント名：「ルワンダ　ピースコンサート　～ダンスから平和をつくる！～」
日時：2010 年 12 月 27 日（月）
開場 17:30　開演 18:00　閉演 21:30
場所：アムウェイ東京
公演内容：ビデオ上映、講演、ダンス及び演奏、プレゼンテーション
出演者：鈴木　裕之氏
SUGEE 氏
神田　亜紀氏
多摩美術大学ジャンベ部の皆さん
ルワンダ国立大学学生
JRYC 日本人メンバー
ブース出展団体：アフリカ平和再建委員
NPO 法人日本紛争予防センター
ビッグイシュー日本
赤々舎
Cafaire
日中学生会議
日本コリア未来プロジェクト
参加費：（前売り券）学生 500 円
一般 800 円
（当日券）　学生 700 円
一般 1000 円

【報告】

◆企画のきっかけ

日本ルワンダ学生会議主催のピースコンサートもおかげさまで早くも第三回目となった。第一回は 2009 年 12 月に「JAPAN☆AFRICA MUSIC＆DANCE SHOW　～文化でつながる日本とアフリカ～」というテーマでアムウェイ東京にて開催し、第二回目は 2010 年 8 月に「平和」をテーマにルワンダ国立大学大講堂で行った。そして、同年 12 月に再び東京・渋谷にて、これまでお世話になってきた SUGEE 氏をはじめとする多くの方々のご協力の下、第三回目のコンサートを実現させることができた。今回は下記の企画目的からも分かる通り、「平和構築と伝統文化」の関係性により焦点を当てたイベントとなった。

第一部　ルワンダ人の背景と思いを知る編

◆はじめの言葉 と日本ルワンダ学生会議の紹介

司会の神田亜紀氏の明るいご挨拶によってイベントは開幕した。まず、日本ルワンダ学生会議代表、大山剛弘により開会の挨拶と JRYC の活動理念やルワンダの基本情報や歴史を紹介したプレゼンテーションの後、夏に開催されたピースコンサートの模様が上映された。

◆ルワンダ国立大学学生による講演

アドルフが代表して、自身の生い立ちと 1994 年のジェノサイドの際に家族を亡くした経験を生々しく語ってくれた。また、モーリスは INDANGAMUCO の活動や理念について語ってくれた。通訳は日本ルワンダ学生会議の海原早紀が務めた。

◆パネルディスカッション

西アフリカの音楽文化を中心に研究していらっしゃる文化人類学者の鈴木裕之氏（国士舘大学教授）をお迎えし、ルワンダ人メンバー5人、司会の神田亜紀氏、日本ルワンダ学生会議から久保唯香が参加してパネルディスカッションを行った。テーマは「アフリカの若者とエンターテイメントの関係について」とした。通訳として同じく日本ルワンダ学生会議から海原早紀、ガン・クリスティーナ、片岡美月、滝田知子が参加した。

第二部　ルワンダダンスを感じる編

◆INDANGAMUCO によるルワンダ伝統舞踊の披露

第二部では最初に INDANGAMUCO によるルワンダの伝統的な歌とダンスが披露された。ルワンダの伝統衣装につつまれた彼らはとても生き生きとパフォーマンスしていた。

女子は伝統工芸品のアガセチェを持ちながら男子は長い杖を持って激しく踊る。第一部でアドルフのジェノサイドでの経験やモーリスのINDANGAMUCO への想いを聞いた後だったので、いかに彼らがルワンダで受け継がれてきたダンスや歌が重要なものか伝わってきた。

◆多摩美術大学ジャンベ部の皆さん

ジャンベ部の皆さんには 2009 年 12 月のコンサートでもご協力頂いたので、今回で二回目のピースコンサートへの参加だった。以前、来日したモーリスはジャンベ部の中で何名かメンバーを憶えており、リハーサルで再会したときはとても嬉しそうにしていた。色とりどりのアフリカンなコスチュームを着たジャンベ部の皆さんのパフォーマンスは、やはりダイナミックで、実に鮮やかであり、会場を盛り上げて下さった。

◆SUGEE 氏によるジャンベ演奏

SUGEE さんはルワンダでの体験やピースコンサートについてのお話の後、ジェンベの演奏を披露して下さった。ルワンダでのピースコンサートでも感じたが、SUGEEさんの演奏は全人類に共通するエネルギーや一体感を感じさせてくれる、魂のこもった演奏であった。また、今回は日本の歌謡曲の曲もあり、私の祖母や母など年配の方々も喜んでいたようだ。

◆コラボ・ポフォーマンス

最後の演目として、INDANGAMUCO・ジャンベ部・SUGEE さん・JRYC の日本人メンバー二名によってコラボレーション・パフォーマンスを行なった。ジェンベのリズムに合わせて、INDANGAMUCO のルワンダの伝統舞踊の振りがあったり、ジャンベ部の西アフリカ風の振りがあったりして、観ていて体が自然と動いてしまった。観客には INDANGAMUCO やジャンベ部のメンバーに促され、一緒に踊って下さる方もおり、会場はとても楽しい雰囲気になった。

◆日本ルワンダ学生会議のメンバーによる終わりのことば・平和を願うメッセージ

ルワンダ側JRYC代表としてアリースが、平和を願うスピーチを発表し、続いて日本側 JRYC 代表として井上がピースコンサートの終わりの挨拶を行なった。

◆駐日ルワンダ大使によるお言葉

昨年に引き続き来場して下さった、駐日ルワンダ共和国大使館よりアントワンヌ・ムニャカジ・ジュル大使からお言葉を頂いた。

第三部

◆出演者・ブース提供団体・来場者を交えた交流会

公演終了後、ホール前のホワイエにて交流会が行なわれた。今回、数々の団体の方々にご協力頂き、ブース展示は充実したものとなった。来場者はルワンダコーヒーを手に各ブースを回って、ブース出展団体の活動を知ることができただろう。また、ルワンダ人学生も会場を訪れた方々と楽しそうに歓談していた。

【感想】

企画者:

井上 真希

今回のコンサートで最後に来場者の方々に書いて頂いたアンケートには下記のような非常に嬉しいご意見があった。
「ルワンダに対するイメージが変わった。」（大学生）
「若い人達の平和への思い、エネルギーを感じた。」（社会人）
「ルワンダという国を知れたことが良かった。音楽のもつ力の素晴らしさを体感できた。」（社会人）

私は主催者として、今回のコンサートを通し、来場者の方々に普段あまり考えることのない「平和」という概念やルワンダの歴史や人々について少しでも想いをめぐらせて頂くことを目標にしていたので、このようなコメントを頂き大変光栄である。また、同時に素晴らしいコンサートの開催にご協力頂いた全ての出演者の方々、ブース出展団体様、そして日本ルワンダ学生会議のメンバーに感謝の気持ちでいっぱいになった。コンサートの最後に、「来年もまたルワンダでピースコンサートを行なうので是非来て下さい！」と宣言してしまったので、また体当たり精神で本当に実行するかもしれない。その時は皆さんよろしくお願いします！

久保 唯香

パネルディスカッションでは、学生会議では触れられない学生生活の様子や音楽（ダンス）に対する考えを知ることができた。さらに、鈴木氏の素晴らしいコメントと神田さんのエスコートで、通訳の関係上スムーズな会話は難しかったものの、生きた対談をつくることができた。「ツチとフツの間に文化的、音楽的な違いはあるのか。」事前にいただいていた鈴木氏からの質問を、躊躇した。ツチとフツを分けるようなきき方をして失礼にあたらないか心配だった。しかし、ツチとフツの本質に違いがないなら文化的差異はさほどないはずとのご指摘を受けた。問題を避けるのではなく、あえて掘り下げて考えていくことも平和へのアプローチかもしれないと、思わぬところで学んだ。また、鈴木氏の流暢なフランス語にルワンダ人メンバーは嬉しそうに答えていた。その表情は、言語文化の力の強さを物語っていた。

司会の神田氏は共演者を十二分にひきたてるため研究に熱心にとりくんでおられた。非常に短時間で出演者の癖や人格を見抜いてこの企画を盛り上げてくださり、その姿勢には大きな刺激を受けた。しかし、時間が短くルワンダ人メンバーの素顔を来場者に伝えきれなかった。それだけに、ルワンダ人メンバーはじめ出演者の言葉のひとつひとつに意味があったことに気づいていただけていたら光栄である。

SUGEE 氏

2010 年もルワンダから INDANGAMUCO のメンバーが来日、素晴らしいダンスを見せてくれた。今回は、五名全員参加のパネルディスカッションもあり、彼等の伝統舞踊に対する思い、そして仲間に対する思いが熱く語られた。
ジェノサイド後のルワンダの平和構築そして社会復興は、時に"奇跡"と称されるが、これは正しく隣人と仲間への優しい思いやりが基礎となっているに違いない。
許し、そして互いに認め許し合うという、決

して簡単ではなかったであろう彼等の平和への叡智は、これからの未来の地球の平和の方向性を指し示す新しい光になることは間違いない。
そして、僕が選ばせて頂いた京都の民謡″竹田の子守唄″で実現したと音とダンスのコラボレーションは、日本とルワンダに共通した命の喜びと感謝を、互いに確かめ合えた素晴らしいパフォーマンスとなった。
彼等と同時代に生き交流を持たせて頂けることを、心から誇りに思う。

ビッグイシュー日本による講演

企画者:嶋田康平
参加者:岩井、池上、井上、岩垣、大山、海原、片岡、ガン、久保、駒板、品川、嶋田、滝田、古屋、宮本、一般参加者
Adolph, Alfred, Alice, Clarisse, Maurice, Aline

【企画目的】

貧困というのは、紛争や犯罪といった人間社会のひずみの元凶である。日本にもルワンダにも、どの社会にも、程度の差こそあれ、貧困は存在する。本企画では、言葉で語るだけではわからない貧困の深層を、身をもって学び、どうしたら貧困を解決していけるのかについて、建設的な視点から考察することを第一の目的としている。

ビッグイシュー日本は有限会社であり、企業という組織形態からホームレスという貧困の問題に挑戦している。政府でない民間の力で貧困という社会的問題を解決するという新しい手法に注目し、企業＝利潤追求という定式にとらわれることなく、企業の可能性を探求し考察する。

【概要】

会議室にビッグイシュー日本東京事務所マネージャーの佐野未来さんと、品川駅で販売されている販売者の石塚秋一さんをお招きし、3時間（質疑応答を含む）にわたり講演していただいた。

佐野未来さんは、ビッグイシュー日本の共同代表である佐野章二さんの娘であり、創設メンバーの一人である。創設当時、既にビッグイシューという事業を確立させているロンドンやスコットランドのビッグイシューに訪れ、その理念や手法を学ぶだけでなく日本での設立への協力を取り付けるなど創設を大いに支えた。

石塚秋一さんは、平日は品川駅で、休日は巣鴨駅でビッグイシューを販売するホームレス販売者である。石塚さんは、ただビッグイシューを販売するだけでなく、オリジナルのペーパーを挟み込むことで、常連客を獲得している。

時間	活動内容	活動場所
12:00	集合	東京ボランティア市民活動センター会議室（飯田橋）
13:00	佐野さんと販売者の方の講演	
15:00	グループ会議	
16:00	学生会議	
18:00	終了	

【報告】

◆佐野未来さんによるプレゼン

◇社会的企業という新しい企業の形態について

社会的企業の特質は、株主や社長ではなく、社会的目的の下に、社会問題の解決のためにビジネスやコミュニティに再投資されることである。ビッグイシューであれば、ホームレス問題という社会問題の解決を目標としている。社主・社長の収入や企業の存続という企業の宿命に縛られるのではなく、むしろ自らの事業がなくなることを理想に掲げるというのも特徴の一つである。ホームレス問題の解決の具体的な方法は、自ら抜け出せる機会を作り出すことである。チャリティーのような「与える人と与えられる人」ではなく、社会問題の中にいる人をその問題を解決する主体とすることが、一方的な政府支援やNPO法人と異なる点である。有限会社ビッグイシューは、社会的企業としてホームレス問題の解決を使命とする一方で、売れる雑誌を作るという一般の出版社と同様のビジネスとしての使命を負っている。

◇アフリカでのビッグイシューの展開

南アフリカのケープタウンやナミビアでは、ビッグイシュー日本より以前からビッグイシューという事業が展開されている。ナミビアでは、雑誌販売以外に印刷業によって雇用を創出している。最近ではケニアでもビッグイシューが始まった。

◇ビッグイシューのしくみについて

①路上生活。

②販売者に登録。

③10 冊無料提供。

④販売。

⑤完売すると 3000 円。

⑥次回から 140 円で仕入れ、300 円で販売。

⑦ご飯を食べる、簡易宿泊所に泊まる。

⑧貯金。

⑨住居と住所を確保し定職を探す。

一日の売り上げの目標は 20 冊で、その売り上げでなら何とか屋根のある場所で寝られる。実際に独立するのは難しく、特に⑧⑨は容易ではない。現在は 156 名の販売者が登録している。

◇昨今のホームレス事情

ホームレスの数は 15759 人と示されるが、これは行政機関が目で見てカウントした数であり、数でみれば年々減っているように見える仕掛けが施されている。また、ビッグイシュー販売者の年齢平均は 11 歳若返っており、ホームレスの若年化が示されている。日本においてはホームレスに対するセーフティネットとして失業保険と生活保護の二つしか存在するが、失業保険は 6 ヶ月間払い続けなければ給付されないため、実際に機能しているか疑問である。

福祉事務所に行くと、若くて健康なことを理由にハローワークに行くことを勧められる。しかしハローワークに行くと連絡先や住所がないため相手にされず、福祉事務所に行くよう言われる。再び福祉事務所でハローワークに行くよう言われ・・・というたらいまわしが続くのみで現在の福祉体制ではセーフティネットとしての役割を全く果たしていない。また、たとえ仕事を見つけ再就職したとしても、月給での支給であれば家賃や食費を直ちに捻出できない。加えて住居の賃貸には保証人が必要であるため、職が見つかったからと言ってそれが自立に直結するわけではない。路上生活から脱出するにはこれらの多くの

困難を一度に乗り越えなければならないわけである。

ビッグイシューは今後、保証人事業を行うもやいなど他の団体と連携しながら、この問題に取り組んでいく。

◆石塚さんによる講演

品川駅港南口でビッグイシューを売る石塚さんは、佐野未来さんのプレゼンを熱心に聴きながら時折深くうなずいていた。佐野さんのプレゼンが一通り終了したところで、自らのご経験を交えながら、ホームレス問題について語っていただいた。

石塚さんは、離婚後、十数年続けていたリゾートでの職を辞め、職を求めて東京に来た。「調理師の免許を持っていたが、年配ということでなかなか就職できず、路上生活を送るようになった。ビッグイシューとはたまたま夜回りの人が置いて行ってくれたチラシを見たのが最初の出会いだった。」その頃、行動を共にしていた友人とともにビッグイシューの販売を始めた石塚さんだが、販売当初は苦しい日々が続いたという。「ビッグイシューの販売を始めた頃はとても恥ずかしい気持ちだった。でも、辛抱強く立っていると、お客から『熱いけどがんばってー』と温かい言葉を聞けるようになり、涙が出るほどうれしかった。」

ホームレス販売者の敵が雨と寒さである。雨の日は雑誌が売れないので、石塚さんは新聞を読んだり図書館に行ったりする。また、冬は寒くて外で眠れないので、マックのようなファストフード店に宿泊することもある。

最後にご自身の今後についても言及された。「自分は落ちるところまで落ちてしまっており、一生懸命にやっていれば物事はいい方向にいくのではないかという思いで販売している。ビッグイシューという雑誌は薄っぺらい雑誌かと思われるかもしれないが、いろんな人の人生が乗っていて人生の大切さが詰まっているのでぜひ買っていただきたい。」

◆質疑応答

ガン

今、生活保護を受けていますか。

石塚さん

正直言って受ける気はないです。生活保護を受けると、離れた家族に連絡が行ってしまいます。自分の子供がそれを聞いたら・・・かっこつけるわけじゃないが、ぼくより生活保護を受けなければならない人がいっぱいいるじゃないですか。とりあえず今は元気なので、受けません。でも、お金だけもらって図書館でぼけーっとしている人やパチンコをするもいますね。

佐野さん

そのような人たちのせいで、保護をとると自分が怠惰だと思われるというのも生活保護が受けにくい原因の一つです。

クラリス

最初の 3000 円や収入を一度に使ってしまった場合は、それをサポートする機会を設けていますか。

佐野さん

基本的には何もできないが、どうしてもの時は雑誌の貸し出しを行っています。十冊売っていなくなってしまう人もいっぱいいますが、6 か月後に現れたらまた登録して無料配布を受けられる。

アリーン

ビッグイシュー以外に収入を得る方法はありますか。

石塚さん

事務所に掲示板があり、そこを見てアルバイトの仕事を探す人が多いです。仕事のほとんどは廃

品回収。車の免許を就職活動に利用する人もいます。

アリーン

無料で泊まれる場所はあるか？

石塚さん

噂ではお寺があるみたいです。

佐野さん：教会とかも噂では。他にはチケット制のシェルターがあります。そもそも、空き物件がたくさんあるのでそれを利用すれば路上生活者は簡単に減るんです。

アドルフ

税金はどうなっているのですか。

佐野さん

ビッグイシュー日本は会社なので払っています。ビッグイシュー基金のような NPO 法人は、税金は払っていません。

【感想】

企画者：

まず、この場を借りてお忙しい中ご協力下さったビッグイシュー日本の佐野未来さんと販売者の石塚さんに心から感謝を申し上げます。

私は、この企画を通してビッグイシューという事業を学ぶ前は、ホームレスの人々は自分で好きで路上生活をしている怠惰な人々という認識を持っていた。しかし、企画を進めていく中でほんの数人のホームレス販売者の方と言葉を交わすうちに、その認識が全く間違っていることにすぐに気付いた。働きたい、社会とつながりたい、誰かと話したい、そんな人間として当たり前の思いを否定することが誰にできるのだろうか。

やる気があり、元気もある人間が働けない。それが、この国が抱える制度的病理である。年齢が若かくとも、一度路上に出てしまうとそこから抜け出すことは非常に難しい。非常事態時の無利子融資や保証人代行など、障壁を一つ取り除くだけで事態は容易に好転するように思う。しかし、政府は「ホームレスになるのは自己責任」という意識を植え付けることで、この問題を隠蔽し続けてきたのだ。私が、この問題を「病」と言うのはこのような理由からである。

経済発展の末路に悪意に満ちた人工的な貧困があることを、今後の活動でも継続的にルワンダの学生に伝えていきたい。

参加者：

Ntaganda Alfred

日本のホームレスの人々は、ルワンダで言う“Mayibobo”と似通ったところがあり、日本・ルワンダどちらの国においても私たちが改善し、解決するべきである。学生としてこれらの問題に取り組むのはとても難しいことであるが、ホームレスの人々の生活を改善するために提言することができると考える。

Habimfura Maurice

私たち JRYC メンバーは現在のビッグイシュー日本のマネージャーと意見交換をした。彼女はパワーポイントを用いてとてもわかりやすく設立経緯や仕組みについて講演してくれた。

さらに、石塚さんというホームレス販売者の話を聞くことができ、僕はこの企業をとてもすごいと感じるとともに、貧困問題を解決に貢献するためにこのようなプロジェクトを始めようと思う。

井上　真希

私は以前からビッグイッシューの読者だったので、今回の企画の実現は非常に喜ばしいことだった。佐野さんの講演からは、「ホームレスの方々と私たちの間に売り手・買い手という対等なビジネスの関係を築く」という目的の下に、これまでビッグイッシュー日本がどのように数々の困難を乗り越えてきたのか知ることができた。ホー

ムレスの方々と私たちの間に売り手・買い手という対等なビジネスの関係を築く」という目的の下に、これまでビッグイッシュー日本がどのように数々の困難を乗り越えてきたのか知ることができた。ホームレスになる過程を表した「カフカの階段」の説明では、仕事や家族、住居、お金を順番に失い、ホームレスになってしまうのは簡単だけれど、元に戻るときはそれらを一つの大きな階段として乗り越えなければならないという困難性を理解した。近年は若いホームレスも増加してきていると知り、自分自身だってホームレスになる可能性があると実感させられた。

今回、何よりも印象深かったのは講演してくださった販売者の石塚さんのお人柄である。クリスマスの日、私達の何名かは打ち合わせのために品川駅のマクドナルドで石塚さんと一時間ほどお話する機会があった。石塚さんはホームレスの方と思えない清潔な印象でユーモア交じりにご自身の人生や普段の生活を語って下さった。お話から、石塚さんがとても家族を想いでビッグイッシューと共に前向きに頑張っていることがひしひしと伝わってきた。帰り道、石塚さんは再び駅前に立ち、お客さんと楽しそうにお話しているのを見ていて、純粋に石塚さんと出会えて良かったと感じた。

ビッグイッシューは本来の目的であるホームレスの方々の自立を応援するだけでなく、お客さんとの何気ない会話によって、あったかい人のつながりを感じさせてくれる力がある。私はそんなビッグイッシューと石塚さんをこれからも雑誌を買うことを通して応援していきたいと思った。

【ディスカッションテーマ】

①ルワンダにビッグイシューのような事業は展開できるか。

そもそもルワンダで必要か、日本とルワンダには貧困自体が異なるのではないか。

②貧困を解決するため、私たち大学生ができることとは一体何か。

●結論

①ルワンダでビッグイシューのような事業は展開できるか。

◇グループ A

ルワンダでは成功しない。まず、識字率の低さが指摘された。また、マーケットが小さいので大きな影響力とはならない。ホームレスの定義については、ルワンダでは虐殺によって親を失った孤児がホームレスになっており、日本の現状と差がある。

雑誌でなく他の製品なら十分に可能性があり、そもそもルワンダ人は社会的企業について雇用を創出する企業とほぼ同義に捉えており、一般企業と社会的企業の線引きの認識は薄い。そのためルワンダでは、社会事業を始めることは起業することと同じで資金調達や共感の獲得も容易である。

◇グループ B

ルワンダでは成功しない。日本のホームレスは大人であるが、ルワンダのホームレスは子どもが多い。子どもたちは、ホームレス問題の当事者として自立を求められる存在ではなく、教育を受けることのほうが優先されるべきである。教育という最低限の社会保障は民間にではなく国によってあまねく普及させるべきものである。また、識字率という壁がある。文字を読める人間が少なければ、雑誌の需要は当然に低い。加えてキガリのような都市部でしか雑誌は売れないため、販売競争の激化が予想される。

しかしながら、徐々に他の国々の支援に頼ら

ない利益の創出手段を考案していかなければならない。

②私たち大学生にできることは何か。

◇グループ A

直接的に大きな影響力を与えることは難しい。ルワンダでできることは、ラジオを通じて教育を広めることが挙げられた。資金的にも「できること」は限られており、その中で学生がすべきことは社会問題・貧困問題を学ぶことである。

◇グループ B

ルワンダの大学生は、自らも裕福とは言えないので、他の人の貧困を解決するために活動するのは難しい。しかし、インダンガムチョ(招致したルワンダ人が所属するダンスチーム)は、貧しい家庭に一週間ほど訪問するオープンハートアクティビティを実施している。また、ラジオを通じて提言を行うことは可能である。

一方日本では、ビッグイシューなどの既存の社会的企業の周知活動であれば大学などのコミュニティで可能である。また、ビッグイシューを買うことも学生にできることである。

コラム　モーリス、大田家と再会　古屋 亮輔

2010 年 12 月 19 日、大阪市内の某ホテル。
この場所で、11918 キロの距離を越えた友人たちが、再び出会った。
片や、ハビムフラ・モーリス。日本ルワンダ学生会議、ルワンダ側代表。
片や、大田家。鳥取県倉吉市在住。この日母一人、子二人。
ルワンダの大学生と鳥取の家族を結ぶもの、それは 2009 年 12 月のホームステイだった。
第 3 回本会議に参加したモーリスは、訪問先の鳥取において、大田家でのホームステイを経験した。
それからわずか 1 年。これほど早くの再会を誰が予想しただろう。
彼らの間には、記憶の褪せる暇さえなかった。
そして再び日本にやってきたモーリスへの大田家からのプレゼントは、私たちに笑顔をもたらした。

「こえでおぼえるあいうえおのほん」

彼ともっとたくさんのことを話したい。そんな純粋な想いが大田家を動かしたようだった。

広島

広島平和記念資料館見学・小倉さんの講演

企画者：嘉積楓花

参加者：今泉、藤原、藤沢、宮本、ガン、嶋田、片山、片岡、海原、古屋、岩井、品川、大山、久保、山崎、Maurice、 Alice、 Clarisse、 Adolfe、 Alfred

【企画目的】

1945 年、ヒロシマは第二次世界大戦で世界初の被爆地となった。また。ルワンダでは 1994 年、100 万人が命を奪われる大虐殺が起こった。日本、ルワンダ両国の学生が広島平和記念資料館を見学し、また、被爆された小倉桂子さんのお話を伺い、当時の状況について深く考える機会を得る。そして、お互いに忘れてはならない歴史を負う国の者として、どのような平和構築が考えられるか、それぞれのその後の復興や和解について、共通点や相違点を通して学びあいたい。

両国の学生が、戦争・虐殺を振り返り、平和とは何かを考えることで、当団体の活動理念である相互理解を深めることを目的とする。

【企画概要】

日時：2011 年 1 月 4 日

9:30	原爆ドーム、原爆資料館見学
12:30	昼食

14:30	小倉桂子さんとの対談、ディスカッション。（～）
17:30	企画終了

場所：広島平和記念資料館、広島原爆平和資料館地下 1 階研究室2

内容：①広島平和記念資料館見学

②原爆資料館で小倉桂子さんに被爆の体験を伺い、平和構築に関する対話をする。

【報告】

◆小倉さんのお話

被爆当時、私は 8 歳、小学校二年生でした。爆心地から 2.4 キロの家にいました。兄が街にいて被爆しましたが、後に家に戻った際に広島に何がおこったのか、家族に伝えました。

当時、小学生を見かけることは少なくなっていました。なぜなら 3 年生から 6 年生の児童は田舎の方へ疎開をしていたからです。そして、疎開していた人々は被爆者とは呼ばれず、被爆手帳をもらうこともできなかったので、無料治療などを受けることができませんでした。

私には、2 人の兄がいました。一人は中学 2 年生で、もう一人は小学校 6 年生でした。二番目の兄は疎開していました。私は小学校 2 年生だったので残っていました。当時は今のような夏休みはなく、夏も学校へ行っていました。中学生は学徒動員で工場などで働いていました。そうして働いていた中学生の 80%がなくなりました。国の命令で始めざるをえませんでした。そうです、誰がリーダーになるのかということが大切です。どのような教育をしていくのか、決定するのはリーダーです。今日では私たちの意志によってリーダーは選ばれます。

しかし疎開していた私の兄は、原爆投下の様子を明確に知らされませんでした。差別ともいえるでしょう、彼らは「その時町にいなかったのだから被爆者でない。」と言われていたのです。数ヶ月前、は65年経ってはじめて兄の気持ちを聞いてみたのです。すると兄は「誰も聞いてくれなかったことを尋ねてくれてありがとう。」と言いました。当時広島市はどこもかしこも食糧不足で、子どもたちはみな雑草を取りに行っては「これはいける、これはだめだ」と判別していました。また、内緒で野菜をとったり、農家の人にご飯をもらったりしました。はだしのゲンのようなことが実際にあったのです。

原爆のすぐ後には、広島市に簡単に立ち入ることができませんでした。ですから疎開していたこどもたちは何が起こっているのかわかりませんでした。そして、町に戻ってきた子どもたちは、家がなくなってしまっていることも多く、ストリートチルドレンが現れました。

戦争中、中学生たちは大人の手伝いをしていました。兄も、あのとき、今の平和公園で手伝いをしていたらなくなっていたでしょう。先生が広島駅の近くで手伝いをするように仰ったので生き残りました。学校では、厳しい軍事訓練なども行っていました。また、学徒動員で働いていた女子生徒の 60%がなくなったのです。兵隊たちと働いていた女子生徒が、なくなりました。そしてそれらの犠牲は「戦争は子どもたちによって支えられた」ということを意味しているのです。被爆者には、学徒動員の生徒、7 歳以下の子どもや、主婦が多かったのです。その被害者たちが原爆の後しばらくどんな悲惨なことがあったのか知らないでいたことはあったのですが、これにより次の世代に両親が原爆の話をしないというケースも出てくるようになりました。これは今日のディスカッションでお話ししたいことです。

私は通訳をしていて、映画作りなどため、たくさんの被爆者に会ってきました。被爆者の中には「原爆の事はなんでもたずねてください、お答

えしましょう。でも、カメラを持って家の近くに来たりしないでください。」という人がいます。彼らは将来子孫にあらわれるかもしれない症状を心配しているのですが、まず一番恐れているのは差別です。もしかしたら、自分が受けた原爆の影響を娘が持っているかもしれない。それを知られてしまっては、結婚ができないかもしれない。そういった次の世代の事を心配して、話さないのです。私の家でも、友人も話しませんでした。しかし、今年、私ははじめて小学校の同級生に会いました。65 年ぶりに会って、やっと「今までどうだった？」と聴けたのです。兄も最近になって話し始めました。しかし子や孫たちへの心配は絶えません。これも核兵器の特徴なのです。しかしだからといって誰もが原爆の事を語らなければ、だれにも「どうやって耐えたのか、克服したのか」伝わりません。ですから、次の世代に伝えることが必要なのです。また、被爆者が親になったとき、こどもになにか症状があると、放射線とは関係ないかもしれないのに、自分を責めてしまったりすることもあります。

私が言いたいのは、被爆者もひとによってまったくその心境はいろいろであるということです。私だけが被爆者ではなく、私のような人がたくさんいるのです。また、私が話すことで子孫に影響が及ぶことを心配しています。私の娘は、ほかでもなく隣人、日本人が言う噂を恐れているのです。

わたしがアメリカに行ったとき、エノラゲイの飛行機が展示されていて、私は恐ろしくて泣いてしまいました。地元のメディアがニュースでその様子を伝えました。私の兄弟もそれを見ていてそのニュースで、私の名前は“Keiko Ogura”ではなく“Keiko Yamane”で放送されました。そのニュースを見た私の兄弟は、私の旧姓を知らない彼の妻に知られなくてよかったと、そんなふうに言うのです。また、私の息子は東京に住んでいます。息子は私のニュースをみて悲しんでいたようですが、彼の友人は言いました、「お前のお母さんじゃないのか。お前は被爆者の子どもなのか、どこか悪いところはないのか」と。彼の最も仲の良い友人でさえそういうのです。日本人でさえ。原爆と遺伝子の異常の関連を考えてしまうことをやめてみませんか。

このように、今に至るまで、被爆者が原爆の事を隠してきました。しかしその恐ろしさを抱えてまでも話したことは尊敬に値します。私の経験もそのようなことの一つです。

原爆が投下された日、私は父に嫌な予感がするからと言われ、家にいました。そして、あの瞬間、青白い激しい光に包まれました。明るすぎて何も見えません。人々はそれをピカ(光)ドン(音)とよびました。私は地面にたたきつけられました。家々はまず崩れて、そして炎に包まれました。広島城も軍の基地もすべて破壊されました。兄が、あのとき空をみていて、B－29 だったということ言っていました。また、B-29 は毎晩飛んできていたので私たちは音を知っていました。来るたびに防空壕へ行って、帰って来て寝ようとしてもなかなか寝付けませんでした。しかし B-29 は原爆を落とす以前には広島に一度も爆弾を落としませんでした。私たちは広島が安全なところなのだと思っていました。そして、原爆が落ちてから兄が伝えたことはよくわかりました。イメージしにくいかもしれませんがあなた方が博物館で見たような、皮膚の焼けただれた人々がたくさんいたのです。それからしばらくは父親や近隣の大人たちは死体を運び、その火葬に忙しかったようです。またひどい臭いもしていました。

小学校では滑り台の上にのぼっていた子どもがひどいケロイドを負って、亡くなったそうです。また滑り台にいても、上に登っていなかった同級

生は被爆したものの、回復しました。しかしあのとき、運動場にいたことを隠そうとしてきました。彼女は私にこう言いました。「なぜ学校にいなかったの、さぼっていたの。」しかし、私は学校へ行っていなくて幸いでした。

戦後、私たちが恐れていたのは、アメリカ兵とオーストラリア兵でした。放射線ではありません。その恐ろしさを知りませんでしたから。兵士らは女子に乱暴し、また、皆殺しにすると聞いていました。

父の知り合いで山間に住む人のところへ疎開しました。市内では食料も十分にありませんでした。闇市が開かれていて、米軍基地からの流し物がものすごく高い値段で売られていて、とてもおいしいものでした。たくさんの子どもたちが米兵と仲良くなりました。私も中学生のときに、治療所で治療の手伝いをしました。治療ということだけならばよいのですが、克服となると難しいものです。私が治療に参加したことも家族の中ではいえませんでした。皆の反応が気になるからです。

皆、何を恐れるかというと、日本人による差別でした。これに対してできることというのは、日本人が話し合い、理解することです。そして、私に話して下さった方が皆言うことですが、「大きな違いがあることがわかりますか。広島だけでなく他の色々なところでもお年寄りは見えない心の傷を抱えていることを分かってほしいです。彼らはその傷を伝えることをしないのです。」

まず、知ることが大切です。そして、あなた方が広島へ来て帰った時に何を伝えるか、ということを考えなければならないのです。

◆対談

Maurice

ありがとうございます。私たちに、広島のためにできることを考えたいです。まずルワンダに帰って人に伝えたいです。子どもたちが大きくなって、これをみて知れば、二度と繰り返すことはないでしょう。

小倉さん

そうですね。しかし私たちの世代はそろそろいなくなることが心配されています。できる限り長生きしたいです。伝え続けるためには、若い人が伝えなければなりません。あなたは話を聞きましたから、あなたには説明する責任があります。このようなすばらしい時間を持つことができて、伝えることができてうれしいです。

日本の方々に聞きます、最近、広島に来る人は日本の若い方がへっていて、外国人が増えているということですが、どう思いますか。

片山

今回、初めて被爆者の方にお話をうかがって大変ショックを受けました。日本人は大人も子供も広島だけでなく長崎などへも行くべきだとおもいます。

小倉さん

広島は美しい街に再建されました。建物は作り直せます。生存者、特に若い女性は何十回と整形手術をします。傷は前より良くなって、彼らは日に日にそのことを忘れていきます。

「もう憎しみや戦争はいらない。」と思うようになるのです。「戦わずよい友人であれ。」と、おばあさんは言います。なぜなら恐れや憎しみが貪欲さや疑いになる。それがはじまりです。若い人たちはまず憎しみを抱かないことです。ふつうの生活を望むのならば、そんなおばあちゃんたちの小さな小さな声を聞くことです。若いあなた方にはできるはずです。

また、市民革命などが起こったときに、隣人はスパイじゃないだろうかといった疑念を持つことも起こりかねないと思うのですが、それを避ける

ために、ルワンダで行っている教育はありますか。どのようなものですか。

Adolfe

はい、ルワンダでは、経験から学ぶことをしています。共有するために、小学生から、互いのジェノサイド時の状況を話し合ったり、グループでディスカッションをします。

小倉さん

いろんな世代の経験者のかたと会われる機会はありますか。

Adolfe

あります。ルワンダでは、若い世代の人たちもジェノサイドを経験していますからそれぞれの経験を話し合います。

小倉さん

素晴らしいですね。では、どのように平和活動を進めたいと考えていますか。いま、あなた方はルワンダと日本で素晴らしい関係を持っていますが、それをどんなふうに活用できるでしょうか。

山崎

昨年の夏、小倉さんがおっしゃっていて興味を持ったのですが、自分の経験や意見を外国の学生だけでなく日本の学生と共有することもよいと思います。

小倉さん

そうですね。英語は難しいものですが、しかし日本語でこそ学べることはありますし、日本語の文献を読むのもよいでしょう。皆さんは日本の将来を考え続けるべきです。なぜなら、被爆者に残された時間は限られています。私たちは「死ぬ前に、何か残さなければ。文章か、写真か、音楽をつけて、詩を残そうか。絵をかこうか。」などと考えています。それらは広島の活動をどのように共有するかということの良い例です。広島市立大学の学生らは被爆者の肖像画をつくろうとしています。おおきなものです。それを完成させるために、一人の被爆者の人に何度も何度も会います。これも大きな活動の一つです。他にも、若い人々が様々なところで演じたりするのも、その一つですね。

若いあなた方なら、どんな方法でも可能でしょう。ただ、メディアはしばしば影響力が強すぎることがあります。だから、草の根の活動というのは大変良いものだと思います。

久保

ただ、大学生にとって、戦争や平和について学ぶのは難しいと感じます。なぜなら小学校や中学校で平和学習などがありますが、高校生や大学生になるとそういった時間がなくなってしまいます。日本は今平和なので、私たちはあまり深刻に考えることをしません。それは問題だと思います。なので、この時間は大切だと思います。

小倉さん

お年寄りも、新しい端末なんかを持つようになって贅沢を好むようになりました。平和の構築は難しいですね。最近の若い世代の人々の中には何をしているのか私にはわからない人もいます。あなたがたはそうした人々とは違うと思いますが、ルワンダから来られた方のように真剣に考え、そして話してほしいです。それらは小さなことですが、影響力があります。話さなければ意味はありません。聞いた話をかえって最低でも 3 人にはなしてください。

広島には資料館があります。ルワンダにも資料館や図書館なんかはありますか。

アドルフ

はい、あります。記念館で、ジェノサイドの事がわかるところです。若い人々がおとずれるべきです。

小倉さん

行きましたか。

ルワンダ人日本人数名

はい。

小倉さん

それはすばらしいですね。他の国の人々が何に苦しんできたかどのように再建されたか知るための近道は町だけではなくその人々の心に触れることです。また、言語はとても大切です。広島で外国の方が日本語を話すのを聞くと嬉しいものです。これも近道です。あることを理解するための道具として。また、このような会議で海外へ行く時は握手がよいでしょう。

ガン

しかし、日本人は恥ずかしがってあまりスキンシップをとりません。

小倉さん

そうですね、でも、相手に少し触れながら話すとすごく伝わると思いませんか。

（一同納得）

小倉さん

そして、理解することは楽しいことだけではありません。悲しいこともあります。大切なことです。人の痛みや苦しみを理解することもあります。辛いことを話すために広島に来るたくさんの人がいます。まず聞くことで相手は信頼します。広島は、ほかの国々のつらいことを受け止める場所です。あなたがルワンダへ行って、学んだとき、あなたの心には他人を理解するおおきなキャパシティーができます。

海原

私が同情するのは、日本には 17 歳を超える人が多くいますが、ルワンダでは、15 年前のジェノサイドで同じ年の人が巻き込まれてしまったことです。

小倉さん

それはどこに不安や怒りがあるかということです。そしてまだまだあなたがたが勉強できるところです。将来、何が起こるかすでに理解しているでしょう。将来の事をすでに準備しているのです。

海原

2009 年の夏にルワンダに行ったとき尋ねられたのですが、広島はアメリカをどうして赦すのですか。アメリカがそのようにしむけたのですか。

小倉さん

アメリカは日本人がアメリカを嫌っていると思っているようです。実際、戦後 20 年くらいは嫌っていたと思います。しかし、教育を受けて歴史を学び、変わりました。アメリカのしたことは良いことではありません。核兵器をつくることをきめた指導者をきらっていました。しかし広島では浄土真宗が根づいていて、人を許すことが自然なのだ、と考えます。日本政府も核兵器を作っていたら使っていたかもしれないとも思います。

【感想】

企画者：

夏に下見に訪れて以来の広島平和記念資料館。すっかり季節は冬となり、そしてなによりルワンダンが共にいる・・なんだか不思議な気分がしながらも、彼らはこの資料館をどんなふうに見るのだろう、と思いながら入館した。私ははじめ、Clarisse と一緒にいたが、ひとつひとつの展示の前で小さな英字の解説をじっくりと読み進んでいく。戦前の様子から展示がはじまるが、それも彼女らにとって興味深いものなのだろう。メモをとり、丹念に理解しようとしている姿が印象的だった。時々、自分が知っていることを伝えたり、展示品の用途を説明すると、熱心に耳を傾けてくれた。館内見学の途中、ボランティアの方が Alice に一羽の折り鶴を渡してくれた。Alice は丁寧にお礼を言い、大事そうに持っていた。ほかにも原爆を生き抜いたアオギリの種子を頂いた人もおり、よ

り彼らの心に残った事だろうと思う。

また、昨年に引き続き、今年も被爆者である小倉桂子さんにお話を伺った。小倉さんは現在HIP という観光客らに英語でガイドをして回るというボランティア団体の代表をされている方で、今年もルワンダ人が来日するので是非学びをともにしていただけませんかとお願いしたところ、お忙しい時期にもかかわらず快くお引き受け下さった。

この場を借りて、もう一度感謝を申し上げたいと思う。本当にありがとうございます。この企画の中で初めて知ったことは本当に多く、その点で有意義だったと言えると思う。もちろん、ルワンダに関してはルワンダでの平和教育がどのようにおこなわれているか、などこの機会でなければあまり聞かれる情報ではないものが多くあった。しかし、原爆に関しても小倉さんが話された被爆者の方の一番の恐怖は日本人による差別なのだという言葉にも改めて気づかされることがあった。被爆者の方やその子孫の方が差別されることがあったという事実は知っていたが、それがいまだ被爆者の方を脅かしているとは思わなかった。

やはり、この経験を語り継いでいくことが同じ過ちを繰り返さないための方法だと思うのでそれが可能な環境を整えなければならない。もっと日本人同士で語り合わなければならないし、それを海外へと発信していくことも我々世代の責任である。ルワンダ人もきっとこの話をルワンダで話したり、同じような問題が起こったとき今日の事を活かして解決が導ければよいと思う。このようなディスカッションを小倉さんとルワンダ人と共にできたことを光栄に思う。

参加者：

Gan Kristina

原爆ドームと平和資料館を訪れるのは 2 回目です。原爆者の方の証言を聞くのははじめてでした。やはり、本や資料館で勉強するのとなまで証言を聞ける迫力は違います。被爆者に対し、様々な差別があるということを考えたことありませんでした。確かに、原爆の後遺症、または遺伝で身体的精神的に障害を持ち、生活に不自由になることは多いだろうとは思っていましたが、彼らは被害者であり、その立場は社会には理解されているだろうと思い込んでいました。小倉さんによると、差別されることを恐れて今も自分が被爆者であることを証言しない人がたくさんいるといいます。原爆の歴史は世界的にも有名で誰もが知っています。しかし、私たちが知っているのは「出来事」の歴史であり、一番の「当事者である被爆者のこと」は何も知らないのではないかと思いました。他の被爆者も苦しみから解放されるように、彼らの現状や経験についてより多くの人に知ってもらい、理解を深められたらと願っています。

コラム① 「AKB市長！」 今泉 奏

１月５日の午後から広島平和文化センターにおいて、同センター理事長のスティーヴン・リーパー氏との対談が行われました。当日はルワンダンもラスト ２days ということもあり、かなりお疲れのご様子。また、日本人メンバーも負傷者多数（おそらく牡蠣の攻撃による）でした。

午前中は山崎と自分のプレゼンがあり、（本当に）軽くリーパー氏の紹介をしてリーパー氏の元へ。我らがＪＲＹＣメンバーは 20 名あまりだが、通された「会議室１」は 200 人は裕に収容できるであろう巨大ホール…広っ…広すぎる。

対談では「核の現在」に迫る議題が話され、ルワンダンも食い入るように話に参加していました。

議論が進んでいく中、リーパー氏から「隣の部屋に行こう！」といきなり言われ、ついて行くと…。

ＡＫＢ（秋葉）広島市長の講演（タフツ大向けとかは気にしない）が！！！！！

※タフツ大学とは秋葉広島市長が教鞭を執ったことのある大学。

当初、広島企画の目玉として「ＡＫＢ市長との対談」を企画したが、多忙な市長であるが故、幻の企画となっていたのだが……。

目の前にいる！！さすが「会いに行ける」ＡＫＢ！！？

会いたかった～会いたかった～会いたかった～ＹＥＳ！！！ＡＫＢ～！

「この出来事を、まだ大阪になじめない学生が『びっくりリーパーさん』と命名したのは、後の話である」。

スティーブン・リーパー氏との討論

企画者：今泉　奏

参加者：スティーブン・リーパー氏（広島平和文化センター理事長）、今泉、藤原、藤沢、宮本、ガン、嶋田、片山、片岡、海原、古屋、岩井、品川、大山、久保、山崎、Maurice、 Alice、 Clarisse、 Adolfe、 Alfred

【企画目的】

大量虐殺を経験したヒロシマとルワンダにおいて、未来志向の平和（文化）構築をいかにして成功させるのかを考える。また、「許し」による和解へのプロセスを学び、今後のルワンダの課題と結び付けて討論を行う。

今回ご講演を依頼したスティーブンリーパー氏は、広島平和文化センターの理事長を務められています。リーパー氏は広島から世界へと平和文化発信の最前線をリードし、「核の現在」をもっともよく知る方であります。アメリカ人としての原爆に対する見解を教えていただき、日米双方の原爆のとらえ方について学ぶ。決して日本側の視点だけにならず、あくまでも「相互理解」を目指した広島原爆の解釈を追求する。

【企画概要】

対談テーマ：「核兵器の現在と未来」

・なぜ原爆肯定派だったのか、そしてなぜ原爆反対派になったのか

・リーパー氏が行う「平和文化」構築の理念

・風化する記憶をどのように後世に伝えればいいのか

・広島やルワンダの「許しの心」を、どのようにして世界に伝えていけばいいのだろうか

・核廃絶におけるアフリカ（ルワンダ）の可能性とその役割

日時：2011 年 1 月 5 日　13:00~14:30

場所：広島平和文化センター

【報告】

◆講演

現在人類は、平和文化（peace-culture）と戦争文化（war-culture）を選択する分岐点にたたされている。前者はアフリカやアジアの国と、欧米が対等な関係を築き、発展していく文化である。後者は欧米の一部（戦争産業など）が莫大な利益を上げ、絶えず戦争を続けなければ世界が回らないような状態を指す。日本から、とりわけ広島からはこの平和文化を発信する平和都市として、核兵器（原子爆弾）について、世界に提言していく責任がある。

平和文化について考える上で大切な点は、戦争をしないという点だけではない。もちろん戦争をしないのは大前提であるが、人類の最底辺の人が生きる権利を持てる状態にならなければならない。そのため平和文化構築のためには、核処理問題から貧困問題、環境問題にまで視野を広めて考えなければならない。

◆質疑応答

Q．核兵器廃絶のためにどのような活動を行っているのか。（場所や方法など）

A．主に核保有国で展示会を行っている。展示会は世界中要請があれば、どこでも資料を送る。もちろん、ルワンダで展示会を行う組織ができ、我々に展示会の要請があれば、資料（DVD や CD や本など）を送付する。また、世界の指導者たちが広島に来るよう呼びかけている。しかし、広島に来られない、もしくは来ない指導者もいる。

そのような指導者は問題である。たとえば指導者が権力を持ち、5 年間核を保有し続けたら退陣させるなどの処置をとらなければならない。このような世界の風潮をつくるために、我々は協力し、不測の事態を避けなければならない。

Q. 平和文化構築のためには、我々はどう変わっていけばいいのだろうか。核廃絶のためにはどのようなステップを踏んでいけばいいだろうか。
A. 我々はお互いのことを思い、妥協点を見つけながら、新しい世界を創造しなければならない。その第一歩として、核兵器廃絶があげられる。核廃絶に向けては先ほど述べたような平和文化に向かう状態をつくらなければならない。世界には戦争を望む人々より平和を望む人々の方が遙かに多い、だから我々が協力すれば必ず戦争文化から平和文化への方向転換ができるはずだ。
Q. 世界には核兵器を持つだけで使わない指導者もいる。彼らは核兵器を外交手段として用いているが。それについてはどう考えるのか。
A. その通り、世界には核抑止論を唱える指導者もいる。たしかに国家間での争いでは、用いることは厳しいかもしれない。それは、お互いに核を持っている状態であるからだ。しかし、テロリストのような国家に属さない人の手に、核のボタンが渡ったときのことを考えなければならない。もともと65年間もの間、指導者たちが戦争で核兵器を用いなかったのは、自分たちに利益がある世界の構造を変えたくなかったからだ。核兵器を一度用いると、世界の構造が変化してしまう。指導者たちはどうしてもこれを避けたい。そのため、国家の権力者でない人に核兵器がわたったときがもっとも危険なのだ。ソ連が崩壊し、アメリカの覇権が弱まる現在、核兵器がコントロールできなくなる状態がくるかもしれない。
Q. クリーンエネルギーとしての原発などの核はどのようにとらえるのか。
A. たしかにエネルギー分野でも、医学的分野でも用いることがある。一見便利にも見えるが、私はそう思わない。ひとつは、残留物の処理方法が確立されていないことがある。我々は今後、ずっと核エネルギーを安全にコントロールすることができるだろうか。放射能はガンを誘発させる。また、核は化石燃料のようにいつかは尽きる。このような核エネルギーを使い続けることは、問題を後回ししているにすぎない。本質的な解決ではない。
Q. あくまでも覇権を握りたい権力者は決して核兵器を手放すことはなく、平和文化に向けて世界が動いても彼らは核を保持し続けるのではないか。
A. もしそのような状態だったら、我々はその世界のシステムを変えなければならない。アメリカなど9カ国が核兵器を保持している。そのため、他の国々も核を持ち、対等な関係を築きたいと躍起になっている。中東の国は核兵器を持とうと必死であり、そこで1カ国でも核を持つことになれば、中東から核の連鎖が止まらないだろう。こうして戦争文化の世界になるのだ。我々は早く「核兵器を絶対持たない」という決心をしなくてはならない。

【感想】

企画者:

被爆者の祖父母を持ち、長崎で生まれ育った自分自身広島訪問は非常に興味深いものであった。当日は午前中に学生会議を 2 つ行い、それからの移動言うこともあり、かなりあわただしく講演がスタートした。講演はまず、各自の自己紹

介から始まり一巡したところでリーパー氏が話し始めた。この企画でもっとも新鮮だった点は、「核兵器の現在」に迫れた点である。小学校から高校までの12年間、8月9日の長崎は常に振り返ることが優先され、現在や未来について考える機会は少なかった。日本（とりわけ広島、長崎）・ルワンダはともに平和都市としての役割、使命を負っていることにも再確認できた。それと同時に、ルワンダ人学生と日本人学生の平和に対する感覚の違いが印象的であった。彼らは幼い頃にジェノサイドを実際に経験し、まだ14年しか経っていない。それに対して、私たちは、原爆はもちろん、戦争を経験したこともなく、日本自体65年もの間戦争がない状態だ。ルワンダ人学生は話のどこかに常に「危機感」が感じられるが、日本人学生であるとどうもそれが感じられないのだ。今回のリーパー氏の講演では我々が少しでもその「危機感」を共有できたのではないかと思う。

私たちは気づいておかなければならない、いつ核兵器が用いられるかわからないという現代を。私たちは知っておかなければならない、核兵器が用いられると世界がどのようになるかを。

【第三章】

日本ルワンダ学生会議　第 5 回学生会議報告

大阪会議

言語について考える……67

日本のサブカルチャー……68

名古屋会議

自動車産業の未来……69

何を食べている？―食文化から見えるもの―……72

東京会議

結婚観……76

マネジメント……77

Japanese Mass Media……80

無縁社会……83

国家の発展に対する文化の貢献……84

ルワンダにおけるジェンダーの平等……86

在日外国人の人権……86

ビッグイシューとホームレス……88

長崎原爆（永井隆博士の一生）……90

日本のジェンダーについて……93

JRYC における協力の理由と方法……94

乳牛を与え飼育することによる貧しい家庭へのサポート……95

ICT Development in Rwanda Education……96

言語について考える

発表者：藤原　稔久

参加者：JRYC＋大阪大学外国語学部スワヒリ語専攻
＋スワヒリ語専攻のネイティブの先生
（アシャ先生）と娘さん

【プレゼン要旨】

言語について深く考えること。相手の国の言語、母語を尊重すること。英語によるコミュニケーションが可能とわかると人は皆、たちまち英語で話そうとする。しかし、世界の言語は英語だけではない。我々は日本語、英語、仏語を流暢に話すルワンダ人にもルワンダ語という母語がある。それを尊重し、知ることによって相互理解をより深める。

【プレゼン概要】

まず、ルワンダで話されている言語の紹介を行った。ルワンダ語(kenyarwanda)、英語、仏語、スワヒリ語が話される。仏語はベルギーの植民地時代に普及、英語は虐殺後に特に広まった。スワヒリ語は東アフリカ地域の共通語として普及している。モーリスは道ばたで(barabarani;スワヒリ語)覚えたそうだ。今回は植民地時代の言語の教育の方法をヨーロッパと日本で比較した。

ヨーロッパ諸国は間接統治の過程で、被支配者層に上下関係を作ることで格差を生み、支配しやすくした。この結果、優遇されるグループとそうでないグループが生まれ、ルワンダの虐殺のような事態につながったと言える。日本の場合は、被支配者層に対して、徹底的な教育を行うことで根本的に日本人と同じような被支配層を生み出そうとした。

【ディスカッション】

テーマ

相手の国の言語で自己紹介してみよう！！ルワンダ人は日本語で、その他の人はルワンダ語で。

結論・提言

結論はない。タンザニア人のスワヒリ語の先生もルワンダ語で自己紹介していただいた。何でも好きなことを言ってよいことにしたので、グループによってどのようなやり取りがあったのかがわかりやすかった。

これはかなり好評で、アイスブレイキングにはもってこいのようだ。参加者のコミュニケーションが明らかにスムーズになったのが見て取れた。

【感想】

発表者：

今回は初めてと言うこともあり、参加する、実際にやってみること、に意義を置いていた。敢えてパワーポイントを作らず、口だけで伝えることを意識した。しかし、使用する言語は英語、しかもたくさんの人の前で緊張する、ということもありとても理想通りにはならなかったことを悔やむとともに、視聴覚資料の重要さも実感した。江戸時代の話をいきなりしても、写真などを見せないとイメージがわかないという指摘をいただいたが、まさにその通りである。

暗いことばかり書いてもいられないのでよいことも書きたい。まず、最も大きかったことは、英語でプレゼンをしたという経験だ。また。自分の専攻であるスワヒリ語とルワンダ語との共通点、類似点を見いだせたことだ。例えばスペイン語で「私の名前は～」は「Me llamo ~」、イタリア語では「Mi chiamo~」両者は非常に似ていることにお気づきいただけるだろう。これ

は両言語ともロマンス語系に属しており、同じラテン語を起源としていることはご存知かもしれない。いわば両者は姉妹なのである。これと同じことがスワヒリ語とルワンダ語でもいえるのである。両言語はスーダン・バンツー語系に属している。数字の数え方や文法も似ている。あまり関係のないことをつらつらと述べてしまったが、それほど私は興奮したのである。

ちなみにルワンダ語で「私の名前は〜です。」は「Nitwa ~」で OK です。

参加者：

Amaburu Adolfe

とても興味深い。日本の歴史についてもっと深く学びたい。

日本のサブカルチャー

発表者：片山　夏紀

参加者：Maurice、Alfred、Adolfe、Alice、Clarisse、片山、岩井、秋田、今泉、嘉積、片岡、片山、久保、品川、藤沢、藤原、古屋、宮本、山崎、一般の方々約 10 名

【プレゼン要旨】

現在日本では、どのような文化が特に若者に支持されているのか、15 枚のスライドにまとめて発表した。

このテーマを選んだ最大の理由は、第 5 回本会議の最初のプレゼンだったので、日本ルワンダ学生会議(以下 JRYC)のメンバーや参加して頂いた一般の方々にとって親しみやすい話題で議論をしたかったからである。プレゼンの狙いは、ルワンダメンバーに日本で流行している文化を知ってもらうこと、さらにプレゼン後のディスカッションを通して、ルワンダではどのような文化が流行しているのかを紹介してもらうことである。

【プレゼン概要】

「サブカルチャー」とは、着物や和食などの「日本古来の伝統文化」とは異なり、現在日本で流行している文化を指す。オタク・フィギュア・漫画・アニメ・AKB48 や KARA などのアイドルグループ・ネイルアート・携帯デコレーション・ソーシャルネットワークサービス(以下 SNS)の一種である mixi や Facebook や twitter、さらに日本のサブカルチャーが海外でも広まっている現状を、画像や映像を多用して説明した。

特に言及した項目は SNS である。Mixi や Facebook は、広くてゆるやかな人のつながりをつくる故に利用者に安心感をもたらし、迅速に情報交換ができるので刺激的である。しかしそれらの利点とは裏腹に、プライバシー侵害や SNS への依存症、自分の日記やコメントに対して返信がないと無視されていると感じて寂しくなるなどの問題が指摘されることもある。例えば 2008 年 6 月に起こった秋葉原無差別殺傷事件では、25 歳の犯人が携帯サイトの電子掲示板に約 1000 回にもわたる書き込みをしていたが、世間からほとんど反応がなかったことで孤独感を強め、殺人予告を書き込むようになった経緯があるとされている。本来は人との交流手段であるはずのインターネットの電子掲示板が、逆に虚しさをもたらし、事件の動機の一つになったのではないかという報道もみられた。インターネットの交流がもたらす長所と短所、社会問題の一例を述べた。

【ディスカッション】

プレゼン後は 5〜6 人の班に分かれて、一つのテーマに沿った議論ではなく、自分の国の文

化について自由に紹介してもらい、話し合ってもらった。一般の参加者の方々の中には、ルワンダの若者も日本と同様、Facebook を利用したり映画を観たりミュージシャンのアヴリル・ラヴィーンを好んだりと、あまり違いがないことに驚いたという意見もあった。それとは対照的に、ルワンダと日本の文化の違いを感じたという感想もあった。また、サブカルチャーだけではなく、着物などの日本の伝統的な文化をもっと知りたかったという感想が、ルワンダメンバーと東アフリカ・タンザニア出身の参加者から寄せられた。日本ではどのようなインターネットゲームが流行っているのか？という質問や、携帯電話の出現が、若者文化も含めて、コミュニケーションの方法を抜本的に変えたという意見もあった。各班がどのような話をしているか見て回ると、「日本の文化は他国の文化を混ぜ合わせてつくられている」と説明したり、プリクラを見せたりと、参加者はそれぞれの方法で自国の文化を紹介したり表現しているようであった。

【感想】

発表者：

例えば「漫画(コミック)」など、日本人にとっては当たり前の言葉でも、ルワンダ人にとっては理解できない言葉がたくさんあり、それらの説明が不十分であったことが反省である。また、映画『電車男』や AKB48 の楽曲を映像で流したが、内容をしっかり理解してもらうために、英語の字幕をつけるべきであった。

そして、反省点も多々あったが、嬉しいこともあった。アドルフが「インターネットを通じたコミュニケーションが時に閉塞感をうむ」という内容にとても関心を持ってくれたり、アリースが学生会議の最終日に「日本で流行っている文化を知ることができて良かった」と言ってくれたり。この発表が、日本を知る一助となってくれたのならば幸いだ。

私は今回初めて学生会議でプレゼンをしたのだが、「視野が広がる」という言葉の意味を実感することができた。様々な意見や質問から、外国人にとって日本社会がどう映っているのかを知った時は、目から鱗が落ちる思いだった。当然ながら、自分の常識は他者の常識とは異なっている。十人十色の考えを拾っていくことこそが、この学生会議の醍醐味であると思う。

参加者：

Abijuru Adolfe

日本の若者文化(youth culture)があるなら、お年寄りの文化(old peoples' culture)もあるのか疑問をもった。グループ内で質問したところ、お年寄りには「若者の趣味が理解できない」と言われることがあるという返答があった。それはルワンダとは異なる点である。ルワンダは老若男女が同じ文化を共有しているからだ。とはいえ、今日では、ルワンダの若い世代は西欧の文化、例えば洋服や歌のジャンルなどを真似する傾向にある。よって、日本や他国と同様に、お年寄りと若者の間で世代間の文化の不一致がうまれてきていることも事実である。

自動車産業の未来

担当者：大山　剛弘

参加者：池上、岩井、大山、宮本、中西、Maurice, Alfred, Alice, Adolfe, Clarisse

【プレゼン要旨】

今回の本会議全体の大きなテーマでもある「日本の産業」の一つの象徴である自動車工業

について、大つかみな状況・未来展望を議論したくトピックを選択した。また、2 日後に訪問を控えたトヨタ自動車のルワンダ人学生への説明も同時に目的とした。特に近年注目されるハイブリッドカーや電気自動車に焦点を当て、自動車と生活の関わり方の未来について、日本・ルワンダ側が異なる意見を出すだろう環境を意図した。

【プレゼン概要】

● **イントロダクション**

まずは、ルワンダ側が「自動車」について持っている意識・印象について確かめたく、日本でポピュラーである様々な車種を紹介した（セダン・スポーツカー・トレーラー・高級車・HV 車など）。またハイブリッド車の概念を説明し、それが日本を初めとする工業先進国でシェアを爆発的に伸ばしている事実・原因を説明した。

● **具体的内容**

HV車とは：2 つ以上の動力源を持つ自動車、日本ではよく電気とガソリンを動力源として持つ自動車を指す。高出力時にはガソリン・低出力時には電気と適切に使い分けることができれば、温室効果ガスの排出を抑えられるとも言われる。但し、バッテリーの生産に大量の温室効果ガスが伴うとの指摘もあり、慎重な検討・新たな技術の開発も求められる。

シェア増大：石油の枯渇が今世紀中来るともいわれ、気候変動問題も顕在化した今、ことドイツや日本といった環境先進国では、市民レベルで浸透が進んでいる。2009年度の国内新規登録車のうち 14.1%が HV 車で、今後は、2010 年はプリウスがカローラの年間売上記録を抜きまたエコカー減税等が後押しとなるなど、更なる普及が進むだろう。

水素自動車などの構想：そもそも化石燃料を使わなければ、排出を極限まで抑えた自動車が作れるではないか、という発想から生まれたアイデアの例として紹介。安全性など現実的には問題を多く抱えるが、真剣に開発を続けている企業・研究者も水面下に多くおり、彼らが次の世代には大きな存在となる可能性もあると紹介した。

モータリゼーションが社会に与えた影響私見だが、2009 年夏にルワンダに渡航した際には、既に都心部には驚くほどの自動車がひしめいていた。ルワンダでも毎年7％の経済成長を見せるなど更にその普及は進むだろう。またその多くが中古の日本車であることを考えても、プラス面では都市・郊外の関係が緊密になる・物資の供給が行き届くなど、マイナス面では環境汚染や騒音（既にキガリ中心部では日本よりよほど顕著であった…）といった現象が再来することが容易に予想される。そしてここでは、日本の得た教訓をルワンダ人学生と共有し、今後の両国の展望を考える上で一つの示唆となればと思い紹介した。

【ディスカッション】

テーマ 1.

モータリゼーションはルワンダでは総合的に見て社会に良い影響となるか、悪い影響となるか。 またそれはなぜか。

●結論

活発な議論が進んだが、概してルワンダ人側は「良い影響をもたらす」、日本人側は「悪い影響も考慮すべき」という意見になると言う現象が起こる。

●ルワンダ側の意見

「公害・農村部への食料・医療物資が行き届く」、「都市部に偏った経済発展が農村部にもも

たらされる」、「国内での開発にいずれふみこめば、大きな経済発展につながる」。

●日本側の意見:
上の意見を受け、「環境破壊も考慮すべき」
「ものづくりで成功するには、基本資源があることが必要。日本も資源には恵まれない国だが、貿易拠点として成功する必要がある。内地のルワンダでそれは可能なのか」
などの意見が出て、後者に関してはさらに議論が進み、「重化学系の製造業では成功は難しいかもしれないが、隣国コンゴの資源が流入してくるため、やはりIT産業などの製造が妥当だろう」(※)という結論に落ち着いた。

テーマ 2.
脱ガソリン(化石燃料)化について、これからルワンダでも進展すると思うか。
●結論
ルワンダ側が懐疑的であり、日本側は進展をあまり疑わず、時間も足りず結論はまとまらなかったが、後日のトヨタ訪問で殆どのルワンダ人が今後の進展を認めざるを得ない、と言っていた。

●ルワンダ側の意見
「中東諸国・石油会社との摩擦が懸念される」、「技術のない国では、取り入れるコストの方が大きく、輸入に依存して、自国での開発は進展しないのではないか」。

●日本側の意見
「技術を自国開発できない国でも、中国をはじめ多くの情報が流出しており、コピーして発展させることは可能だ」、「石油が有限な資源であること・中東の政情の不安定さから少なくとも今世紀中には必要、資源貧国として政治力にもなりえる」。

【感想】

発表者:
2 日後のトヨタ訪問の前に、日本ルワンダ両国のメンバーの自動車への意識を確認したく、また刺激となるようにプレゼンテーションを行った。この中で感じたのは、自動車というものに、ルワンダ側学生ももう我々と余り変わらない意識を持っていたことだった。ピースあいちでの平和についての議論や、BIG ISSUE 訪問時の人権に対しての議論とは大きく異なる点であった。産業を通じてのグローバリゼーションは、土着の文化や宗教・倫理観などのそれよりも大きく進んでいることを改めて実感した。どうしても形あるもの、目先のものに人の意識は向かうのだなと思う。ハイブリッド車を日常に見聞きしているか否かなどという点からの差異は見られたが、後日の実際の訪問で僕含め日本人側の説明不足であった部分も十分に説明され、共通した理解が出来たと思う。他に印象に残ったこととしては、ルワンダ人学生の意識が産業について話すときにも、他国との関係に意識を置いていたことである。日本人同士で議論していても、なかなか HV 車⇒中東との関係懸念、とはならないのではないか。また(※)の発言など資源貧国であるはずのルワンダが、IC 産業の成功には自信があるのは、隣国コンゴ領土内にレアメタルが眠り、その地域でルワンダ軍が侵略・優勢であるというよく指摘される情報とも関係があるのではと思わずにはいられなかった。

全体的には、産業の分野ではお互いのギャップが比較的少なく、かなり議論がしやすいと感じた。

参加者：

Ntaganda Alfred

トヨタのような巨大で興味深い自動車企業をもっていることから、日本の先進性を感じた。私たちルワンダメンバーが、日本の開発やモータリゼーションには良い面も悪い面もあることがあると学べたことは良いことであった。

何を食べている？

―食文化から見えるもの―

発表者：祖父江　智壮

参加者：池上、岩井、大山、宮本、中西、Maurice, Alfred, Alice, Adolfe, Clarisse

【プレゼン要旨】

わたしは、東南アジア各国を自分の足で歩き、自分の目で確かめ、自分の耳で話を聞いてきた。その中でつねにわたしが信条としてきたことは、肩肘を張らないということである。難しい問題はさておき、身近なところから東南アジアを眺めてみよう、という姿勢である。だからこそ、あえて「何を食べている？」というタイトルをつけさせてもらった。堅苦しく、「食文化の差異」と言う必要はない。また、このような身近な視点から物事を考えることが、大学生のわたしにできることでもあるとも考えている。今回は、ルワンダ学生会議ということで、わたしは門外漢であったが、この視点を持ってもらう契機になればと考えた。

出所：Indonesia(筆者撮影)

まず、この写真を見てもらいたい。ご覧の通り魚を焼いているのであるが、魚をひくために使用されているのは、バナナの幹である。写真にはないが、インドネシアの東部の島々では、バナナが非常に有効に活用している。バナナの実を食べるのはもちろん（食べ方も多様でおもしろい）、幹は写真のように使われ、子どもは浮き輪代わりとして川遊びに使用する。また、葉もコメを包むのに使われる。香りがよくなり、保存にもいいとかれらは言う。このように「バナナ」というモノから生活の仕方が見えてくる。

わたしは、この発表の前日に近所のスーパーに足をはこび、以下に並べるように日本独自の食を撮影し、ルワンダからの学生に見てもらった。日本の食を知ってもらうこともちろんであるが、その食から何かを考えられたらと思った。

【プレゼン概要】

●プレゼン後の質問

ルワンダからの学生は食い入るように写真を見ていた。そして、わたしの意に添うような、一方全くわたしの考えつかなかった質問をしてくれた。

「なぜ、日本の食べ物は、このようにしっかりと包装されているのか？」

これこそ、わたしの意図した「食べ物という身近なモノから何かを考える」ということであると思う。

日本の消費者たちはスーパーマーケットという何から何までもが簡単に手に入る便利さを手に入れた。そして、保存がきくようにしっかりと包装されて運ばれてくる。これは、便利な一方で、生産者と消費者を顔の見えない関係にした。以前の中国での冷凍餃子の問題が端的に示すように、食に対する安全という面では、このような関係には私は疑問符を並べざるを得ない。

また、不特定多数が出入りするスーパーマーケットという空間において、しっかりと包装しなければ安全上問題があるという、日本のコミュニティのあり方も、この質問から探っていくことができるのではないか。

【ディスカッション】

プレゼン後のディスカッションでは次の二点を挙げた。

・お互いの食文化を議論しよう
・食文化のような身近な議題を見つけてみよう

2 点目に関しては、なかなか議論を進められなかったが、1 点目では非常に興味深い議論ができた。

ルワンダの輸出売り上げの第一位を占めるコーヒーを彼らは生産するのみで、殆ど飲まないということである。何気ないこの発言はわたしのなかに強く引っかかった。

では、なぜコーヒーを作り始めたのか。自分たちの生活のなかで需要があるから生産し、その余剰分を輸出に回しているのではないか。

このような疑問を持ったのである。調べてみると、コーヒーの歴史をたどれば植民地時代にまでさかのぼる。支配側の需要にこたえるために、同時に、外貨の獲得のためにコーヒーの生産は始まっている。自分たちの必要のないものを作らされる。コーヒーというなじみ深いものから、植民地政策の現実が見えてくる。

このディスカッションを通じても、身近なモノから物事を考えるという視点の大切さ、かつ、おもしろさを感じた。

【感想】

発表者：

冒頭で述べたように、肩肘をはらないことをこの発表では心がけた。その点では、リラックスした雰囲気で、笑いもおこりながら発表ができ、意図通りであった。

わたしは、ルワンダ学生会議の一員ではない

ものの、今回は依頼を受け、プレゼンをおこなった。というのも、ルワンダ学生会議の理念である、「相互理解」ということばの意味を追いかけ、わたし自信も東南アジアと日本を見てきているからだ。

援助、支援ということばはおこがましいとしか言いようがない。しかし、対等とは何なのか。対等とは可能なのか。

わたしの経験を述べると、日本から東南アジアへ行くことは、それほど難しいことでない、たが、東南アジアの国々から日本へ来ることは、金銭的にかなり困難極まることである。この点で、ルワンダ学生会議が、ルワンダの学生を日本に招き、このようなことをおこなっていることは非常に素晴らしいことであると強く思った。

座布団に座り、ルワンダのコーヒーを飲みつつ、東南アジアのバナナを食べながら、それぞれの国の人が、気楽に話せるような場を作れたら、対等な関係での相互理解ということにつながっていくのではないかな、とおもいつつ発表をさせていただいた。

参加者：

Ntaganda Alfred

It was very wonderful we had a good presentation how food culture is different we concluded by saying that every food culture has its good and bad as well as most of African countries are still conservative to their food culture and this is due to their natural food and other developed countries their food culture changed due to the fact that most their foods are imported from other countries that's their reasons in addition to that we have seen how good is these changes to food culture where by self I thought that these food culture has influence to the society life where by most of African countries are suffering from different diseases due to poor sanitation of food which is different from developed countries like Japan where you find foods are well packet and well maintained to avoid any intact with unnecessary or poor sanitation on my side I thought it's good for health and keeps food from taking a lot of time without being expired or contaminated and it's good food culture to my view . Though that we compared and we saw the difference among the countries.

コラム　お正月　品川 正之介

東京では最後の学生会議を終えた大みそか、前々代表の千田さんご家族のご厚意により、JRYC メンバーで千田さん宅にお伺いしてお正月を過ごさせていただきました。大勢で押しかけてしまったのにもかかわらず、（しかも二年連続）暖かく迎えてくださいました。おいしい夕食を頂いた後はお正月言えば絶対紅白！！ということでサッカーを見たそうだったアルフレッドを横目に（笑）チャンネルは紅白歌合戦へ。ルワンダ人メンバーはサブカルチャーのプレゼンにもあった AKB48に興味を示すものの、やはり日本語の歌だと退屈したのでしょうか、いきなりモーリスが俺の時間はまだかといわんばかりに踊り始めたのです!（笑）大みそかはテレビを見ながらまったりと過ごしました。

そしていよいよ年越し。年が明けたとたんにダンスパーティが始まりました。千田さん家のオーディオを使い、音楽を流して日本人メンバーもルワンダ人メンバーもノリノリで踊りながら

正月の夜は更けていく。

次の日の朝は千田さんのご親戚一同＋JRYC メンバーでお正月料理を頂きました。ルワンダ人にとっては初めての日本の正月料理でしたが、ルワンダ人でも食べられるように料理を工夫してくださりました。これにはルワンダ人も大喜び。

そのあとは千田さんのお父さんが日本の民謡や伝統舞踊を紹介してくださり、ルワンダ人メンバーも歌いだし、和やかな雰囲気でお正月を過ごしました。そういえば日本の民謡や伝統舞踊にとっても勉強になった気がします。阿波踊りって男性と女性で踊り方が違うって知っていましたか？！

東京企画は非常に過密スケジュールでこの時期が一番体力的にきつく、くたくたでしたが、千田さんの家での豪勢な料理と暖かいおもてなしでメンバー一同リフレッシュできたことだと思います。千田さんご家族の皆様、日本人メンバーにとってもルワンダ人メンバーにとっても素敵なお正月を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

結婚観

発表者：志賀まりも

参加者：大山、岩井、池上、岩垣、古屋、海原、井上、ガン，宮本、片岡、久保、佐藤、品川、嶋田、滝田、Maurice、Alfred、 Adolph、Alice、Clarisse

【プレゼン要旨】

日本の結婚方法の変化と未婚化・晩婚化が進んでいる現状を説明し、婚活を紹介。婚活の問題点と結婚観について。

日本では少子高齢化が社会問題としてよく取り上げられており、少子化が進めば、将来日本社会に影響を及ぼすことは目に見えている。その少子化の原因のひとつとして未婚化・晩婚化がある。そして未婚化・晩婚化の大きな原因のひとつとして、適当な相手に巡り会わないということがある。それが婚活へとつながっている。ルワンダの学生に日本の婚活はどううつるのか、また婚活を提唱した真の意味とはかけ離れた現在の婚活ブームについて、結婚で本当に重視すべきものは何なのか、を考えたくてこのテーマを選んだ。

【プレゼン概要】

以前、日本は見合い結婚が主流であり、高度経済成長期頃からは恋愛結婚へと移行している。未婚化・晩婚化は近年少しずつではあるけれど進んでおり、それには①寿命が伸び、出産適齢期・子育てにも余裕が出来た②地域コミュニティの薄れにより見合い結婚が減少した③経済力の問題などの理由があること示す。年々未婚者は増加し、平均初婚率も 2009 年現在夫 30. 4 歳、妻 28. 6 歳と、晩婚化しているが、未婚者の 9 割前後は結婚願望がある。2007 年社会経済学者により、結婚願望はあっても結婚できない、それが現実であることが明らかにされ、学生が就職活動をするように、結婚をするのも意識的な活動、 すなわち結婚活動（婚活）が必要であることが提唱された。婚活は結婚相談所や、結婚仲介業者を利用するもの、インターネット型、お見合いパーティー、友人知人に紹介を依頼など多岐に渡る。しかし、婚活を定義した際の本来の意図が、「高収入男性をゲットする勧め」と誤解され、結婚情報産業への依存を強めることになった。つまり現在の日本で行われている婚活は不況も大きく影響し、提唱した当時の真の婚活の目的からかけ離れた、高所得者を巡っての活動となっていると言える。これらをもう一度考え直し、真の結婚をする目的、理由などをよく考えるべきである。日本の婚活を紹介すると共に、これは今めざましい経済成長を遂げているルワンダでも将来起こりうることだと言うことを伝えたかった。

【ディスカッション】

テーマ

・結婚相手に求める一番重要な要素は何か？

・見合い結婚と恋愛結婚はどちらの方が良いか？

●結論

A：結婚するために愛は必要だけれど、結婚生活を継続させるにはお金も必要である。ルワンダでは、女性は出産後 3 ヶ月したら職へ戻るため、子育ては 2 人で協力して、またベビーシッターに頼んだりする。一方日本はまだ育児休暇が取りにくい。日本では、特に女性は出産して母親になり、大切なものが子や仕事やお金など、結婚してから性格なども含めていろいろと変化するからである。

B：最も重要なことは相手を理解することだ。理解していなかったら一生共にすることはできない。もちろん愛も重要であり、また子が生まれた時には育てる責任を持てるかということも大切。

紹介されて初めて知り合い結婚を考える日本の見合い結婚と、結婚前に両親に紹介することでも見合い結婚となるルワンダのそれとは違いがあって、混乱した。その違いについて話した。

C：愛は大切。相手のことを尊敬できるかどうかも重要である。尊敬できなければ愛することも難しいから。

【感想】

発表者：

今回このテーマを取り上げるにあたり、環境が異なるルワンダ学生に少子化や婚活などがどう受け止められるか心配だったけれど、日本の状況を理解しようとしてくれたことが伝わってきた。また、ディスカッションでは、結婚相手に求めるものなど人によりさまざまであるからこそいろいろな価値観を共有できてよかった。ただディスカッションが、議論が深くなるようなアカデミックなものではなく、ジェネラルディスカッションだったので、もう少し具体的な条件をつけてのテーマなどにすれば良かった。現在日本では結婚の障害となっている主なものが、非正規雇用者の増加や女性の社会進出に伴う問題である。ルワンダでは出産後 3 ヶ月で仕事に復帰するため、結婚や出産が仕事の妨げとなることはあまりない。日本も少子高齢化、またそのひとつの原因でもある非婚化・晩婚化に歯止めをかけるために、政府が女性の雇用問題や非正規雇用者の問題について積極的に取り組むべきだと思った。ルワンダが経済成長をし続け、日本のようになる可能性もあるということを覚えておいてもらいたい。

参加者：

Ntaganda Alfred

ディスカッションの時メンバーから聞いて、ルワンダと日本の結婚観は、ルワンダでは両親に紹介するまで男女は連絡を取り合うことしかできない点を除いて、似ているところがあることが分かった。ルワンダにも見合い結婚はある。しかし、これらはすべてその文化によるので、この結婚観に関してその文化に一番適したものを知らない限り、他人があれこれいうことではない。だが、ルワンダは普通、日本と同じ結婚のシステムがある。日本人が外国人と結婚することは稀であるけれども、ルワンダ人女性と日本人男性が結婚することは可能である。文化の壁を時間とともに取り払っていけることを望む。

Ishimwe Alice

結婚が愛情だけでなく、お見合いなどのから始まることが分かった。また、お見合いパーティを運営する仲介業があることに驚いた。しかし、やはりまだ結婚において、最も重要なのは愛情のようだ。

マネジメント

発表者：久保　唯香

参加者；大山、岩井、宮本、池上、井上、岩垣、海原、片岡、ガン、久保、志賀、品川、嶋田、滝田、古屋、Maurice, Alfred, Adolfe, Clarisse,　Alice, Aline

【プレゼン要旨】

マネジメントは、組織運営に必要なスキルである。組織は独自の目的や理念を達成するために存在する。しかし、同時に組織にはそれ以外に複数の役割がある。なぜなら組織は必ず何か

しらの社会に属すからである。我々私たちは何のために働くのか。何をするべきなのか。ドラッガーの理論に基づき、「考える」ための道筋を紹介した。

2010 年に大ブレイクした「もし高校野球の女子マネージャーがドラッガーの『マネジメント』を読んだら」（岩崎夏海　ダイヤモンド社 2009）を手に取ったのがこのプレゼンテーションを考えたきっかけである。実際の「マネジメント―基本と原則[エッセンシャル版]」（P.F.ドラッガー著　上田惇生訳　ダイヤモンド社　2001）には組織経営のためにたくさんのヒントが記されており、自分が属している様々な組織について思い返させられた。ドラッガーの理論を参考にし、我々なりの組織経営を目指していきたいと考えた。

組織は社会や組織に関わる人に大きな影響を与える。組織にはよりよい社会づくりに貢献し、仕事を通して人間を育成する責任がある。これらの原則を理解し、実践できるリーダーが、組織には必要である。以上がこのテーマの背景である。

【プレゼン概要】

まず、マネジメントの定義を確認し、組織の原則を紹介した。企業目的、理念の達成、構成員の能力育成、社会貢献の 4 点である。国を例にとって組織の理論確立のために必要なことを考えた。次に過去に訪問した企業を具体的に挙げて組織が社会に与えるインパクトを分析した。私たちが属しているそれぞれ大学が社会の中で担うべき役割を考えた。さらによい組織をつくっていくために必要な精神を扱った。最後に日本ルワンダ学生会議自体を分析した。目的、顧客、社会への影響。活発な議論が交わされた。

【ディスカッション】

テーマ

・それぞれが属する国家（日本、ルワンダ）の役割とはなにか。

・それぞれが通う大学が社会へ与える影響はなにか。大学は社会に対して何を行うべきか。

・日本ルワンダ学生会議をマネジメントする。

当団体の顧客は誰で、そのために何を行うか。目的は何か。我々は社会に対して何を行うべきか。日本とルワンダが協力して運営を行う過程で、道徳的に正しい判断を下すためにどうすればよいか。

組織はまず、その理論を確立しなければならない。はじめにそれぞれの国家を考えた。日本メンバーは、国家の顧客を日本国民とし、経済的政治的に深い関係をもつアジアの住民も顧客に加えた。日本の目的は、国民及びアジアの民が豊かに暮らす社会をつくること。中心となる能力は国民税や関税、そして日本国民だとした。一方ルワンダメンバーは、国家の目的を国力の向上とすえ、実現には人材が重要な資源だと発言した。

次に大学という組織が与える社会へのインパクトを話し合った。大学の特徴が分かる在学生の積極的な発言を期待したが、大学の役割を真剣に考える機会は決して多いものではなく、理解に難航した様子がみられた。ルワンダ国立大学は国家が発展の真っただ中にあるルワンダにとって人材育成に重要な場所である。国家を発展させる人材を輩出することで社会貢献を果たしている。さて日本でいえば、私学の早稲田大学は、国際教育に重点を置いている。一方横浜市立大学のメンバーは、地域への貢献、その研究が大学の社会貢献の在り方であるとした。さらに国際基督教大学のメンバーは、キリスト教の精

神に基づく平和の希求が建学時の目標でありながらも現在の学生の中ではクリスチャンはむしろ少数派であり、その目標は幅広い知識を持った国際的な人材を育て社会貢献を果たすことに変わりつつあると述べた。

最後に JRYC 自体のマネジメントに取り組んだ。団体に関わるとなれば感情的になりがちであるが、マネジメントの手順で客観的に取り組んだ。JRYC の顧客、それは第一にメンバー全員である。加えてイベントやコンサートに来て下さる方々、メンバーの家族や友人はメンバーから JRYC の話を聞く点で顧客といえる。報告書や映像に目を通してくださる方も顧客といえよう。「平和構築」の目標から顧客は地球に住むひと全員であるとの意見もあった。顧客の要望、つまりこの組織の目的は、互いの国を知り学ぶことから始まり、実際に面会してからの意見交換や文化交流などである。共同作業によってひとつのものをつくり挙げたいとの意見もあった。ルワンダと日本、遠く離れた国どうしで共通の組織を運営するにはたやすくない、そんな団体が倫理的に正しい判断をくだすためには、どうしたらよいだろうか。まず、ルワンダと日本の倫理や道徳はまったく同じではない。どちらの倫理なのかもわからない決断をどのように判断していけばよいのか。

ルワンダメンバーは今回の来日では、日本の道徳を最大限尊重しているようである。逆に日本人メンバーがルワンダへ渡航する際には、ルワンダの道徳に従ってほしい、と話した。倫理は各国の倫理に優劣をつけ、どちらかに限定するものではなく、互いを尊重し、どちらかがその国の倫理に従う姿勢が必要である。宗教など、どうしても譲れないものに関しては、互いの尊重のなかで妥協点を見つけ、コミュニケーションが最も重要だという結論に至った。

【感想】

発表者:

マネジメントスキルを身につけてほしかったのだが、本を読むのが一番効率的だと感じた。また、理論がもっと分かりやすいようにプレゼンテーションを工夫するべきだった。しかし、実例からマネジメントについて考えられた点は評価したい。時間があればもっとグループワークを増やし、異なる意見と共通点を模索しながらスキルを高めていくべきである。

参加者：

Amahoro Clarisse

このトピックに関し、私はもともとこれといったマネジメントの知識があるわけではないので、久保さんがプレゼンテーションで伝えようとしたことを理解するのに苦労した。久保さんがスライドでマネジメントについて強調し、説明していたことは以下のようなことである。

・マネージャーとして、私たちは何をするか。
・私たちは何をすべきか。
・誰が私たちの顧客か。

そして、プレゼンテーションの最後に、彼女はこれらの質問を用いて JRYC としての日常に言及した。そして私たちは JRYC のすべきこと、JRYC の顧客、JRYC のメンバーについてディスカッションした。これらのディスカッションによって彼女のプレゼンテーションの発想は理解しやすいものとなったが、依然よくわからない点もある。

Abijuru Adolfe

久保唯香さんのプレゼンテーションは私たちにマネジメントの基本的な知識を与え、そして私たちの生活にどれほど重要なものかを実演するものだった。異なる２つの Oxford 辞典、Mc

Milan 辞典を用いてマネジメントを定義したあと、彼女はどうしてマネジメントが必要か説明した。私たちは自らの組織特有の職務を遂行するため、仕事を通してメンバーを育てるため、社会への組織の影響を取り扱うためにマネジメントが必要である。久保さんはビジネスの理論を用いてマネジメントの過程をもっと細分化させるために以下のような質問をした。

・私たちがすべきことは何か。
・私たちの核となる能力は何か。
・何を企業の結果と考えるか。

彼女の Think and Answer の仕組みはよく、意義深かった。道徳的、倫理的指導によって高いリーダシップをとる、結果に重点をおく、自らの、そして他人の長所を伸ばす、顧客やメンバーの要望に最低限答える、共通の善のために一線を越える、これらは組織の精神を構築するための財産となるかもしれない。

Japanese Mass Media

発表者：品川正之介

参加者：池上、井上、岩井、岩垣、海原、片岡、久保、ガン、駒板、志賀、嶋田、滝田、古屋、宮本、Adolfe, Alfred, Alice, Clarisse, Maurice

【プレゼン要旨】

日本のマスメディアについてルワンダ側に紹介した。それと同時に、ディスカッションを通じてルワンダのマスメディアの実態、またそれをルワンダ人はどのように思っているのかを知りたかったことがこのトピックを選んだ理由である。

【プレゼン概要】

まず初めに日本のマスメディアについて大まかに紹介した。様々な新しいメディアが存在するも、それでも依然テレビと新聞が日本社会では大きな影響力をもっていることを各種データや資料にて説明し、この二つ焦点を絞ってしくみなどを説明した。

その次にこのプレゼンテーションではマスメディアの役割を「民主主義における十分な意思決定ができるように人々に情報を与えること」「政府を監視すること」の二つに定義し、この観点から見て、現在日本のマスメディアの問題点だと思われる点（商業主義、放送免許制度、記者クラブ制度、報道と権力の癒着など）を紹介した。

【ディスカッション】

テーマ

・自国のマスメディアについて満足度を０～１００点で評価する。またその理由は何か。

・日本とルワンダのマスメディアの質を向上させるために何が必要か。

●ディスカッションの展開の抜粋：（グループ２）

「日本のメディアについて、BGM・演出など報道の仕方ひとつでメディアが視聴者の意識を誘導できることが問題だと思う。」（久保）

「私は商業主義が一番問題だと思う。（ワイドショー的な）簡単な情報ばかり報道される。また多くの人は選挙の時、テレビなどの情報を頼りにするのだが、マスコミに流されやすい。これが日本の政治をだめにする原因だと思う。」（古屋）

「ルワンダのメディアはジェノサイド以降非常に国の発展に役に立っている。民間の新聞は政府の悪い面も報道しているし、アフリカの中では発達している方だと思う。」（Maurice）

「政府にコントロールされることは？」（古屋）

「それは全くない。」（Maurice）

「また私たちはBBCやCNNを見てより多く情報を得ている。これはルワンダ社会に大きな影響を与えている。」(Maurice)
「日本の新聞の紙面は20面以上あるのだが、その中でも国際面は1～2面だけだよ」(古屋)
「その中のニュースも日本に関係するものばかりで、アジアやアメリカなどの情報が多い。アフリカについての情報はまれである。また日本人の多くは英語が得意ではないから英語で書かれた媒体から国際的なニュースを得ることは難しい。」(久保)
「あと、ルワンダでは 10 家族に1人、ジャーナリストの役割を持つ人が投票で決められるんだ。そんなに大きなニュースを扱うわけではないけど、記事を書いたり、ポストに投函したりして他の人に情報を伝える役割を持つんだ。」(Maurice)

●結論・提言

◇グループ1◇

日本人満足度:72.5

・興味のわくような番組が少ないのが残念。
・まじめなニュースですら、ワイドショーなどでおもしろおかしく報道してしまうことが良くない。
・テレビや新聞だけではなくインターネットを使えば情報を多面的に得られる点は良い。

ルワンダ人満足度:70.0

・テレビは国営の放送局や他国の番組が視聴できるチャンネル、新聞は約 20 種類、ラジオは約 12 局とありこれらすべてのメディアを通じて様々に情報が得られる。
・言論の自由が確保されている。たとえば、テレビやラジオが放送されている間にインターネット上でコメントができるし、政府の批判だって可能である。

◇グループ 2◇

日本人満足度:45.0

・商業主義、視聴率至上主義が一番の問題。
・このせいで日本のメディアは難しい、例えば政治などの視聴率の稼げない番組よりも簡単で分かりやすいバラエティ番組などの番組ばかりになってしまった。
・海外のニュースが少ないので、もっと扱うべきである。アフリカについてのニュースが日本のテレビニュースで報道されることはめずらしい。
・インターネットを使うことで個人レベルでの情報を発信・交換できることは良い。

ルワンダ人満足度:65.0

・ルワンダのマスメディアは国の発展に大いに役立っている。
・特にラジオでは、地域に即した身近な話題(たとえば家族の話など)などを取り扱うことで、地域社会のより良い関係づくりに役立っている。
・民間の新聞は政府を批判する記事を書くこともできる。

◇グループ 3◇

日本人満足度:54.0

・私たちのグループはメディアの満足度をメディア環境(メディアインフラの普及度。ルワンダではラジオは一般的に普及しているが、テレビはまだまだ都市部で普及している程度である)の観点から考えた。日本人はメディア環境に対しては満足している。

ルワンダ人満足度:65.0

・ルワンダにはジャーナリストが少ない。ジャーナリストとして高い能力を持つ人も少ないし、ジャーナリストを育成するシステムも整っていない。
・ラジオはルワンダ社会にとって重要である。人々を教育することができる(例えば農業の技術など)

・両国のマスメディアの質を向上するためには、メディアリテラシーを持つことが重要である。メディアの言うことをそのまま鵜呑みにせずに批判的に捉えてみることも大事だ。

◇グループ 4◇

日本人満足度：45.0

・私たちは海外起きている事件や事柄についてもっと関心をもって、私たちに何ができるのか考えるべき。

・メディアの役割というのは正確な情報を人々に伝えることなのに、視聴率を気にするがあまり、エンターテイメントに重きを置きすぎていて本来の役割を忘れてしまっているのではないかと感じる。

ルワンダ人満足度：61.0

・私たちは政府とジャーナリストとの間の関係を信頼している。

全日本人メンバーの平均満足度：54.125

全ルワンダ人メンバーの平均満足度：65.25

【感想】

発表者：

このテーマを選んだ理由のひとつに1994年に起きたルワンダのジェノサイドで、ラジオがコントロールされプロパガンダを流し、市民を扇動することで民族間の対立を深めジェノサイドを引き起こす大きな要因になったということがある。そこで、特に言論の自由がちゃんと確立されているのかなど現在のルワンダのマスメディアの実態、またルワンダ人メンバー自身自国のマスメディアをどう評価しているのか知りたかった。

ディスカッションのなかで特に印象的だったのはルワンダ社会におけるラジオの持つ役割である。ジェノサイドを引き起こす要因であったラジオが今では国の発展、つまり地域社会のつながりを強める役割、ジェノサイド後の国民の和解を進める役割を持っているということが印象的であった。

マスメディアは非常に大きな力を持つ。戦前、戦中の日本のように、そしてルワンダでのジェノサイド時のようにマスメディアが最悪の事態を引き起こすことがあり、将来同様のことが繰り返されないなんてことは言えないだろう。だから、日本もルワンダもメディアリテラシーだったり、多角的に事柄を考えたり、ただただマスメディアからの情報を鵜呑みにするのではなく注意深く付き合っていくことが重要なのだと感じる。

参加者：

Habimfura Maurice

日本のマスメディアの役割と、また抱えている問題を理解することができた。このプレゼンで、日本のマスメディアは国民に有益な情報を十分提供できていないという内容があったが、その点について日本人メンバーが同意していることからもそれがわかった。また視聴率の問題がこのことに大きくかかわっているのだろう。

しかし、私は日本のマスメディアは日本社会において十分活用されているし国の発展にも十分役立っているのではないかと感じている。

Ishimwe Alice

日本にはさまざまなメディアがあり、それらがそれぞれ重要な役割を持っていることを理解したと同時に様々な問題を抱えていることも理解できた。特に商業主義や放送免許制度、権力と報道の癒着などは特に問題であるように感じた。

無縁社会

発表者：滝田知子

参加者：大山、岩井、池上、岩垣、海原、佐藤、志賀、品川、嶋田、古屋、 Maurice、 Alfred、Adolfe、Clarisse、Alice、Aline

【プレゼン要旨】

人とのつながりは社会生活における私たちの資本である、と私は考える。だが 2010 年は所在不明の高齢者が相次いで発見されるというニュースが世間を騒がせ、無縁化の進行が明らかになった年であった。大学の社会学の授業で“つながりとコミュニティ”について講義を受けた際、NHK スペシャル「無縁社会」という番組を見た。誰にも知られず、引き取られず亡くなる行旅死亡人は増加しており、その数は年間三万二千人に上るという。これは地縁・血縁・社縁が急速に失われている日本社会の実態を浮き彫りしている。親類がいても疎遠なため、生前に無縁仏に登録する人を映像で見た際に、私は無意識に、一人っ子で従兄弟もいない自分の将来の姿と重ね合わせてしまった。そこで血縁・地縁が強いルワンダでも将来社会が発展すれば起こりうる問題ではないかと思い、日本の問題を紹介することにより、改めて日本人学生ルワンダ人学生の両者が絆のあり方を考える機会にしたいと思った。

現代の日本社会では、家族や地域、会社などで人と人との絆が失われつつあるといわれ、この社会は『無縁社会』と呼ばれる。無縁社会の大きな原因として挙げられているのは、単身化・非正規雇用・生涯未婚の三つである。

【プレゼン概要】

まず無縁社会の定義を説明した。無縁社会を象徴する人生の最後の迎え方、無縁死、つまり独り孤独に亡くなり、引き取り手もない死である。無縁死の増加と平行して広がる特殊性創業者のような無縁ビジネスも紹介した。血縁が失われている例として、兄弟がいたにも関わらず疎遠だったため無縁死を遂げた 55 歳男性について紹介した。

次に無縁社会の原因の一つである単身化に焦点を当てた。国の統計によると、1980 年には20%に満たなかった単身世帯の割合は、今から20年後の2030年、40%近くに上る見込みである。単身化の背景として、ライフスタイルの変化と社会構造の変化を挙げた。単身化の抱える影響として三点、低所得者層の増加、介護授与王の高まり、社会から孤立する人々の増加を説明した。最後に国や地域社会が取り組むべき課題を紹介し、地域コミュニティの再構築を図る自治体を例に挙げた。

【ディスカッション】

テーマ

・あなたは大人になり安定した職を得て結婚し、都市で家族と暮らしているとします。健康だった父が突然他界し、要介護者の母が田舎で一人暮らしているとしたら、あなたはどうしますか。田舎に移れば、転職し収入は半減、子供は慣れ親しんだ学校を離れなければいけません。

・私たちに何が出来るか

●結論

結論はテーマ①、②を合わせた形で出た。都市で暮らす派と田舎に移る派に分かれた。都市

で暮らす派が金銭面から多数派で（介護にもお金がかかる）、母を都市に連れてきて老人ホームに入居させる人や、一緒に暮らす人に分かれた。田舎に移る派も同様に母と同居するかで

は意見が分かれた。共通する結論としては、家族の縁を切らさず、無縁死を防ぐべきである、ということであった。

【感想】

発表者:

家族がいること、家族の支えがあることを前提に社会の仕組みが成立してきた日本社会は、ルワンダの社会と似ているのではないか、と思いこのテーマでプレゼンテーションを行った。無縁社会の問題は血縁のみならず地縁、社縁の薄れとも関わってくるが、薄れの原因や事実を、ルワンダ人にうまく理解してもらうことができなかったのではないかと思った。当たり前だが、文化、社会構造の違いを改めて感じた瞬間だった。その代わり、ディスカッションテーマは身近に起きそうなことを想定したものだったので、考えやすかったと思う。

参加者 :

Amahoro Clarisse

日本にいる間、一人で買い物をする老人をスーパーマーケットで見かける度に、彼らには子供がいないのか、それとも彼らを助ける子供がいないのかと疑問に感じていたが、このプレゼンテーションを通じでその答えを得ることができた。

Ishimwe Alice

On my side I found that the situation is not very good in Japan; they want to live alone even if they are alone and don't like town where their children may look after them. They also don't want like strangers so that they can pay someone to look after them and if for example it will be more complicated if you have your own family to look after instead of living with your old parents!! On the other hand on Rwandan side it's possible to pay someone or bring him or her in your family if the husband or the wife is ok with that.

国家の発展に対する文化の貢献

発表者:Abijuru Adolfe

参加者:井上、岩井、岩垣、大山、海原、片岡、ガン、久保、佐藤、志賀、品川、嶋田、滝田、古屋、宮本、Adolfe、Clarisse、Maurice、Alice、Alfred

【プレゼン要旨】

ジェノサイドからの復興にあたり、ダンスなどの伝統文化が人々の心に希望を与えたと言われている。INDANGAMUCO(ルワンダ国立大学の伝統ダンスグループ)で活動するルワンダメンバーは、特にこの文化の力を感じることが多い。文化は国の安定、発展に大いに貢献できるのだ。

【プレゼン概要】

一般的には、「人々がどのように生きるか」という定義が「文化」には与えられる。その中には価値観・知識・信条・習慣などの様々な要素が混ざり合い、複合的な体系を形作っている。文化はアイデンティティーの根源を成すものである。では、「価値観」とはなんだろうか。価値観とは、社会の目標や原理を指すと考える。しかし価値観の中にも、政治的、社会的、倫理的など様々な側面がある。文化は国家の安定に貢献できると私は考える。ルワンダでもジェノサイド後の精神的な面での復興に、文化は社会の安定のために大きな役割を果たしてきた。「無縁社会」のプ

レゼンで日本のお年寄りが孤立しているということを学んだが、文化の力はそのような問題にもアプローチできるのではないか。また今日、音楽・映画・芸術などの「文化産業」は経済の中でも大きな割合を占めているが、それは文化の力が経済的にも国に貢献できることを示している。ルワンダではバスケットなどの工芸品を国内外で売ることで経済が活性化するだろう。

また、文化に多様性があることは素晴らしいことである。異文化と関わることによって視野が広がる。私たちは文化の価値やその多様性を改めて認識することが必要である。

【ディスカッション】

テーマ
文化は国家にどのように貢献できるか？

●結論・提言

例えば日本では、「ジャパンタイム」という価値観（5 分前行動、時間に律儀、約束の時間を守る、期日を守るなど）が国家の発展に貢献したと考えられる。つまりジャパンタイムという価値観によって、日本の企業が発展したのではないだろうか。しかしジャパンタイムの概念をルワンダ、もしくは世界中で浸透させることは不可能だし、そうすべきではない。何故なら価値観は、その文化圏の中でこそメリットを発揮するからである。ルワンダでは、ルワンダなりの価値観に基づいて発展していくべきである。

【感想】

参加者：
岩井天音

私たち日本人は普段の生活の中で「文化が社会に貢献している」ということはあまり意識していない。しかし INDANGAMUCO に所属し、ルワンダの平和や伝統継承のためにダンスを踊る彼らにとって、文化の力を感じる機会は多いのだろう。また、アドルフがこうしてプレゼンのテーマを選んだことからも、文化が国の発展に貢献するという考え方は強いということが分かった。

また、ディスカッションでは「文化が国家にいかに貢献するか」という従来のテーマからずれてしまったが、「公共空間における他人との会話」、「時間」や「ボディタッチ・スキンシップ」など様々な概念について比較することが出来た。日本人メンバーが「私は電車の中で男の人に話しかけられたら、この人はアヤしい人だと思って逃げる」と発言した瞬間、ルワンダメンバーが口を揃えて驚きの声をあげていたのが印象的だった。

ルワンダにおける ジェンダーの平等

発表者：Ishimwe Alice

参加者：井上、岩井、岩垣、大山、海原、片岡、ガン、久保、志賀、品川、嶋田、滝田、古屋、宮本、Adolfe、Clarisse、 Maurice、Aline、Alice、Alfred

【プレゼン要旨】

ルワンダでのジェンダーの平等について言及した。現代では男性のみならず女性も生まれながらにして権利を持っている。彼女たちにも自己決定権があり、政治的活動、政府の選択、大統領への立候補も可能である。

【プレゼン概要】

1994 年のジェノサイド以降、女性は公の場でより重要な役割を担うようになってきた。大多数の

女性は未だに貧しい農村で働いているが、彼女たちにおいても家庭内でもっとも高い地位にある者は多い。

身体的平等に関する規則について：ルワンダにおいて、女性への暴力は深刻な問題である。不平が表に出ることはめったになく、大抵の場合は内密に片付けられてしまう。しかし当局により対策はとられており、暴力は20年から30年の懲役となる。

市民の自由について：内戦とジェノサイドを経て、ルワンダは女性の割合の多い国となった。女性は移動の自由を制限されない。居住地を選択する自由だけでなく、夫と同居するかも選択することもできる。服装に関する制限もない。そして女性は全ての政治的決定に参加する権利を有し、大統領選挙も含めた全ての選挙の候補者になることができる。所有権についても、ルワンダ政府は財産法を改正し、男性・女性の土地所有と相続の平等を保証した。ルワンダの憲法では私的財産に関して女性への不平等がなく、他の国よりも財産権を保証している。

【ディスカッション】

テーマ

・What do you think about the woman president of the republic?

（女性の大統領についてどう思うか？）

・ It's gender but why some girl can't till now ask also boys for out?

（未だに自分から男子をデートに誘えない女子がいるのはなぜなのか？）

●結論・提言

1. 国家の決定をする権利があるのだから、女性が大統領になることも良いことであるし、一度実現すれば他の女性にとってもそれが可能になる。日本の場合、女性は天皇にはなれないが、天皇である夫を助けることはできる。

2. ジェンダーとは男子と女子がまったく同じことをするという意味ではないが、多くの女子は内気な性格のために男子をデートに誘うことができないし、だまされたくないと考えてしまう。

【感想】

発表者：

ルワンダの家族を取り巻く状況を再考してみると、主に伝統的な理由により、女性は家庭で長らく差別されてきた。しかし昨今の晩婚化も一因となり、かつては夫のみで決めていた家族計画や家庭内の問題に関する決断を、最近は夫婦が協力して行うようになった。相続の問題についても、昔は社会的・文化的な障壁のため女子による相続が認められていなかったが、現在では男子も女子も同等の権利を有している。だがそれでも、まだ多くの女性は権利を有していることを自覚していない。情報・知識の不足がその原因であり、このため未だに差別が続いている地域はある。ICTの充実がこの状況を改善することになるだろう。

参加者：

古屋亮輔

女性の社会的権利が認められ始めたのが1994年のジェノサイド以降ということもあり、憲法や財産法の整備は進んでいても実際国民には知られていないのが現状ではないだろうか。日本でも都市と農村ではいまだ性に関する価値観に大きな隔たりがあるように、ルワンダ国内でも情報格差は当然あると思う。更に言えば、ICTの普及により情報が伝わっていてもなお、伝統的な価値観が幅を利かせ続けてしまう可能性は大きい。私たちが交流する大学生たちはそれらの

情報に関して十分教育を受けており結婚や子供の問題などについても欧米的な考え方を持っているため、まるでそれがルワンダの一般的なジェンダーの状況のように見えてしまうこともあるが、このような人間の主観に依存する問題は多面的な情報収集が不可欠である。

在日外国人の人権

発表者：山崎暢子

参加者：大山、岩井、岩垣、今泉、海原、嘉積、片岡、片山、久保、ガン、品川、嶋田、西岡、藤沢、藤原、古屋、山崎、Maurice、Alfred、Adolfe、Clarisse、Alice

【プレゼン要旨・背景】

「外国人」であることを理由に不利益を被るのは人権侵害ではないだろうか。国内外の報道を見聞きするだけでなく、留学生や在日朝鮮人の方々と知り合う中で、この疑問は私の中で無視できないものになってきた。日頃の生活を見渡してみると、意外にも身近なところに人権問題は存在している。

国境という、人が作り出した境界線により人が区別されるという現実。「平等」であることが、どのような場合にも無条件でよいことであるかどうかの判断は容易ではないが、少なくとも、不当な差別は認められるべきではない。

隣国と陸続きであるルワンダ、島国である日本。それぞれの国に暮らし、それぞれのバックグラウンドを持つ学生の意見をぜひ聞きたくて、学生会議でこのテーマを取り上げることにした。

【プレゼン概要】

まず、プレゼン後のディスカッション議題を提示してから、日本の総人口と在日外国人数の推移をグラフで示し、来日目的、出身国、居住地を紹介して導入とした。総人口が減少する一方で、在日外国人数の増加が続いている日本には、アジア、南米からの滞在者が多く、その滞在理由は就業、留学、技術研修など様々である。また、在日朝鮮人の方々について、その歴史的経緯も述べた。

次に、日本における在留外国人に対する人権侵害が疑われる事例をとりあげ、日本国憲法にいわれている「国民」について言及。事例は、外国人参政権が認められていない件をとりあげた。ある国にどれだけ外国から人が出入りしているかということは、その国が国際社会にどれだけ開かれているかというひとつの指標になりうるが、訪日・在日外国人数が上昇しているものの、戦後六十年以上、一度も改正されていない現行憲法が現代社会の情勢に必ずしも適応していない状況がある。

最後に、政府レベル、地方自治体レベルで行われている人権擁護への取り組みがあることを述べ、今後の社会がマイノリティとされている人達にとっても住みよいものになっていく期待を込めた。

【ディスカッション】

テーマ

・人権とは何か。

・なぜそれは重要であるのか。

・私たちは何をすべきか／何ができるか

5～6 人のグループ四つに分かれた。参加者個々の考えを自由に意見し、グループ毎にいくつかの答えを出してもらった。

●提言・結論

・人権が侵害されていないかの監視はできても、一国の問題に他国がどれだけ干渉できるのかと

いう問題。例えばルワンダでジェノサイドが起きた際に他国がとった介入のありかた。そこに人権は存在したが、実際には多くの人が殺された。

・それ自体が何かを守る、あるいは利益をもたらすものではなく、保障されるべきもの。

・イラク戦争のように、イラクの人々を守るためにイラク政府を攻撃するのだとして戦争が正当化されるというレトリック。

・差別されることのないもの、誰もがそれによって尊厳を与えられている。

・欧州諸国を起源とした考えであり、日本はそれを輸入した。

・乱用される恐れがある。

・自由に意見を表明する権利や、投票権。

・他者に干渉されることなく、自らの望むところを行える権利。ときに人権どうしが衝突し、紛争を招くことがある。

・人権を守るために、等しく機会が設けられるべき。

【感想】

発表者:

発表の反省点は、私自身の理解が浅く近視眼的な主張になったことと、時間配分のミス、さらに、議題の設定範囲が広すぎたことなどである。

日本で生まれ育ち、海外の旅先で大きな不自由を未だ感じたことさえないにもかかわらず、おこがましくも人権について発表する機会を得たが、貴重なコメントの数々に目を開かれる思いの連続だった。この先、旅先や生活の拠点を据える場所で思いがけない出来事に遭遇し、そうした体験を経て初めて、実感として人権とは何かを考えられる日が来るのだと思う。

参加者:

Habimfura Maurice

On our point of view about Human right of foreign nationalities in Japan is accomplished in different ways, and is correct for one side of foreigners or Japanese government depending on its independency as there is proverb in Kinyarwanda that says: UBURENGANZIRA BWAWE BUTANGIRIRA AHO UBWO UNDI BURANGIRIRA, which means literally that: The end of your right is the beginning of your colleague.

We, JRYC members, do not have a big impact on protecting human right but we hope that we will be the first to enhance human right execution in the future of this world.

Big Issue とホームレス

発表者:嶋田康平

参加者:岩井、池上、井上、岩垣、大山、海原、片岡、ガン、久保、品川、嶋田、滝田、古屋、宮本、Adolfe, Alfred, Alice, Clarisse, Maurice

【プレゼン要旨】

企業訪問の一環としてビッグイシュー日本の社員と販売員を招き講演をしていただくので、当プレゼンはその準備としての位置づけである。プレゼンの目的は、ビッグイシュー日本という企業の紹介及び知識の獲得、疑問の発見、日本の貧困の紹介である。

【プレゼン概要】

プレゼンは、ビッグイシュー日本、日本のホームレス、社会的企業としてのビッグイシュー、という三つの小テーマにより構成されている。

①ビッグイシュー日本

ビッグイシュー日本は、雑誌『ビッグイシュー』を発刊する有限会社である。その『ビッグイシュー』はホームレスの人々により販売される。販売員は一冊 140 円で仕入れ、300 円で販売するので、一冊につき 160 円が販売者の収入となる。ビッグイシュー日本の目標は、ホームレスの自立、すなわち路上生活から屋根のある場所で生活することを支援することである。

②日本のホームレス

「ホームレス」の定義、日本のホームレスの数、どのようにしてホームレスになるのか、などを中心に日本のホームレスの実態把握を試みた。また、高度経済成長期における建設業の日雇い労働や現在の規制緩和による日雇い派遣などの歴史的･社会的背景からも考察を加えた。

③社会的企業としてのビッグイシュー日本政府や NPO による公的支援と企業による民間支援（いわゆる企業の社会的責任）とを比較しながら、社会的企業の外観を捉えた。企業とは利潤追求が第一目的であるが、ビッグイシュー日本の目的は社会問題の解決が第一目的である。その目的達成のために公的援助（税金や寄付）でなくビジネス的手法によるというのが、ビッグイシュー日本が社会的“企業”と呼ばれる理由である。また、ビッグイシュー日本は、NPO 法人ビッグイシュー基金を設立し、企業と NPO という二つの組織にそれぞれの役割を担わせてホームレスの自立支援を行っている。

【感想】

発表者：

公的支援に限界があるという私の言葉は、やはりルワンダ人たちに引っかかったようであった。また、ホームレスとハウスレスは違うという説明にも、疑問を持ったようであった。ここには精神的な意味合いが込められており、ハウスレスは物理的に家がないというような状況であるのに対し、ホームレスとは自分の空間、すなわち温かいお茶を飲みほっと一息つく安息の場がないという状況という意味合いであったのだが、伝わりにくかったようである。

ホームレスの定義の違いや、企業の在り方の違いなどを考える契機となり、プレゼンの目的を十分に達成したと言えるだろう。

参加者：

Habimfura Maurice

ホームレス問題の解決のための方策を扱ったこのプレゼンテーションに個人的にとても興味を持った。このプレゼンテーションによって、ビッグイシューという雑誌の販売によってホームレスの人々がどのように自分たちの問題に立ち向かうのかということがよく分かった。

また、ビッグイシューのシステムは、始めはとても大変だが多くの人の支援を得ながら成功しており、この点は失敗を恐れずにあらゆる活動を始めてみようという大きな希望につながるものである。

Ntaganda Alfred

まさか、世界有数の先進国である日本で、ホームレスの人々を目にするとは思わなかった。だが、聞くところによれば、アメリカにも同じような現象が起こっている。私たち全員で、安心して暮らせる世の中を築いていかなければな

らない。特に我々教育を受けた者は、苦境に立つ人々を支援するプロジェクトを考案しなければならない。たとえば、町の清掃員として彼らに職を提供すれば、自立への一歩につながるだろう。

長崎原爆

（永井隆博士の一生）

発表者：今泉奏

参加者：大山、岩井、岩垣、今泉、海原、嘉積、片岡、片山、久保、ガン、品川、嶋田、西岡、藤沢、藤原、古屋、山崎、Maurice、Alfred、Adolfe、Clarisse、Alice

【プレゼン要旨】

今会議では広島のみの見学であるが、もう一つの被爆都市ナガサキについても知る必要があると思い取り上げた。また、永井博士の思想に触れることにより、クリスチャンの原爆のとらえ方を知り、ルワンダのジェノサイドのとらえ方と比較する。キリスト教とナガサキ原爆という二つの観点から、「相互理解」に迫りたい。

【プレゼン概要】

1945 年 8 月9日 11 時 2 分長崎松山町上空で原子爆弾が炸裂。光よりも早い放射線は、一瞬にして7万人以上の生命を蝕んだ。永井隆博士は当時長崎大学で放射線医療を研究していた。彼は原爆が落とされる2ヵ月前、長時間にわたり放射線を扱う研究のため白血病に冒される。そして、8 月 9 日が訪れる。歴史豊かで、浦上天主堂を始め多くのキリスト教会も建つ長崎は、廃墟と化した。永井博士は自ら重傷を負いながらも被爆者の手当に当たったが、やがて出血多量で倒れる。気を取り戻した彼は新たな研究に目を向けた。今まで誰ひとりとして研究したことのない「原爆症」に関する研究だ。熱心なクリスチャンでもあった博士は、「己の如く人を愛せよ」という聖書の一節から、如己堂という2畳ほどの庵で執筆を続けた。ここで「この子を残して」や「長崎の鐘」などの作品を生み出した。昭和天皇や、ヘレンケラー女史などが、世界中から博士の下に訪れ、彼を敬った。世界中から集まった寄付は、すべて原爆孤児のために使われた。そして１９５１年、彼はわずか４３年の生涯を終える。彼の遺体は解剖され、死してなお原爆症の研究に尽くした。

【ディスカッション】

（5～6 人の班に分かれて自由に意見を述べ、その中からいくつか発表してもらった。）

テーマ：

当時日本のクリスチャンの間では「原爆は天罰であり、被爆者は罪のために罰を受けたのだ」という解釈で被爆者差別の風潮があった。永井博士はこれを、「原爆は神様が私たちに与えた試練であり、我々は生け贄として被爆したのだ」と説くことで差別を否定した。博士の主張についてどう感じるか、また、ルワンダではジェノサイドを宗教的にどうとらえているのか、自由に論じる。

●結論・提言

※宗教的視点が違うため、共通の結論に達することは無かった。しかし、お互いの原爆とジェノサイドのとらえ方が一通りでないことを確認できた点は、非常に有意義であった。

・キリスト教徒が多いルワンダでも、永井博士が原爆を「試練」と説いているように、ジェノサイドを「試練」という考える解釈が一般的である。
・日本人としては原爆やジェノサイドが「神が起こしたもの」と考えるのには抵抗がある。原爆を落としたのはアメリカであり、ジェノサイドの要因も具体的なはずだ。そう考えなければ、私たちがルワンダや広島について学ぶ意義が薄れる気がする。
・もちろん、ジェノサイドは様々な要因があって、具体的、学問的に解釈されてもいる。ただし、和解を考える上ではキリスト教の考えは有効なのではないだろうか。

【感想】

発表者:

初めはナガサキ原爆の具体的な説明から入り、徐々に宗教観による紛争のとらえ方へと視点を移行していった。この永井博士の「神の試練」の議論は長い間長崎でも行われている。多くの日本人にとって「戦争」はあらゆる具体的原因により起こるものである。しかし、ルワンダ人や永井博士の捉え方はそれとは異なっている。大切なのは自分と全く違う解釈をする人々の存在を知ること、複眼的な視点を持つことである。やはり、日本ルワンダ学生会議において「日本」と「ルワンダ」だけの交流だと視野が限られてくる。我々は、常に第3、第4の視点を持っておかなければならない。

参加者：

Ishimwe Alice

The bomb was dropped on 9th august 1945 at 11:02. The first destination of the bomb was Goura but because of big clouds the American went to Nagasaki, there were also clouds but they found there a break then boom!! All Christians of Urakami Catholic Church were burned to death (the church was said the greatest church in Asia). Many bad things happened, many people died, houses completely burned, not only that but also for those who survived, life is not easy for them.

コラム　私にも踊れる！！！！久保 唯香

能、狂言、歌舞伎、日本舞踊。日本にはたくさんの伝統舞踊がある。私にはそんなたしなみはない。こどものときに踊った盆踊りがよいところである。

ルワンダにも地域によって多少異なる伝統的なダンスがあるという。しかし基本は同じで、名門「ＩＮＤＡＮＧＡＭＵＣＯ」（ルワンダ人メンバーが所属する伝統ダンスグループ）はその伝統的なダンスをアレンジして踊っている。女性と男性のダンスは分かれており、コラボレーションもある。歌、ドラム、ダンスのパートがある。衣装はとても魅力的だ。本番前には気合いを入れるためにニオイをぷんぷんさせる。

ーじゃあ、踊ってみようか？と言われたのはコンサート（本番）２日前だった。

５人という少人数であっても舞台袖で見る踊りには圧巻だった。「ああ、いいよ。踊りたい！」と言ってしまった。こんなはずじゃ…。

さあ、腕を横に伸ばしてみよう。肘は軽く伸ばして、手首は肩より高い位置に。背筋を伸ばしたまま腰を落とす。右に２歩、左に２歩、顔は進行とは逆方向を向く。少し顎を出して上を向く感じ。そうそう、その気になってきたら完成だ。

もうひとつ踊ってみよう。手首を白鳥の首みたいにして攻撃体制をつくる。次にその手を真下におろしてひげダンスポーズに。あくまでかわいさを重視したポーズだ。これにステップを追加する。ステップ１拍の中に左右２歩ずついれていく。楽にできるようなら右左右、左右左、と３歩いれてもよい。不可能と諦めそうになっても、とにかくどたばたしていればそれなりに見えるから諦めてはいけない。

衣装も大事な要素だ。私は黒いキャミソールの上に白いサテンの布を巻いてもらった。それに金色の細い帯を締める。女性はオールバックが基本。前髪で顔を隠したい気持ちを抑え、前髪をあげた。

最後に笑顔が重要である。ルワンダ人メンバーの踊っているときの笑顔は本当に美しい。真似してみることが肝心である。たとえ私のようにダンスが多少まずくても、笑っていればほめてもらえるだろう。

何はともあれ、ダンスという文化にふれることで、ルワンダに少し近付けた気がした。やはり口先だけでルワンダは語れない。ルワンダに恋している方に、ルワンダンダンスをおススメする。

日本のジェンダーについて

発表者：片岡　美月

参加者：大山、岩井、片岡、宮本、古屋、品川、嶋田、久保、海原、井上、岩垣、滝田、志賀、 ガン、Maurice、Alfred、Adolfe、Clarisse、Alice、 Aline

【プレゼン要旨】

一見すると、日本は先進国だ。経済は発展し、インフラは完璧に整備され、ファッションや文化の面でも世界に貢献しているといってよいだろう。だが、ジェンダー問題は、その発展／整備が著しく遅れている。

ジェンダー問題は、ただ女性議員の数を増やせばいいわけでも、企業が女性の雇用を促進すれば良い訳でもない。人々一人一人の心に性役割の概念が根ざしている以上、その進展は加速しない。

そこで、今回のプレゼンでは、日本の問題点としてジェンダーを取り上げるとともに、誰にとっても身近な（ジェンダー的）存在である母親と育児と父親に焦点を当てた。

【プレゼン概要】

まず、日本のジェンダー格差と経済発展がどれだけ矛盾したものかを、政治・教育に焦点を当てたジェンダーギャップ指数（94 位/134 カ国）と、健康面に焦点を当てたジェンダー不平等指数（12 位/109 カ国）を挙げて紹介した。

次に、いわゆる‘母性神話’と‘三歳児神話’について紹介し、その問題点とそれらを否定する根拠、それらが日本で発展した経緯を説明した。

そしてそれらがもたらす結果として、男性の育児参加率の悪さを指摘し、続いてグラフを用い、現在の日本に性役割がどの程度根付いているか、家事分担の割合はどうか、男性の育児休暇取得率はどうかなどを紹介した。

【ディスカッション】

テーマ

・父性愛と母性愛に違いはあるか
・もしそれがあるなら、どう違うのか。
また、その違いは育児に不可欠か？

●結論・提言

テーマ１：母親は母乳が出るので、やはり母親と父親は違う。特にルワンダでは、父親が社会の規範や生き抜く為の知恵を躾けるのに対し、母親は子どもを優しく見守る存在である。他にも、女性は子どもに対しては第七感がある、陣痛があるからより子どもを愛せる、などの発言もあり、特に母親と子どもを愛情で結びつける意見が多かった。日本人からは特に明確な違いは主張されなかった。

テーマ２：女性と男性では社会的役割も違うので、それが家族で異なるのは当然である。また、母親と父親の子どもは育児に不可欠であり、もしそれが欠けている場合、例えば母子家庭なら、母は父になる努力はできるが、本当に父になることは出来ないので、社会など第三者に父親の役割を担ってもらう必要があるという。またその社会も、女性の社会進出を助けるにあたり、女性と男性の違いを考慮にいれた上で、それを行うのが望ましい。

また、母も父も子育てには必要であるが、キガリで行われているベビーシッターのように、たまに２人が休息を取るのも、子育てには大切な要素である。

【感想】

発表者:

ルワンダは今経済発展の中途にある。日本は高度経済成長期に、それまでにないほど性役割が強調され、専業主婦という職が生まれた。ルワンダ学生の感想を見ると、そこまで極端な風になる可能性はなさそうだが、似たような性役割は見られる。それが今後どのように変化していくかが興味深い。

また、女性議員の割合が著しく低い日本と、その割合が世界で一番高いルワンダなのに、子育て観においては大きな差が見られなかった。

参加者:

Amahoro Clarisse

子育てに参加する日本の父親たちにとても感銘をうけた。父親が子育てをする時間が、1981年の一日3分から、2003年には30分になった。だから私は父親が子育てをする時間はとても大きく増加してきたと思う。

私達のグループの議論を通して、日本の家族においては父性愛も母性愛も存在するが、子どもの全ての要求を満たすことは難しいと気付いた。

また、日本人メンバーが、「私は誰か(父親)の助けがなくては子育てができないと思う」と言ったことに驚いた。何故ならルワンダでは、三人から五人の子どもを一人で育てている女性がいるからだ。

そして、ルワンダでは、父と母の役割は家族の状況によって異なるが、大多数のルワンダの家族では、父が家計を助け、学費や食費を稼ぎ、子どもをしつけるのに対して、母は、家族に愛情を注ぐなどしている。

Abijuru Adolfe

妊娠出産が母親にしか行えないのならば、子育ては父親にもできる、重要な仕事だ。私達のグループのディスカッションでは、母と父に違いがあっても、どちらも子どもには重要で大切な役割であるということを確認した。だから父も母も子育てに充分な時間を確保するべきだ。このトピックはとても大切なものだった。

JRYCにおける

協力の理由と方法

発表者:Habimfura Maurice

参加者:大山、岩井、宮本、池上、井上、岩垣、海原、片岡、ガン、久保、志賀、品川、嶋田、滝田、古屋、Maurice、Alfred、Adolfe、Clarisse、Alice、Aline

【プレゼン要旨】

このプレゼンテーションの狙いは、JRYCの協力体制の価値を見極めることである。

【プレゼンテーション概要】

◆協力の定義

・共同作業、共同活動である。

・国際的、非国際的主体によって達成される。

・もっとも単純な考え方で言うと、互いに協調しながら活動に参加することである。

・もっとも難解な考え方で言うと、人間の心のはたらき、あるいは国家の社会的傾向と同等といっても過言ではないくらい複雑なことへの参加である。

・分離して競争する活動のとは対極の関係である。

◇2 つの団体それぞれが発展してくために協

力行為が必要となる 4 つの主な条件。
a 理想が一致する。
b 個々に将来的な出会いのチャンスがある。
c 過去において個々との出会いの思い出がある。
d 将来的な成果につながるほどの価値がある。

【ディスカッション】

1. どうして日本人学生がルワンダ人学生と協力しているのか。
2. この協力は日本人とルワンダ人学生によってどのように実行されるべきか。

●結論
JRYCの日本人メンバーとルワンダ人メンバーには、両国の大学生間での社会・文化交流が基本となっているJRYCの目的はなにかというところに、まだ誤解がある。したがって、私はすべてのJRYCメンバーにJRYCでの協力とは何なのか、どうしてJRYCで協力しているのかを一人一人が考えることをすすめる。そしてその後で、JRYCのメンバーは私のトピックを、メンバーの考えを示し明らかにするために、ひとつの成果として、公表するべきである。「世の中にしたいことではなくしたことを伝える」。

【感想】

参加者:

Amahoro Clarisse

早稲田大学で 12 月 23 日に話し合われた日本ルワンダ学生会議（JRYC）の問題と関係する内容を考えることができ、モーリスのトピックは楽しかった。そして、このように広く、深く話し合うことは、JRYC の目的を強調するのに役立つ。

しかし、わたしは彼のプレゼンテーションが一枚のスライドで終わってしまったことに驚いた！他に印象的だったのは、メンバーからあまり活発な意見がでてこなかった点である。同じ日の午後に久保さんのプレゼンテーションで同じような内容を話し合っていたからだと思う。

私たちにもっと JRYC の将来について話し合う時間があったらより良かった。そのためには朝早くから満足いく時間まで、話し合う必要がある。JRYC の未来は全員に必要なものだからである。

久保 唯香

ルワンダの学生と日本の学生、様々な障害があるが、協力していく価値がある。このプレゼンテーションでは、どうして私たちが協力するのか、基本部分を考えなおすことができた。スライドの構成も明晰で分かりやすく、工夫がみられた。年末、最後のプレゼンテーションで団体の本質を話し合うことができ、有意義な時間を過ごすことができた。

乳牛を与え飼育することによる貧しい家庭へのサポート

発表者：Amahoro Clarisse
参加者：池上、岩井、大山、宮本、中西、Maurice, Alfred, Alice, Adolfe, Clarisse

【プレゼン要旨】

乳牛を与え飼育することによる貧しい家庭へのサポート（One Family One Cow）はルワンダの政策のなかで重要である。少しでも理解してもらいたいと思い、紹介する。

【プレゼン概要】

・穀物生産のために貧しい家庭の畑の土壌を改善する
・栄養改善
・家庭の収入を増やすために

このプログラムは二つに大きく分けられる。

1. 寄付

貧しい家庭は無料で牛を与えられる。牛が子供を産めば、子供は隣の家に渡され、さらにその牛が子供を産めばまたさらに隣の家にその子牛が与えられる。それの繰り返しである。このやり方は貸付循環法と呼ばれている。

2. ローン

一般の家庭は牛を買うために銀行でローンを組むことができる。牛を飼うために必要な評価基準に従うことは、課せられた責任である。たとえば、牛小屋を建てる、牛に栄養をつけるために様々な牧草をまく。Girinka プログラムは成功した。
さらにほかの新しいやり方、たとえば以下のようなものも次々に行われている。

1、南部にある Kamonvi という地区は、GIRINKA Y`AKAGURU を開始している。これは集団で多くの牛を飼うやり方で、最初の人が牛を連れていき、子どもを産んだら、次の人が子どもを産んだ牛を連れていくというやり方である。

2、他の新しい活動は KURAGIZA:と呼ばれるものである。これはある牛のオーナーが隣人に一頭牛を与え、その牛が子どもを 2 匹産んだら、お礼にさっきの牛をくれたオーナーに 1 匹を与えるというもの。

3、裕福な牛の飼い主が貧しい人に対して、ミルクを飲むためや肥料から得られる利益のために牛を飼わせている。これは KOROZA と呼ばれる方法である。

【ディスカッション】

・ルワンダと日本、両方の社会において牛の存在は重要であるとの認識の共有
・ルワンダ政府に提案できる、一家に一頭の牛を配るようなプロジェクトはほかにないか。

【感想】

発表者:

テーションで、メンバーは GIRINGA プロジェクトだけではなく、他のルワンダ政府の政策にも興味を持ってくれた。

参加者:

品川 正之介

このプレゼンのディスカッションで一番感じたことは、ルワンダ人は互いに助け合うという気持ちが強いということである。貧しい家庭から牛を与えていくとか、協力して育てていくとか、牛に子供がほかに人に譲るとかいう話にルワンダ助け合いの精神や優しさを垣間見た。この政策はルワンダ社会の実情に合致した良い政策だと思う。誰かが鶏にして卵をとるのはどうかとアイデアをだしていたが、アイデア次第でルワンダの貧困層を救うような政策がもっとできるとではないかと思った。

ICT Development in Rwandan education

発表者:Ntaganda Alfred

参加者:岩井、大山、久保、宮本、中西、池上

Adolfe、Clarisse、Maurice、Aline、Alice、Alfred

【プレゼン要旨】

ルワンダでは ICT（情報通信技術）を用いて国家の発展を狙っており、それは国家の発展の計画である VISION2020 の中核に位置付けられているという。今回のプレゼンでは ICT の成長と、特に ICT が教育にどういう変化をもたらしつつあるかかという点を中心に説明がなされた。

国家は ICT を用いてどのように発展向上させることができるかについて、アイデアを共有し、互いの国の例からそれぞれ何を学びいかせるかという点で共通理解を得ること。また、このディスカッションを通じて両国を比較し、それぞれの国の発展に繋げることを目的とする。

【プレゼン概要】

ICT は VISION2020 の中心となっている。VISION2020 は国家の発展計画のための戦略を描いたものであり、それは ICT を通じて実現されようとしている。2020 年にはルワンダがどういう国家として実現されているかの展望を示したものである。

ICT を用いた教育は核となるものの１つとなる。そのために国は現在 PC を購入し、すべての国民がインターネットを利用できるように回線を供給している最中である。また、教師に PC の使い方を教育しており、そのために知識がある人材を海外からも登用している。まずは知識を十分に持ち、子供への教育が可能となる人材育成に力を入れている。

VISION2020 は政府によって採用され、教育・人材育成を重視している。それは教育は発展への重要な要素であるという考えに基づいているからである。2003 年に授業料が廃止され、現在ルワンダでの初等教育は無料で行われている。就学率は非常に高く、ほぼ全ての子供たちが初等教育を受けることが出来ている。以前は女の子の就学が拒否されていることもあったが、現在は平等に教育を受けることができる。また、ルワンダの高等学校ではアカデミックと専門技術者育成の 2 クラスから選択できる。大学は 6 つの国立大学と 19 の私立大学が存在し、最も優れているのは NUR と KIST（Kigali Institute of Science and Technology）であり、NUR は ICT の分野でも極めて優れている大学となっている。

ICT の教育の成長の段階は3つあり、第一段階は 2005 年に達成され、現在は第二段階に入っている。この ICT での成長には NITC（National Information Technology Commission）が重要な役割を担っている。

システムとしても整備されつつあり、国内図書館ネットワークの設立や、通信教育でルワンダのどこにいても修士課程を学ぶこともできるようになってきている。

光ファイバーの設置を進めているため、ルワンダのネットワークへのアクセスの速さはアフリカ全土でも 2 番目というクオリティである。ただし、2003 年には全人口の 7%しかインターネットを利用できる環境になく、71％の人はインターネットを利用したことすらないという状況であったが、地方の人々も利用できるようにケーブルの設置工事を進めるなどした結果、近年は更に多くの人々がインターネットを利用している。（ちなみに携帯電話がカバーしているのは全人口の約 65％）。

2000 年には、PC がある小学校は全土で 1 つしかなかった。しかし 2006 年には全土の約半数の小中学校に PC 本体が設置され、ICT の訓練を受けた教師がいるようになった。そして 2008 年末にはワイヤレスインターネットすら可能になる環境が整うようにもなった。

国を挙げたICT事業にはマイクロソフトの協力もあり、OS や教育に必要なフリーソフトの提供などを受けている。

【ディスカッション】

①ICT がどう日本の教育に影響を与えてきたか。
②ICT がそれぞれの国において、ビジネスやその他の分野でどのような良い影響を生み出しているか、また、ICT が生み出した負の側面は何か。

【感想】

発表者:

ディスカッションの最中に質問されたことは、「ICT が教育に与えたインパクトはどのようなものなのか」ということと、「学校には何台くらい PC があるのか」ということであった。日本の学生はそれぞれ自分専用の PC を所有しているのに対し、ルワンダでは大学生すら 5～8 人で 1 台のPCを共用し、さらに地方ではまだPCを使える環境になく、インターネットも利用できない。このように両国の現状は異なり、決して容易ではないが、日本から学ぶ方法を見出すつもりだ。他国がどういう状況で成長しているのかを見る機会を得た若者として、私たちの国を発展させるために最大限の努力をしなくてはいけないと思う。

参加者:

池上　純平

プレゼン資料にデータやグラフを用いて定量的に分かりやすく説明を行うなど、今回のプレゼンにアルフレッドが力を入れていたのは発表中にも感じ取れ、ルワンダの現在の「看板事業」ともいえるICTへの誇りのようなものが見て取れた。国家としての復興から希望に溢れる未来へと一直線に繋ぐもの、彼らにとってそれが ICT である。

国家として成長を推し進める製造業がないにも関わらず、知的生産によって成長をとげた国家はしばしば「バーチャル国家」などと言われ、主に近年のアジアでよく見られた現象である。彼らがそれをモデルケースとして捉えているのかどうかは分からない。しかしながら地理的にも恵まれているとは言えないルワンダにとって、目指す姿はおそらくそのような国家であり、ICT 事業での成功は不可欠であるようだ。

ただし、疑問も残った。彼らは時折「十分に PC を使える環境にない」と言うことがある。しかしながら、小学校にまで PC を設置するほど力を入れているルワンダにおいて、最上位の大学である NUR の環境が十分ではないということがあるのだろうか。まさにこれから国家を担っていく人材を生み出す大学である。可能であれば、NUR の PC 事情を確認してみたいと思った。

コラム　アドルフの棒は何だったのか。片岡 美月

関西空港のゲートから彼らが現れたとき、アドルフの持つ長い棒は、彼らの普通のスーツケースや鞄の中に混じって、一際目立っていた。きっとダンスイベントに使う、大切なものなんだろう。多分日本人メンバー全員、そう思った。

最初に疑惑が湧いたのは、名古屋でのホームステイ。あの棒が、次の滞在先である東京に一緒にやって来なかった。名古屋に置き去られていた。いやしかし、どんなに大切なものでも、それがどんなに大きくて目立つものでも、人間、忘れるときは忘れる。それに名古屋を発つときは、皆慌ててた気もする。が、一度目は偶然に思われることでも、二度起きれば、それはもう何かそれが起こる裏付けがあると思うのが普通だ。

棒は、広島にもやって来なかった。ふと気がつくと、滞在先のロビーの観葉植物の影に、新聞紙でぐるぐる巻きにされた棒が、ひっそり届けられていた。アドルフはそれを自分の荷物のとこに運ぶでもなく、おー届けられたんだーくらいのリアクションで出迎えた。

広島の訪問先からホテルに帰ると、案の定というか、ゴミ箱の近くに置いてあった棒は、ゴミと間違えられて片付けられていた。ちょっと慌て気味且つ申し訳なさそうなホテル職員さんを尻目に、いやーやれやれーといった感じで棒を受け取り、新聞紙を巻き直すアドルフ。2mくらいあろう棒は、滑らかに磨き上げられているが、木本来の節目というか、デコボコはそのままで、やはりとても日本では手に入りそうにないし、市販されているものとも思えない。

「それ、どこで買ったの？」「いや、買ったなんて。とても大切なものなんだよ」「へー、じゃあそれ無くなっちゃったらどうするの？」「んー死んじゃうよー」

ほらやっぱり。大切なものなんだ。ちょっとうっかりさんなだけだ。彼の笑っているような口と大げさな表情を浮かべた眉から漂うふざけた感じは、その時は大きく考えなかった。

だが、注意してみると、どう考えても棒の扱いは命に関わる程大切なそれじゃない。むしろ日本人メンバーが気をつけてないとまた置いて行かれそうだ。本会議の後、日本人で話し合ってみると、出るわ出るわ、アドルフの棒に対する高慢な振る舞いの数々。それなんか運ぶのめんどいから後で持って来て、と彼が言ったという証言も聞かれた。

結局、あの棒はなんだったのか。もしかしたら本当に大切で、アドルフがツンデレなだけなのか。それとも本当に、あわよくば日本に置いて帰っちゃえだって長過ぎじゃんこの棒めんどくせぇよ持って帰るの、と思ってたのか。きっとずっと分からないままだろう（まあ多分後者だろうけど）。

【第４章】

ホームステイ

貴重な一泊＠志賀家……100
海原家に久しぶりにお客さんが来た日……101
自然体なアリース……104
ちゃっかり家族……105
ルワンダ人との一週間……106
宮本家でのおもいで……108

貴重な一泊@志賀家

志賀　まりも

中学生の時に海外からきた女の子のホームステイを何度か引き受けたことはあったけれど、ルワンダから男子学生にホームステイをしてもらうことが決まった時、女姉妹の私にとっては大きな不安があった。学生会議の後東京から、千葉にある家に電車で 1 時間以上かかった。モーリスには床の間のある和室に泊まってもらった。夕食前、モーリスがピースコンサートの記事を載せたり、FACEBOOKをしたりしている横で、私は広島原爆ドームに日本ルワンダ学生会議から捧げる千羽鶴を繋げることに夢中になっていた。夕食は家族みんなで食べた。昨年も日本を訪れたモーリスは日本のお茶に慣れているのか、ほうじ茶や緑茶も飲んでいた。唐揚げやグラタン、サラダなど好き嫌いなく食べてくれて料理した父母は喜んでいた。次の日、新宿へ向かう電車の中でモーリスは熱心に、日本語を習得しようとたくさんの例文を覚えてメモしていた。モーリスのフレンドリーさと笑顔に安心し、最初に感じた不安はすっかりなくなっていた。

学生会議や企業訪問の時とは全く違う普段のモーリスを垣間見られてよかった。またルワンダと日本の性教育の違いを話すことなど、日本人なら男女で話すことがはばかれるようなことも国が違えば考え方も違い、何気ない会話の中にも驚きや発見があった。家族の中で唯一英語が達者の姉がいないこともあり、モーリスが来る前は不安があったけれど、片言の英語でも伝えたいという思いや、もてなしの気持ちがあれば必ずその心は伝わることを実感した。

父母ともルワンダの場所さえ明確に知らなかったけれどPEACECONCERTへ行き、アフリカを身近に感じることが出来た。長年オイリュトミー（ゆったりとしたダンス）を学んでいる母はルワンダのダンスにとても親近感を持ったらしい。モーリスからルワンダのダンスを教わらなかったことが唯一心残りのようだ。モーリスをまるで息子のようにとても気に入っていた。私も含めて家族はダンスで平和を導くという考えに深く感銘を受け、文化について改めて考える機会になった。

Habimfura Maurice

まりもはJRYCの新メンバーで、彼女は 4 人家族で父・母・姉・彼女がいます。まりもの家に行きホームステイをする日、JRYCのメンバーは皆、私のホームステイにわくわくしていました。なぜならJRYCでまりもはシャイで私の社交的な性格とは正反対だったからです。

私は家に向かう電車の中で眠かったです。最寄り駅について、彼女の父が迎えにきてくれました。まりもの家でのホームステイで私は彼女の

母と父の大きな優しさのおかげで楽しく快適に過ごすことが出来ました。

まりもの父が私のパソコンの調子を見てくれて、どう治すべきかを教えてくれたこと、そしてルワンダに帰った後修理に成功したことを感謝しています。まりもと話したこと、そして日本語を学ぶのを手伝ってくれたことを今も覚えています。日本語を数年の間に流暢に話せるようになりたいです。

海原家に久しぶりに　お客さんが来た日

海原　早紀

当初は娘のアフリカ行きを拒み、ルワンダは怖い場所だと思っていた両親が、ホームステイを受け入れてくれたことは実は驚きだった。とはいえ、最近は完全に私の影響を受けルワンダ通になりつつある海原家では、クラリスの到着を待ち遠しくしていた。

飯田橋から電車に乗り、千葉の場所を説明したり、ミッキーを知らないクラリスにディズニーランドを説明するのに苦労したり、また初めて見る海を窓から眺めながら、新浦安に到着した。

家に着くと、小柄なクラリスを見て母親は「かわいい！」と感動し、父親は張り切ってホームビデオを見せたり、日本の地図を出してきたりと大騒ぎだった。

そんな中クラリスが一番気にしていたのは、うちの愛犬だった。ルワンダでは犬といえば狂犬病を持つ野犬というイメージが強く、女の子はとにかく犬が怖いと口にする。実は犬の方も人見知りでよく吠えるので、犬とクラリスの接触を極力回避しなければと私も気を使っていたのだが、近寄る犬を見て意外にもクラリスが手を差し伸べる場面を見て私たちが驚いた。

夜は父の車で出かけて、時間を見計らってディズニーの花火を見てから、葛西臨海公園の観覧車を眺める夜のドライブを楽しんだ。

次の日はランチの予定があったので、朝ご飯と記念撮影だけでお別れをしなければならなかった。プレゼントとして、カード、折り紙と折り方の本、お手玉、そして母親が作ったコサージュをあげた。クラリスはお花が好きだということを前に聞いていて、駅で待っている時もお花屋さんを見ていたし、母親の作った花の作品の写真を食い入るように見ていた。月並みの贈り物ではなく彼女の好みにあったものをプレゼントできて嬉しかった。

皆と離れて、しかも千葉の遠くまで連れて来られてクラリスはどう思うか、実は少し不安もあった。しかし本会議中のまじめな企画とは逆にホームステイではなるべく楽しい思いをさせてあげたいと工夫してはしゃいだ結果、逆に

私と両親の方が楽しんでいたのかもしれない。クラリスはどうだったのだろうか。彼女の感想を読んでもらいたい。

Amahoro Clarisse

ホームステイが早紀の家だと告げられたときは、早紀が静かな性格であったため不安に思った。しかも、彼女の家には犬がいると教えられてさらに怖くなった。それでも、日本ルワンダ学生会議ではスケジュールを尊重することが大事なので、彼女の家に行くことに快く合意した。

他のメンバーと離れて、会議の場所から遠い家まで電車に乗る間、早紀といろんなお喋りをするようになって仲良くなった。

電車を 4 回ほど乗り換えて、駅に着くと 20 分ほど待って早紀のお父さんが車で迎えにきてくれた。お父さんは私を優しく迎え入れてくれて、上手な英語で私にたくさんの質問をしてオープンな雰囲気を作ってくれた。そんな仲でも、お父さんがトランクに荷物を入れてくれて喜んだと同時に、犬を飼う家で私は本当にやっていけるのかと問いかけていた。

マンションに到着して、お父さんが車を停めに行っている間におうちに入った。お母さんがドアを開けて出迎えてくれたが、犬のルーシーも一緒だった。ルーシーが初めて見る私に吠えるのを二人が頑張ってなだめて、早紀がルーシーを抱っこすると嬉しそうにしていた。

お母さんが私の名前を聞いてくれて、すでに私のことを知っている事に驚いた。そしてルーシーを改めて紹介してくれた後、私によく懐いているのを見て家族が皆驚いていた。こうして私の不安は全て消えていった。

早紀のお母さんはお花の先生で、うちに飾ってあるお花について教えてくれた。他にも写真を見ていると、クッキーとチョコを出してくれて、その後にはお父さん、お母さん、早紀、弟の悠樹と夜ご飯を食べた。

夜は早紀の部屋で一緒に寝た。よく眠れたので朝はとても遅くまで寝てしまうほど、心地よい夜だった。

朝にはお風呂に入り、パン、紅茶、オムレツ、ヨーグルト、フルーツなどの朝食をとった。海をバックに写真をとって、たくさんのプレゼントをもらった。

どのようにこの文章で全ての気持ちを書いたらいいかわからないが、知ってほしいことは早紀の家族と過ごしたときを絶対忘れないということだ。

自然体なアリース

井上　真紀

ホームステイに向かう電車の中、まだお互い心を開けていないような状態だと感じていたので、とりあえず私はありとあらゆる質問を彼女にぶつけてみた。大学のこと、家族のこと、好きな食べ物、休日の過ごし方、友達関係…。話してみると、実は私と同じくロックファンで、例えば UK バンドの Coldplay が好きで、意外な共通点が発見できた。また、私も知る NUR の学生の噂話や今までの恋愛話などでは大いに盛り上がった。

そんなこんなであっという間に私の地元・伊勢原に着いた。家に入るなり、アリースの到着を待ちわびていた父・母・妹・祖母はリビングルームで改まって整列し、自己紹介をした。その後、母が張り切ってこしらえた夕食を食べた。アリースちゃんは気持ちのいい食べっぷりを披露してくれ、母はとても喜んでいた。連日のハードスケジュールで疲れていたと思ったので、食事の後は TSUTAYA で一緒に借りた映画「バレンタインデー」を皆でまったり見た。アーリスは映画に出演しているジェシカ・アルバのファンなので、とても嬉しそうにしていた。

寝る前に、母が今までコツコツと集めていたペットボトル飲料水についてくるおまけのキャラクターがついたストラップの束をあげると、アリースは目に涙を浮かばせるくらい喜んで受け取ってくれた。ルワンダにいる兄弟姉妹たちのことを思い出したのかもしれないと思った。

翌朝、ゆっくり朝食を食べた後、私と母とアリースは平塚の海岸に向かった。ルワンダには海がないので、アリースにとって初めての海になるかもしれない…と私は密かに期待していたのだが、実際ケニアで海は既に見たことがあるそうで少しがっかりした。しかし、やはり珍しいものには変わりがないようで、アリースは目を輝かせて海辺ではしゃいでいた。私も美しい冬の海にブーツを脱ぎ捨て裸足で入っていったが、アリースはそんなお行儀の悪いことはしなかった！

このように、アーリスのホームステイで私たち井上家は特に気取らずに普段やっている自然体で彼女を受け入れ、彼女もリラックスして過ごしていたように思える。また、一緒に一日を過ごすことによって、通常の多忙な学生会議の活動からは知ることのできない彼女の人間性を垣間見ることができた。またいつかアリースにはうちに遊びにきてほしい。アリースにとって、井上家は日本での"home"であり続けてほしいと思う。

Ishimwe Alice

私たちは6時くらいに伊勢原駅に到着し、真希のクールなママが私たちを迎えに来てくれました。真希ママは Neyo の音楽が好きで、車の中でず

っと彼の曲が流れていました。ルワンダでは両親くらいの年代の人は普通そういった歌手はティーンエイジャーだけのものだと思っているので、私はびっくりしました。
私たちは真希のおばあちゃん（ばあば）の家に寄ってから家に向かいました。真希の家には彼女のお父さんと妹のキエちゃんがいました。私たちは一緒におしゃべりをしたりして、楽しかったです。私は最初みんなが英語を話せないので意思疎通できるか心配でしたが、そんな心配はいりませんでした。なぜなら真希が説明してくれたからです！私は本当に井上家のみんなが大好きになりました。

ちゃっかり家族

久保　唯香

鎌倉の実家で父、母、兄、そして祖父母、私を含め普段は 6 人で生活している。アドルフのホームステイが決まったときから、日本の家庭を味わってもらいたいと作戦が練られた。遠いアフリカの大学生、アフリカからは初めての受け入れである。この活動に際して、筆者は日本人として礼儀を尽くせと釘をさされていた。

まず実家に到着後、父がドライブに連れて行ってくれた。場所は鎌倉らしく鶴岡八幡宮。そして江の島へ向かった。日はとうに落ちており潮の香りを楽しむ前に冷凍されそうであった。しかし何も見えない太平洋から聞こえる波の音はきっとアドルフに届いたであろう。帰宅すると母が抹茶をたてた。アドルフは薬のようだ、と話していた。夕飯の前に和菓子をぱくり。母が丹精こめて作った夕食も、アドルフは全種類食べてくれた。その日は疲れた様子で、1 日が終わった。2 日目は少し早く起きて、集合に間に合うように、急いで大仏を見に行った。大仏の草鞋にご満悦のアドルフだった。

日本風の床の間をもつ祖父母の家は私が住む家のすぐ隣である。祖父母はアドルフを見て、イケメンで優秀だと騒いだ。そして、運動部生活に明け暮れた私と兄の日焼けした中学高校時代よりアドルフの肌はそれほど黒くないね、近くで見たのは初めてだよ、と嬉しそうに語ってくれた。いや、さすがにそれはないと思う…。

家族はアドルフと撮った写真を大切にしている。兄は 2 日目の朝、二日酔いでふらふらしながらアドルフにあいさつしたことが記憶にないらしい。自分が書いた論文を読ませたかったと悔やんでいる。本当にそんな論文があったのかどうか真相は私には分からない。私に行動には十分気を付けるようにと注意した母は完全にアドルフの腕をつかみ楽しそうに写真に写っている。ちゃっかりしている。父はフランス語ならもっと話せたと話しているが、実はアドルフはフランス語がペラペラである。

2 日間あったが、少なからず私の家族に影響を与えたらしい。こうして短いホームステイは幕を閉じた。

Abijuru Adolfe

久保家での滞在は私の３度目のホームステイだった。１２月３０日、私は鎌倉にある久保家に行った。大仏を見ることができ、太平洋も訪れることができたので、私にとっては大きな経験とな

った。私と久保さんは鎌倉へ向かう電車の中でとても疲れていた。午前中に会議があり、その上東京から鎌倉までの道のりが長かったからである。家に着くと、久保さんの両親が待っていて、互いにあいさつを済ませた。私の荷物を部屋に置いた後、お父さんが鶴岡八幡宮に連れて行ってくれた。その後、太平洋を見に行き、帰宅した。家ではお母さんが我々のためにおいしい夕飯を用意してくれていた。久保さんのお母さんはとても楽しく、とても英語を上手に話すので、いろいろなことを話すことができた。夕飯の後はご祖父母に会いに行った。ご祖父が農林水産省の役人であったこともあり、日本の農業政策について話した。ご祖父母と話したあと、私は床についた。翌朝、日本の伝統的なお茶と朝食を済ませ、ご両親、ご祖父母と記念の写真を撮った。写真の後、ご祖父母に別れを告げた。久保さんとご両親、私は大仏を見に行った。大仏に行った後、ご両親が我々を駅まで車で送ってくれ、別れることとなった。私は久保家で短期間ではあったがすばらしいときを過ごした。

ルワンダメンバーとの一週間

品川　正之助

僕の家でのホームスティは他のメンバーより長く、一週間が予定されていた。紙面の都合上一週間分すべての出来事を書くことはできないが、その一部をここに書くこととする。

ホームスティをするにあたって、初めての経験ということもあり、もちろん非常に楽しみであったのだが、もともと不安症である僕とっては、コミュニケーション、食事、アフリカンタイム（これについてはコラムに譲るが）など楽しみを上回るほど不安もたくさんあった。中でも一番不安だったことは移動についてである。自宅から普段の活動場所である早稲田や都心方面には約一時間半かかるのだ。これが一番の不安の種であった。

あれは忘れもしないホームスティ初日。帰りの電車は超満員で座れることのできないうえ、メンバーは大きな荷物を抱えていた。顔を見ると疲労からかみんな目が真っ赤に充血しており、ぐったりとした顔をしていた。日々の過密スケジュールに加え、ルワンダで彼らは大学の近くに住んでいるらしく、普段はほとんど通学に時間はかからないそうなので、彼らにとってはさぞかし辛かったであろう。僕の一時間半という通学時間と毎日の電車の混み具合を教えたところ非常に驚いていた。そんなこんなで初めから不安ばかりでホームスティが始まったのであった。

食事での一枚

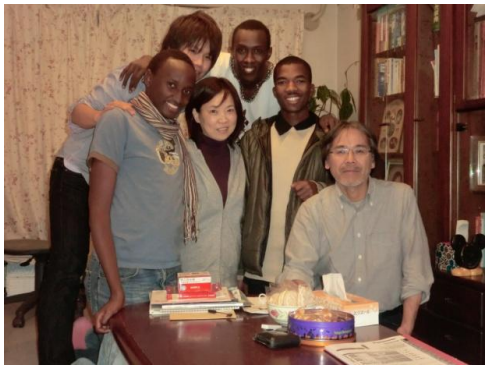
次に不安であった食事に関して、去年の日本招聘の反省を聞いていたのでルワンダ人の口に

合うようパスタやカレーなどを大量に買い込んで備えていた。これが功を奏しなんとか食事で困ることはなかったのだが、夕飯はほぼ毎日カレーという事態になってしまった。さすがにまずいかと思い今日はほかのものを食べようと言ってみてもルワンダ人は問題ない、むしろカレーが良いと言って聞かなかった。なにか変な日本食が出てくるのを恐れていたのだろうか。それでもせっかく日本に来たのだから寿司くらいは食べようということになった。初めての寿司を目の前に彼らは箸を上手に使い、わさび入り醤油につけてぱくりぱくり。おいしいといって食べていた。ルワンダ人は醤油が苦手と先輩に聞かされていたのでこれには驚いた。まさかやせ我慢じゃないだろうな・・。ちなみにルワンダ人は食事の時は必ず紅茶（お砂糖たっぷり）を飲むのだが、それは寿司の時も変わりなかった。

夕飯が終わると「ごちそうさまでした」と日本語で言ってテーブルを後にするルワンダン達。彼らは日本語を覚えるのがとても早い。ごちそうさまだけでなくホームスティ終盤には「おはよう」「いただきます」「さむいね」はたまた「おなかいっぱい」まで覚えていた。彼らは母国語のケニアルワンダ語に加え、英語、フランス語が堪能であり、さらにはスワヒリ語も話せるメンバーもいる。そのうちその中に日本語が混ざっても不思議ではないかもしれない。

夕飯後はそれぞれお風呂に入るのだが、お風呂というのは日本と外国の文化の違いを認識するための良い例の一つだと思う。体を洗って、湯船につかる。日本では当たり前のことだがルワンダ人にとっては全くの異文化。モーリスは 2 回目の日本なので日本式お風呂の入り方を知っているのかと思っていたが、そうではなかった。入り方を教えてあげると非常に驚いていた。またこっちが逆に驚かされたのはルワンダ人たちのシャワーを浴びるスピードである。ものの 5 分程度でシャワーを済ませて出てくるのには驚いた。どうなっているのだろう。

こう一緒に生活していると様々と文化の違いを感じたし、ルワンダ人たちも感じたことだと思うのだが、彼らが日本の文化や慣習を積極的に実践しようとしていたのがうれしかった。それは箸や食事に関してであったり、ジャパンタイムであったりするのだが、印象的であったのは、優先席である。（これは特に日本の文化、慣習といえるようなものではないかもしれないが）



最終日　家族での一枚

ある日バスや電車にある優先席についてこれはなんだと質問され、説明してあげると、次の日からモーリスが見ず知らずの日本人のおじさんに席を譲ろうとし、自分が疲れているのにもかかわらずアルフレッドが席に座らず立ったままでいたので、聞いてみると「自分よりこの席を必要としている人がいるから僕は立ったままでいいんだ。」と言ってくれて、彼らの人を思いやる気持ちになんだか心が温まった。

はじめは不安ばかりであったホームステイも、彼らの協力もあり特に大きな問題もなく過ごすことができた。初めの方は不安と責任とで眠つけぬ夜もあった。しかしホームステイが終わった日はみんながいなくなってからっぽになった部屋一人、さみしさで寝むれない夜を過ごしたのであった。

ホームステイをするにあたっていろんな面で非常に協力してくれた両親、また日々の長距離移動、慣れない生活に文句を言わずにいてくれたルワンダ人メンバーには感謝の気持ちで一杯である。毎日帰りが遅くなってしまうことと疲労とが重なって、家の中でじっくり話をする機会が少なかったことが少し残念ではあったが、この一週間の共同生活はとても楽しかったし、かけがえのないものとなった。また彼らがうちに遊びに来てくれることを願ってやまない。そして自分がルワンダに訪れた時には彼らが僕をホームステイに迎えてくれると、非常にうれしく思う。

Ntaganda Alfred

私たちを歓迎してくれ、本当によくもてなしてくれた品川家の皆さんに対して感謝の気持ちで一杯です。これほど親切にしてくれる人に出会えるのはめずらしいことです。親切な心を持つことは人生を豊かにする非常に大事なことであり、この家族の皆がこの気持ちをずっと持ち続けてほしいと願っています。

宮本家でのおもいで

宮本寛紀

第 5 回本会議でホームステイをすると決まり、どのメンバーの家にするかを決める際に私は真先に立候補した。ホームステイほど身近な交流は無いと思うし、なによりも Alfred を私の家に泊めたいと思った。なぜなら、第 4 回本会議で私がホームステイをさせてもらったのが Alfred 家であったため、その恩返しをしたかったのである。その日は、午前中に学生会議を終え、午後は秋葉原を散策し、夕方になってから横浜にある私の実家へ向かった。秋葉原からは遠く、少々大変ではあったものの、移動中の電車内では、普段みんなといるときとは違った話も聞けてとても有意義であった。

家に着き、夕飯を食べたのだが、今思えば普通にいつものようなものが望ましかったのかもしれない。何が好きか分からなかった母親が用意してくれた夕飯は、和食はもちろんのこと洋食もあれば、中華もありテーブルの上がいっぱいになっていた。それを見て驚いていた Alfred に、いつもの夕飯ではこんなに出ている訳ではないことを説明すると、納得していた。夕飯の最中、母親や祖父母は次から次へと質問をするため、その質問を英訳し、Alfred の答えを和訳するという作業がとても大変ではあったが、またそれも、ホームステイの醍醐味なので、楽しむことが出来た。

夕飯を食べ終え、お風呂にも入ると夜遅くになってしまい、翌日の朝は早かったため、早めに就寝した。そして、次の日の朝、駅まで車で送ってもらう途中に富士山の見える丘に立ち寄り、幸運にも天気が良かったため富士山を一望することが出来た。　　やはりホームステイをして本当に良かった。私自身はもちろんのこと、家族にとってもとてもいい経験になった。これを機に、今までそれほど興味を示していなかった祖父母とルワンダやアフリカについて話すきっかけにもなった。祖父母にとっては“アフリカから来た学生”としてしか見てなかったのだが、それでも今まで抱いていた“アフリカ”のイメージが少しでも変わったようにも思える。

Ntaganda Alfred

ホームステイの日、宮本と電車を乗り継ぎ、駅から 15 分ほど歩き彼の家に着いた。そこには、母親と祖父母が待っていてくれ、すばらしい夕飯をいただいた。翌日は、朝早く準備して行かなければならなかったが、とても楽しい時間を過ごせた。彼の家族にとても感謝している。

【第五章】

参加者感想

やらなかったことが一番後悔する……110
バッド・エンディング……111
ルワン団と日本陣……114
相互理解の先に見えてきたもの……115
Exchange……116
A good medicine tastes bitter……118
世の中は広い……119
Cheka!!笑って……119
We meet to depart, and depart to meet……120
Entrance to another world……121
日本でジェノサイドを考える……122
ここから……123
再々会……124
イチゴイチエ……126
大切なこと……127
相互理解の一歩として……128
第一歩……130
充実……132
出会い……133
How Amazing was Japan in My Life……133
日本は不思議……134
マジメかっ!!……134
本当に大切だったこと……135
言葉にできないんだもの

～やらなかったことが一番後悔する～

早稲田大学社会科学部井上　真希

私は嘘をつくのが下手なので、この場でも正直でありたいと思う。はっきり言って、今回の学生会議は自分自身の参加の姿勢について反省が多々あった。まず、個人的な事情の関係で、地方での企画に関われず、東京での企画にしか参加できなかった。限られた時間しかないのだから東京での企画は全て参加しようと思っていたのだが、イベントの次の日に風邪を引いてしまい、学生会議に出られなかった。全ての企画が終わり、”Future of JRYC”という団体にとって最重要なテーマで議論をし、広島から帰ってきた他のメンバーの何かをやり遂げたような顔を見たとき、正直言って悔しかった。

私は東京企画の総括として、企画立案の当初から活動し、特に前年度も関わったコンサートの企画には力を入れてきた。念願のルワンダへ渡航した際には、団体理念である「相互理解」について真剣に考え、日・ル両国のメンバーと議論した。そして、JRYC の一員としてお互いの国のより良い未来を築くアクターでありたいと心から思った。だから帰国後も積極的にJRYCの団体理念やルワンダ JRYC の運営についてルワンダ側 JRYC メンバーとインターネット上ではあるけれど議論した。その議論の延長を、今回来日したルワンダメンバー五名と東京で初めて行なったのだが、それまでの互いの誤解や認識の違いが明らかになり、意見が対立し、理解し合えないことがあった。こうした東京での議論は途中で終わり、そのまま多忙なスケジュールをこなすことになったので、個人的に腑に落ちない気分に陥ってしまった。だから、更に発展した議論をルワンダメンバーと面と向かって真剣な議論をすることができた他のメンバーをうらやんでしまったのだ。

しかし、こうした後悔の念もあるが、今回の学生会議においてルワンダメンバーと共に協力できたという充実感もあった。ピースコンサートの後の食事の席で、全てを出し切ったという面持ちをしたモーリスに、「マキ、君は最高のオーガナイザーだよ！」と言ってもらえたときは心の底から嬉しかった。

こうした一連の経験から私が学んだことは、「どんなに困難で逃げ出したいことがあっても絶対にやり遂げること」だ。普段キレイごとが好きな私ではないが、腹の底からそう思った。これからは自分に妥協せず、無理をしまくって、JRYC の未来に更なる情熱を傾けたいと思う。

～受け入れること～

慶応大学法学部　滝田　知子

6 月くらいにこの団体に入った私は周りより少し遅れたスタートを切った。昔からアフリカに興味があったものの、シエラレオネやソマリアなど全く異なる国のことしか知らなかった私は、この団体に入るまで、恥ずかしながらルワンダのこと、ジェノサイドのことをほとんど知らなかった。前期

の勉強会や、第四回本会議、映画・文献を通してルワンダについて、ジェノサイドについての知識を得ていった。それでもまだ、何か足りない、早く会ってみたい、その気持ちが自分の中に占めていた。そんな思いで迎えた今回の初めての本会議だった。

しかし迎えた当日は期待より不安が上回っていた。私は東京企画のみの参加だったので、12 月 23 日に初めてルワンダ人学生五人と顔を合わせたのだが、その日は顔を合わせて学生会議を行うばかりではなく、クラリス、アリースの二人と一緒に泊まる日でもあったのだ。相手が日本人であれ初対面の人と一夜を共にするのは緊張するのだから、会うまで私はかなり緊張していた。だが、いざ会議を終えて三人で地下鉄に乗っているときも宿泊場所でも、大学の話など、たわいも無い会話で盛り上がり、とても楽しい一晩を過ごすことが出来た。床が痛いだろうと寝袋の下に布団を敷いてくれ、むしろ私が気を遣ってもらってしまったくらいである。

彼らと会って、誰もが印象的だと感じることは、彼らの笑顔ではないかと思う。屈託の無い笑顔が本当に素敵だと何度も感じた。ピースコンサートでの笑顔はもちろんだが、普段一緒にいるときに彼らが見せる満面の笑みが私は大好きだと思った。同時に、ジェノサイドという経験をしている彼らがいつも笑顔でいられるのはなぜだろう、と感じたこともあった。

東京企画が終盤に差し掛かったある日の学生会議の場で、アドルフが印象的なことを言っていた。「Japanese people, accept yourself.」自分の過去や経験を受け入れろ、ということを言っていたのだと思う。彼らは自分の経験を受け入れ、素の姿でいられるのだろう。私たち日本人各人に辛い過去や経験は少なからずあるはずだが、それを accept する、という大切なことを教えてもらった第五回本会議であった。

～バッド・エンディング～

早稲田大学理工学部　大山　剛弘

この団体・日本ルワンダ学生会議（以下JRYC）は、ポジティブな団体だと思っています。何といったって、11000km も離れた人々とインターネットで会議し、年にあわよくば2度会うだけで、「相互理解」しようというのですから。それはまだまだ人生経験の少ない僕たちにも、頭でも体でも、嫌というほど難しいと分かるのです。せっかくなので、JRYC での2年強で、僕たちが何に四苦八苦してきたのか、思いつくだけ書いてみます。

・合宿に行き、楽しくバーベキュー・海でワイワイ♪と思ったら、相互理解とは何ぞと涙を交えた激論になる。

・渡航・招致を控えた時期一月程度は夜通し話し合い、ルワンダ側とも時差の壁を越えて夜通し or 昼通し話し合い。チャットはまだしも国際電話は経済的ダメージ大。

・イベントサークルでもないのに、全力でルワンダの有名ミュージシャンのコンサートを企画しトラブル続出、悔しい。

・ルワンダ行く金無いぞ、とひたすらバイト。（パチンコ店のバイトで平均月収 16 万円の 4 カ月）

・ルワンダ人よぶ金無いぞ、と助成金集めに奔走。書類の山に追われる、コンテストでプレゼン

したり、CM 作ったり。はたまた文化祭でメンバー交代なしで、2 日間ワッフルを売り続けたり（僕は 6 時間/日、アミューズメント担当スーツキリン（？）になって店の前でギターを弾き続け、総額 5000 円ほどの呼び水もいただく、イェイ。）。

・いざルワンダに渡航すれば、今度は聞き慣れないルワンダ英語と四苦八苦し、英語コンプレックスによろめき、リベンジを誓う。（TOEIC 約 400 点上昇）

・映像編集などしたこと無いけど、やはり映像（そして Youtube）の力は偉大と 30 時間余りのビデオ映像を 30 分にすべく1週間ほぼ徹夜。

まだまだありますが、こういう活動に何時も巻き込まれながら、意気揚々と立ち向かっていく。そして、更に新しい試練を自ら考えだす。でも楽しそうにしている。そんなドＭにもみえる（失礼！）ポジティブさを持った団体です。

僕が代表になってからも、ずっと不思議だったのですが、今回の第 5 回でそのわけが少しわかった気がします。大阪大学・名古屋のピースあいち・渋谷のダンスイベントで、また普段の会話の節々で、94 年の虐殺体験について僕たちには想像もつかない経験を話した後、今度は底知れぬ笑顔を見せるルワンダの彼ら。ダンスイベントでは、彼らの平和への祈りを体現した素晴らしいダンスもその場に居合わせた人々全てに感動を与えました。昨夏こちらが渡航した時も、かつての虐殺現場を訪れた際に、泣き崩れたメンバーをルワンダのメンバーが支えるという、奇妙な光景さえあったといいます。

僕自身、彼らと会うのはこれで3回目なのですが、心のどこかで持っていた「世紀の大虐殺を経験した国の、“かわいそうな”人たち」というイメージは既に完全に壊されてしまいました。「こんなにも人は前を向いて生きていけるのか」、ありきたりですが彼らはそんな今までにない感情を教えてくれたのです。お互いの国について、または世界について議論して学ぶ傍らで、何も語らずとも彼らはその生きざまを僕たちに示します。先ほど「わけが少しわかった気がする」と書いたのは、つまり彼らの人生への前向きさ・ひたむきさに僕たちが感化されているからであったのだと感じたからです。

アフリカンタイムにまで感化されるのはいかがなものかと思いますが（他ならぬ僕自身最も反省しています。この原稿も締め切に間に合わずごめんなさい皆さん。）とにかく、そんな彼らと 4 年目に突入する（前身プロジェクト含め 6 年目）わけですが、今回の学生会議、また新らしい大きな一歩を踏み出せたものと確信しています。僕自身もコーディネーターとして至らない点が多々あり、問題点も山積みであったのですが、その多くが今までモヤモヤしていたものを解くカギになるようなものでした。

それが最も具現化したのが、“Future of JRYC（この団体の未来）”というテーマで、再三にわたって行った議論の場でした。「二国間に経済的・文化的な差が厳然としてあり、それゆえこの団体に求める意義は2国間で全く違う（のではないか）。その上でどのように継続的に活動していくのか」日本側は「相互理解」という一見曖昧な理念の下、草の根から目指し、やがて社会に出て責任を持ったときに必要とされる視点と教養を身につけること、広義の平和貢献を行う素養も養う

こと、が究極的な目的であると思っています。またありがたいことにそういった活動はこの国では支援されるものであり、現実私たちも貴重な助成金を頂いて活動しています。

しかし、ルワンダではまた状況や価値観が違うようです。「日本側の理念は素晴らしいが、経済先進国の余裕があって成り立つもので、彼らはそんな悠長なことは言っていられない。目に見える形で社会に今すぐ貢献出来るような活動を何より重視すべきだ」何度この内容のことを言われたかもう分かりません。しかし日本側には、JRYC は狭義の“ボランティア”で無いのが強みだ、つまり支援者・非支援者という概念を意識的に捨て去り、まっさらな関係を目指すことがユニークだ、という意見もまた強く、またまとまらないわけです。

この問いは、今までの学生会議の全ての活動に付き纏い、常に議論の的となってきました。ただルワンダ人学生と交流する時は、個人的に話すことはあっても、団体全員で議論を交わすということは殆どしてきませんでした。遅すぎてもいけませんが、お互いに信頼関係が築けていない状態で行っても、物別れに終わってしまう。そんな危惧があったからです。

”This is the time, Maurice.(その時は今だ、モーリス)”。しかし、彼らが日本にやってくる前に、ルワンダ側代表のモーリスと延々とチャットと電話で意見を交わしていて、遂に上の結論にたどり着きました。もうお互いどこか釈然とせずに、過ごすのは終わりだ、私たちと JRYC の信頼関係を信じてやってみようじゃないか、と。

山ほど詰め込まれた企画の合間を縫って、全体で、時にはたくさんの OB・OG を交え、何度もこの議論は行われました。はじめは、どこかで日本－ルワンダの関係が揺らいでしまうのではないかと考えたのだが、それは全くの杞憂に終わります。こういっては何だが、疲れも忘れて皆が生き生きとしていたようにさえ感じました。今までずっと議論してこなかったことが遂に出来る、ことOB・OG 達にその傾向が強いようにも思えた。この議論は最後の最後まで、関西空港の椅子の上でまで行われました。英語の協定文まで持ち出して議論することになろうとは。

お互いなんという執着だろうか！

実はこの場で日本・ルワンダメンバー共に泣き崩れる場面もあり、議論に収集は着いたもののいわゆるハッピーエンドとならなかった、見方によってはバッドエンドであったったことは、代表としてのマネジメント力の不足を痛感しており、申し訳なく思います。しかし、得られたものは大きいです。もう、お互いに本音で議論することを恐れる必要はなく、そして団体の継続に向けていま僕たちがやるべきことが明らかになりました。例えば、お互いのミーティングの状況を専用サイトで共有し、日本・ルワンダ両国での企画を、お互いの要望を話し合いながら決めていくシステムであった。考えれば出てきそうなことではありますが、全員の気づきのもと、それを実行出来ていることが何より重要だと思います。

長々と書いてしまいましたが、全部書こうなどと思うと〆切があと一週間延びても書ききれなさそうです。が、最後に一言。この団体のヒューマンパワーと強運には驚かされっぱなしで、素晴らしい将来が待っている気がしてなりません。もしこれからのメンバー達が、こう言えるような未来を作っていってくれるのなら、この上ない幸いです。「バッド・エンディング万歳！」

～ルワン団と日本陣～

大阪大学外国語学部　嘉積　楓花

「アフリカってどんなだろう。」その好奇心から私はアフリカ大陸に存在する国、文化、歴史・・・それらに興味をもった。そして、「アフリカ」を知りたい、「アフリカ」に関わりたい！と飛び込んでみた日本ルワンダ学生会議。関西支部では第五回本会議の準備は夏ごろからは始まった。そのときはあまりこの企画が本当にとり行われるという実感を得ることなく、関西支部代表のなっちゃんに仕事を振り分けられるがまま、私は被爆者の方との対談企画と広島企画中の食事を担当することとなった。仕事を始めてみてびっくり。その対談企画、前年度には恐れ多くも JRYC 代表の方が務められていたものだった。こんなヒヨッコにこれほどの企画…勤まるとは思えない…。

企画が終わったとき振りかえると、案の定、仕事を全うできたと言えるような自分ではなかった。悔しくて辛かった。何より他の皆さんに申し訳なかった。一方、熱心に被爆者の方のお話に耳を傾け、対話ができたルワンダ人たちは個々に得るものがたくさんあったのではないかと思う。また私が英語の壁を意識しすぎて、最後まで話についていけず、また食らいついていこうとするバイタリティも発揮できないで落ち込んでいると、そばに来て、抱きしめながら優しく励ましてくれたアーリス。他のルワンダ人もみんなおんなじように優しく寄り添って言葉をかけてくれた。あたたかい彼らの心遣いに心底感動し、自分は何をしているのだろうとまた申し訳なくなった。

ルワンダ人は、それほどベラベラとしゃべったり、ついていけないノリの人たちだったりではないと聞いていた。実際会ってみてもそのイメージはさほど変わらず、物静かで日本人と同じくらいシャイな人たちなのではとさえ思った。しかし、ひとたび彼ら彼女らのダンスを踊りだせば力強い鼓動を感じさせる。彼らにとってやはりダンスは言葉と同じように自己を表現するひとつのツールとして身についているのだろうと思った。そしてまた、既述したように抱きしめてくれることも多い。文化的にダンスが根付いている社会だからなのか、身体表現がダイレクトで本当にあたたかく、ふっと緊張をほぐしてくれた。

ルワンダ人の事を書いたので、東京メンバーについても少しばかり。広島企画に参加した東京メンバーの中には初めてお目にかかる上回生の方もいらっしゃった。東京メンバーの女性陣は本当に小柄な方が多いけれど、男性人含めそのアビリティとパワフルさ、そして意識の高さに圧倒させられっぱなしだった。ディスカッションも回転が速く、私にとっては日本語ですら理解するのがやっとの状態。のんびりとここまできた私にはカルチャーショックだった。まさか国内でこれほどのショックを受けるとは。しかしみんな優しくて気さくだった。もねさんと語った銭湯も、みんなで行ってみたかった！

自分自身の反省は多いに残る第 5 回本会議だったが、人と出会い、様々な刺激を受けた初めての本会議だった。JRYC の Future にまちうける問題は決して少なくないかもしれない。しかし、日本人とルワンダ人に共通する真面目さで開けてくる道は必ずあるはずだ。互いの協力で、この貴重なリレーションシップを失わないよう、模索と思考の日々は続く…。

～相互理解の先に見えてきたもの～

早稲田大学人間科学部　岩垣　穂大

早いもので、日本ルワンダ学生会議本会議、日本開催も二回目を迎えた。はじめは、頭の中の小さな”希望“から始まったこの企画だが、今回も大きな混乱もなく、全日程を終えることができたことを大変嬉しく思うと同時に、この企画の成功のためにご尽力いただいた財団、企業、訪問先のみなさまに改めてお礼を申し上げたい。

2009 年、一回目の日本開催を経験し、今年は企画の立案・運営、他団体への渉外などさまざまな面で余裕をもってよりスムーズに、効果的に企画を進めることができた反面、非常に多くの課題、言い換えれば相互理解の難しさを認識させられた。それは各企画での反省でも表れた。

今回は日本の経済、工業を中心に企画に取り入れた。具体的には、名古屋でのトヨタ自動車、東京でのソニー訪問である。どちらも日本を代表するメーカーであり、これらの企業なくして日本の経済成長はあり得なかった。これらの会社訪問を訪問し、工場見学や現場で働いておられる方への質疑を通して経営のノウハウや会社運営について学ぶことを目的としていた。しかし、実際にはその様な技術を習得するというところまでは届かず、企画後の反省会では、ただの社会科見学になってしまったという意見さえ出た。原因として考えられるのは、日本・ルワンダお互いのメンバーが事前に有意義な質問をするほどの知識を持ち合わせていなかったこと、またあまりにも限定的な内容で全員の興味や好奇心をそそらなかったということが考えられる。このような企画を「訪問」だけに終わらせないために、企業の経営者や技術者の方と持続的なつながりを作るなどの方法が有効なのかも知れない。

さらに今年の学生会議で多くのことを考えさせられたのは、団体の将来についての話し合いである。学生会議をメインにし、週一回のミーティングやメンバー全員による情報共有、さらにインダンガムチョ以外からの学生会議活動参加を認めてほしいという日本側の要求に対し、ルワンダ側はあくまでも JRYC ルワンダの活動はインダンガムチョを除いては成り立たず、ダンスイベントなどの文化活動中心としたいという意見であり、ミーティングに関しても中心メンバーだけで行い、他のメンバーとの情報共有は必要が応じたときだけ行うという主張であった。そもそも、学生会議としての活動をスタートさせてから、活動の根本理念に関してお互いの十分な理解がないままであったし、お互いの国で、この団体が置かれている状況も違っていたので、すれ違いが起きたのは必然的なことであったのだと思う。「お互いの国で、この団体が置かれている状況も違っていた」というのは、たとえば日本であれば、学生会議というディスカッションを通して自ら問いを立て、解決先を議論していくといった活動が一般的に認知され、支持されているので、この活動をもっと深めていきたいと思うが、ルワンダでは学生会議活動はまだ珍しく、認知度も日本に比べれば極端に低い。大学や大使館の人でさえ、興味を示さず、そのような活動をするよりも、インダンガムチョの理念である文化（ルワンダで言う文化

の定義は日本語の文化が持つ意味よりかなり広い意味を持ち、あらゆるものを文化と呼ぶことができる）の力、とくにルワンダ伝統ダンスを使って、ジェノサイドの記憶で苦しんでいる人々を苦しみから解放し、貧しい人には生きる希望を与え、そして見ている人すべてに幸せをもたらす活動をしたほうがよほどためになるのである。

どちらの価値観が正しい、間違っているということではない。これが多様性なのだ。そしてこれを解り合うのが相互理解なのだ。お互いの主張を融合し、お互いが胸を張ってできる活動になるように、今後も継続して団体の未来を考える話し合いは続けていきたい。

最後に見つかった課題は、過密スケジュールによる参加メンバー疲労と、モチベーションのばらつきである。今回の個々の企画は、どれも意識が高いものが多く、すごく練られているものばかりであったが、日本滞在の期間が短かったため、すべてを完結するためにスケジュールを詰め込んでしまい、メンバーは常に疲れ顔であった。これが、自分たちだけの失敗であるならばまだいいものの、集合時間に遅刻する、訪問先の講師のお話し中に居眠りをするなど、企画に協力してくださった方々へも迷惑をかけた。さらに、企画に対するモチベーションのばらつきや、情報共有の不備によるメンバー間の衝突などがたびたび起こったように思う。完璧な企画など存在するはずもなく、予期せぬことが起きるのはごく自然なことであるが、その時にいかに全体を見渡し、他者と共感することができるかが重要になってくる。伝えてくる相手が何を求めているのか、自分は何をしなければならないのか、その相手に対してありがとうの一言など配慮はできているか。全員で同じ意識を共感することができれば、困っている人も一人で悩みを抱え込まなくてすむ。一人がみんなに対して、みんなが一人に対してこの「共感」ができるかどうかで団体としての信頼性や、キャパはずいぶん変わってくると思う。

日本ルワンダ学生会議がよりよい団体になるようさらに高く跳べるよう、これからもがんばりたい。

～Exchange～

早稲田大学文化構想学部
海原　早紀

初めての招致である第三回に向けて奔走していたのがついこの間のように思えるのに、5 人のルワンダメンバーはちゃんと今年もやってきた。2008 年末に日本招致を志した時には本当に実現するかもわからなかったのに、こうして 2 年続けて 5 人のルワンダメンバーが日本に来てくれる事を本当に嬉しく思った。

新たな試みとして、ルワンダの学生がジェノサイドの経験を公の場で語ってくれる機会を何回か設けたがピースコンサートのアドルフのスピーチについて書きたい。ピースコンサートでは観客 200 人を前にステージで堂々とスピーチをしてもらう事を頼んでいた。しかしスピーカーのアドルフに「20 分の時間で経験を語ることはできない」と言われ、やはり表面的なスピーチにまとめることは間違いなのか不安に思う点もあった。

当日、アドルフはステージに立って静かにもしっかりとスピーチを読み上げ、私は舞台脇でそれを会場に向けて翻訳した。私がそこに立っていて良かったと思ったのは、会場の人の表情とホール全体の空気を見られた点だ。端的に会場の雰囲気を説明すると、会場のこの上なく「暗かった」。皆悲しそうな、難しそうな表情をして聞いていた。しかし、暗い中でも皆が本当にアドルフの話に集中しているのがよくわかった。緊迫した

ホールの中でアドルフの声が響くのが忘れられない。

終了後に感想を聞くと、「あんな体験談を聞くのは初めてで衝撃的だった」という感想と同時に「あんなことを喋っていた少年が二幕では晴れた表情でダンスを披露していて驚いた！」という声があった。彼らのバックグラウンドを知る私たちには当たり前になっていたが、たしかに観客にとってはあの日のアドルフの対照な面を見たのだろう。イベントという場では、実際に現地でジェノサイドの跡地を見るほど悲惨な記憶は伝えられないかも知れないが、ジェノサイドの過去を抱えながらも今を生きる 5 人のルワンダ人の姿を伝えられたのではないだろうか。

INDANGAMUCO のようなルワンダの学生を日本に連れてきて伝えるべきルワンダは、「ジェノサイド」だけではなく「未来に向かって前進するルワンダ」だ。そして彼らのダンス。私は「ダンスをしていると辛い生活を忘れられる」というモーリスの言葉や、ダンスを踊ると性格が変わったようにはしゃぐクラリスを思い出して、ダンスが彼らひとりひとりにとってどんな意味を持つのか、振り返る機会となった。

また、新年が明けてからだっただろうか、アドルフが「ジェノサイドやそれを乗り越えた経験を語る事が日本人に勇気や希望を与えるかもね」と言っていた。公の場で辛い過去について語ることが、彼にとって苦痛ではなくしっかり意味を持った事として捉えられていた。

学生会議、文化交流、cultural exchange 、cooperation、conference 私たちの活動を表す言葉はたくさんある。アドルフのようにジェノサイドについて日本人に伝えることも exchange であり、不明確ではあるがお互い得るものはあるはずだ。私たちは今回の会議を通して、改めて日本ルワンダ学生会議の活動の目的や活動内容を鮮明にしようと散々議論した。前からルワンダメンバーに批判されていたように形のある結果を残さない exchange とは何なのか、たくさんの資金を使って地球の反対側まで来させて、疲れ果てるまで旅をして議論して、何が実ったのか。改めて皆でこの疑問を認識し、悩んだ日々だった。

そもそもこの団体は学生ならではの取り組みをしようと、「学生という立場を使って、対等な場で、本気で議論する学生会議」を志したのだ。その目的は達成されている今は、次のステップを考える時なのだろうか。最初から学生だけで始めたことなのだから、学生である私たちが自ら決断しなければいけないのだろう。

「相互理解」とは、ルワンダと日本の関係作りへの挑戦である。困難である事を前提に挑戦しているのであって、今回のように前進が難しくな

るのも当たり前なのかもしれない。私たちの模索と挑戦は続く。

しかし、述べたように学生の立場を活かした本気で語れる場は確かに確立されていると感じる。最後の関西国際空港での話し合いがまさにそれだ。向こうの運営体制に対してこちらが不満に思う点を初めて指摘した。私に関して言えば、モーリスの発言に本気で怒ったりした。こんなに両者が団体のことを思って熱くなるのは、設立当初の段階では考えられなかった。

両国の「関係構築—exchange」から何かを生み出す「協力」へ発展する可能性があるのなら、今まさにその発展の過渡期に達することができたのかもしれない。

～A good medicine tastes bitter～

早稲田大学大学院政治研究科
池上　純平

今回の本会議を振り返ってみると、それが意味のあることかどうかは別にして、「楽しい」とは言えない時間が少なからずあったのも事実であった。それは、団体の将来について互いに意見をぶつけ合う機会が多かったからである。

幸運にも私は昨夏のルワンダ渡航に参加させてもらうことができ、JRYC の一員として学生会議に臨んだ。限られた時間の中で思い切りルワンダを感じ、すべての瞬間が充実していた。だが、今回の本会議の期間中には日本側・ルワンダ側の両方がそれぞれの主張をし、激しい議論になることもあった。ルワンダン達には明らかに疲労の色も、苛立ちも見えた。前回の本会議では見られなかった光景である。

最終日になっても議論は続く中で、モーリスが語気を強めて私に言った。「俺も本当は泣きたい。でも、泣くわけにいかないんだ！」私個人は、そんな勢いでモーリスに言葉を投げかけられたことはなかったので、彼に本当に余裕がなくなっているのだと感じ取ったのと同時に、少し安堵した。

以前から感じていたことだが、私は日本人とルワンダ人の間の「遠慮」というものの存在に一種の気持ち悪さを感じていた。確かに、互いの文化を理解し尊重することは非常に大事であるし、決して失ってはいけない。しかしながら、所詮私たちは人間と人間である。もし本当に対等な関係を目指すのであれば、もし本当に友人なのであれば、ぶつかっていいのだと思う。一緒ににこにこしているだけなら誰でもできる。初めは少しずつでも、ぶつかることを恐れずに話し合い、お互いを知ることで信頼関係は構築されていくのだろう。

もしその瞬間だけを切り取ったら、苦い思い出なのかもしれない。涙もあった。しかしながら、団体にとっては壁を越えて先に進む試みであるし、確実に前進しているのではないだろうか。

そしてもう1つ今回の会議で改めて感じたこと。それは、この団体の活動が本当に多くの人に支えられているということ。協力して下さったすべての人たちの1つ1つの善意があってこそ、今回の会議を無事に終えることが出来たのだということ。

その感謝の気持ちを忘れずに、大事にしていきたいと思う。

～世の中は広い～

大阪大学外国語学部　藤沢　裕理子

学生主体でやる団体であるこの日本ルワンダ学生会議に参加して一番思ったのは、世の中は広いということです。もちろんルワンダ人学生も参加していたので、ここでの世の中というのは世界という意味でもあります。しかし、わたしは日本にいる大学生だけでもこんなに様々な人がいるのかと一番驚いたのです。東京の学生は議論に慣れていてとても活発でした。議論が白熱しすぎて私はついていけないことがしょっちゅうでした。あまりにも私の日常とは違いすぎる雰囲気に圧倒された第五回会議でした。

～“Cheka”笑って！」～

大阪大学外国語学部　今泉　奏

関空にて不安なのか希望なのか、ごっちゃ混ぜの気持ちで彼らを待った。入国で手間取っているらしく、なかなか出てこない。このときの1分は何時間にも感じたものだ。そして、その瞬間はやってきた。やや疲れた表情であるが、颯爽とロビーに歩いてくる。初めはぎこちない挨拶しかできなかった。アドルフの名前を何回も訪ねてしまった。だって何回聞いても「アドhl；dsfフ」ってしか聞き取れなかったんだもん。最初はとにかく緊張していた。アフリカが好きで好きでたまらなくて、彼らの存在が憧れそのものだった。そんな彼らが目の前にいるのだ。言葉が…でない…。そんなとき救ってくれたのが、自分の学ぶスワヒリ語だった。といっても、自分はスワヒリ語がぺらぺらな訳じゃないし、得意でないルワンダ人学生もいる。それでも、スワヒリ語がきっかけとなりようやく会話を始めることができた。

学生会議全編を通してだが、常々自分の英語力のなさに呆然とすることもあった。彼らと話したいのに、伝えられない。このもどかしさが常につきまとった。また、初めて会う関東本部のメンバーとの交流もあり、彼らと比べて自分は…と自信にいらだちを感じることもあった。そんなときモーリスやアドルフが言ってくれたのが”Cheka”（スワヒリ語で「笑う」の意味）だった。写真を撮ろうとカメラを向けると”Cheka Cheka!!”。僕にカメラを向けては”Cheka!!”。さっきまでジェノサイドの話をしていたのに、「どうしてそんなにわらえるの」。初めはとまどったが、とりあえず笑った。歌って踊った。それまでより彼らにずっと近づけた気がした。「笑うことに理由なんていらない。笑わなきゃ損でしょ」と言わんばかりに彼らは満面の笑みだった。

確かに笑って過ごして、それが一番良いときもある。しかし、時には真剣に向き合い、考え、笑って終わらせないことも必要だと思う。アフリカのことを学んでいる上で常々「対等」とは何か、と考えさせられる。これは恩師の言葉の受け売りで

あるが「私たちは常に彼ら（アフリカの人々）を上から見ているということを忘れちゃいけませんよ。」という言葉が常に頭の中にある。それでは、僕はルワンダメンバーを上から見ているのだろうか。自分では精一杯見ていないつもりである。他の日本人メンバーも上から見ているようには思えない。でも、なにかしら上から見ている瞬間があるのだ。それはお金の話はもちろん、何気ない会話でも、学生会議でも、どの場面でも起こりうる。『僕らは対等じゃない。』この学生会議で痛いほど分かった。では、どうすればいいのか。ルワンダンメンバーを僕らと同じ目線まで上げるのか、それとも僕たちが目線を下げるのか。そもそも、このようなことを頭で考えている時点で対等な関係ではないだろう。それでも、より対等な関係を築くことは可能かもしれない。そのためには、できる限り対話を積み重ね、互いに学び、互いに知り、そして互いに理解して、「相互理解」に達しなければならない。

～We meet to depart, and depart to meet～

早稲田大学国際教養学部
Gan Kristina

「相互理解」は日本ルワンダ学生会議（以下JRYC）の前身であるルワンダ・プロジェクトからの団体理念の一つである。その理念は、JRYCがどのように生まれ変わっても受け継ぐべきもののひとつであると思っており、今のところ譲る気もないようだ。2 年前にメンバーとなってから「相互理解」について数え切れないほど議論した。一人ひとりの解釈は違うとはいえ、それだけメンバーにとって相互理解が大事である。今年の招致は相互理解について身を持っていろいろと考えさせられた。なぜならルワンダメンバーと面と向かって議論できるのは、ルワンダに行かなければ招致のときだけだからだ。

JRYC の体制、理念や運営について、そして「これからの JRYC」が大きな議論となった。ボランティア活動はしないことを理念としていた今までのJRYCにとって、活動を実際社会に反映させる活動、”Take Action”がしたいというルワンダ側の提案にどうしたらよいのだろうと正直混乱していたと思う。しかし、JRYC は日本側主体の団体ではなく、本当に日本とルワンダ2ヶ国の団体になるよう前進しようとしているのだと思った。JRYC ではガチな議論が好きなメンバーが多いため、どのようなことが起きても対話できる姿勢が整っているのだろう。その姿勢だけはこれからも大事にして欲しい。

一方で、活動やディスカッションはとても充実していたが、その分ルワンダ人とも日本メンバーとも JRYC と関係ない話をする時間があまりなかったことだ。日本に来た 5 人のうち、昨年の招致に会ったモーリスを除いて、大半とは一年半ぶりの再会。関西支部のメンバーとも代表以外ははじめましてだった。移動でルワンダ人と一緒に歩き、恋バナや将来の夢を話したわずかな時間や、関西メンバーとお好み焼きを食べたときが本当に楽しくて懐かしい。だが、私たちには言葉はあまりいらないのかもしれない。

団体が前進しようとしているときにもう卒業しなければならず、名残惜しいと同時にこらからのJRYCをOGとして見守り、力になりたいと思う。ここで過ごした2年間は、無駄な議論も含め、本当に刺激的で、癒しでもあり、楽しかった。JRYCでは多くのことを学び、すばらしい方々と出会うことができた。ルワンダと日本招致の活動で経験したものは貴重だが、何よりもここで大切にしたい仲間と出会えたことが私の一生の宝物だと思う。卒業したら個人と個人の付き合いになる。白髪になってルワンダについてや、くだらない話をしているJRYCファミリーも楽しみだ。

今回忘れられない言葉は、

モーリスの白熱議論の後が言った暖かい、"We are family. We can talk anything"、にはありがとうしか返せなかった。そして、一番上にあるタイトル"We meet to depart, and depart to meet"（私たちはお別れするために会い、出会うためにお別れする）。これはお別れが近づいたときに、引用文が好きなアルフレッドに言われたこと。

～Entrance to another world～

関西学院大学法学部　山崎　暢子

「別世界への入り口―。」

それは、学生会議の合間のくつろいだひと時のことだった。メンバーの着ていたジャケットのポケットに手をつっこみ、ルワンダン共々ふざけて遊んでいたときに出たフレーズが"entrance to another world"。第五回学生会議を終え時が過ぎるにつれ、このときの一言が何か含蓄あるものに思えてくる。

「なんでアフリカなの？」と問いかけられても人を納得させられるような明確な答えも持ち合わせていないとなると、なにか間違っているのだろうかと不安になることがしばしばあった。しかし逆に尋ねたい。素朴な疑問から出発する、つきつめたいと思う気持、純粋な好奇心に、言葉でどれほど説明を加えてもかなわないのではないかと。

世界には様々な出来事があり、知らないことの多さにめまいすら覚える。ルワンダとの偶然の出会いが、世界を知らなすぎたと思い知った私にとってのきっかけであり（だがそれは偶然というにはあまりに大きな意味を持ち始めている）、「いつか行ってみたい」から「よし、行ってみよう」という気になっていたとき、すでに学生会議のような交流があることを聞いてこれもまた衝撃だった。関西支部ができたということで参加させてもらったが、それもこれも、これまで活動を支えてこられた方々の尽力あってのこと。開かれた「窓口」にかけこんで、運よく通してもらえたのだと思っている。

そして迎えた第五回学生会議。凄惨な出来事をくぐりぬけて生き延びた、歳もそう違わない彼らと対面するのだと考えると、身構えずにはいられなかった。しかしその必要はなかったとすぐにわかる。というのも、よく話し、笑い、歌い、踊る…もちろん、バイタリティの裏打ちとなる経験をそれだけ積んできたのだし、だからこそその輝きは一層鮮やかに映るのかもしれない。目に見えないもの、言葉のうらにあるものばかりつかみとろうとするのではなく、目の前に繰り広げられている世界をありのままに受け入れるのもいいのだと思えた。

深い傷を負うも奇跡といわれるほどの立ち直りをみせ、新しい道を確実に歩み始めているルワンダ。この国で人々はいま何を考え、何を目指すのか。そして世界は、どう動いていくのか。また、どこの国と限らず、それぞれの人がそれぞれの道を進んでいく中で、他者と混ざり合い、ときに干渉し、心に波紋を広げる。人と人との関わりという未解決でひょっとするととてつもなく難しい問いの答えを探しに、ドアをノックしてみたいと思った。

～日本でジェノサイドを考える～

国際基督教大学教養学部　岩井　天音

今回は日本での活動にも関わらず、個人的にはジェノサイドについて考えさせられることが多かった。私は昨年夏にルワンダに渡航し、第４回本会議の報告書にも書いたが、ムランビ虐殺メモリアルを訪問した際に彼の地で起こった悲劇を五感で「感じた」。しかし今回は、「考えた」という表現が合うかもしれない。

「君たちは 1994 年のジェノサイドみたいな悲劇がまた起こらなければ、ルワンダへの興味を無くしてしまうんだろう？」

第 5 回本会議では、日本ルワンダ学生会議という団体が目指す方向性についてルワンダメンバーと議論する場が何回かあった。その話し合いの中で日本人メンバーが、「団体理念である”相互理解”はジェノサイドの教訓が由来になっている」や「最初にルワンダに興味を持ったのは、ジェノサイドがあったからだ」などと言ったところ（私もこのように考えている）、アルフレッドからふと、上記のような発言があった。もちろん、私にしてみれば「相互理解」はジェノサイドの教訓から出発はしているものの大切な団体理念として自分の中で成長しているし、ルワンダに対するイメージも最初はジェノサイドだけであったが夏のルワンダ渡航を得て確実に繊細で多様なものに変わっていた。それだけにアルフレッドの発言には大きな衝撃を覚えた。彼がこの言葉を発した時の真剣な表情も忘れられない。

そして、第 5 回本会議を通して私が一番心に残った体験。それは、ピースあいちでの交流会の際にアルフレッドが語った自身のジェノサイドの経験を、私がマイクを通じて　日本語に訳したことである。今回、大阪大学でのレセプション、ピースコンサートを含めると３回ジェノサイドについて取り上げる機会があったのだが、主に語ってくれたアルフレッドとアドルフの話は分かりやすくまとめられており、彼らがルワンダでしっかりと準備をしてきたのだなということが分かった。さて私はそんな彼らの話を訳したのだが、それは団

体の活動としても個人の経験としても大変有意義なことであったと思う。友人の「伝えたいこと」を私が日本語というツールを使って「訳す」。大げさな表現でただの自己満足かもしれないが、大きな使命を達したかのように感じさせられたのもまた事実である。後日、このピースあいちへの訪問が取り上げられた新聞記事を見て、更にその想いは強くなった。私たちは無力かもしれないが、無意味ではない。

アルフレッドの発言には、深く考えさせられた。私個人はこの団体で活動しているくらいだから一生ルワンダへの興味は薄れないだろう。しかし、市民レベルで考えた時に、果たしてアルフレッドの考えは正しいのかもしれない。日本そして世界はルワンダを忘れ、また同じ過ちを繰り返す。言うまでもなく、ルワンダ人にジェノサイドの経験を語らせることは決して団体の主な活動内容ではない。しかし、このような機会を設けられるのは、日本ルワンダ学生会議が今まで築き上げてきた信頼関係があるからこそとも言える。何かしらの形でジェノサイドという歴史を伝える義務が私たちにあるのでは、とも考えた。

ただ長期的な視点で考えたときに疑問も残る。今私たちが交流する大学生はジェノサイドを経験した世代である。10 年後、それは少数派になっているかもしれない。その時、私たちのルワンダへのモチベーションは何になるのか。団体理念の「相互理解」は違う意味を持つのか。勿論変わることは悪いことではない…などと遠い未来に想いを馳せてもみるが、まずはルワンダメンバーと期間中に議論した団体の活動についてしっかりと考え、今後の活動に繋げていきたい。

～ここから～

早稲田大学法学部　古屋　亮輔

新しい世界を見てみたい。これが初めて日本ルワンダ学生会議、当時のルワンダ・プロジェクトに参加した動機だった。あれから 3 年間、活動の中心にいた私が言うのもなんだが、JRYC はすさまじい勢いで成長してきたと思う。日本国内の人脈は大きく広がり、ルワンダでの活動の幅もメンバーの興味のまま広がり続けた。まさに新しい世界を切り開いてきた。

しかし今回は私が過去に参加した本会議の中で初めて、第 5 回目の開催にして日本ルワンダ学生会議の停滞を感じた。ディスカッション、対談、企業訪問、コンサート、…。どの企画を振り返っても失敗に終わったとは言わないが、前回から何か進歩があったと評価するのは難しかった。傍から見ればルワンダの学生を日本に呼ぶなんてすごい、と評価されるのだろうが、もはやこの団体はそれで満足してはいけないと思う。今回は「企画を実現するための活動」に小さくまとまってしまっていたような気がする。

これは日本人・ルワンダ人とも皆がわかっていることであり、だから Future of JRYC について議論を重ねた。そして結局問題の根底にあるのは不安をもたらす原因は「コミュニケーション不足」だとわかる。ルワンダ人メンバーが「日本人メンバーはルワンダから何を学べるのか、この活動

を続けるモチベーションは何なんだ」と言っていたのが印象的だった。「相互理解」という目標を掲げていながら、相手のモチベーションさえ完全には理解できていなかった。相手を理解できていないことが相互の信頼を失うことにもつながるということを、今回のメンバーは痛感したはずだ。しかし原因を話し合って現状を確かめたことは大きな前進である。これから両国のメンバーが真の一枚岩、対等な関係となり、この団体が飛躍的に進化する可能性もあると思う。

全ての物事は諸行無常、進化する時期もあれば停滞する時期もある。それは入れ替えの激しい学生の活動ならなおさらである。その中でメンバー達が日本とルワンダの学生交流を継続したいのなら、団体としてこのような経験を乗り越えていかなければいけないのは当然である。難しいことではあるが、黎明期を終えた団体がこれからどんな進化を見せてくれるのか、楽しみなくらいだ。

日本ルワンダ学生会議での私の役目はもう終わる。3 年間の活動で何も後悔がないかといえばそうでもない。しかしやれることは全力でやってきたつもりであるし、何より楽しくて充実していた。第 5 回本会議を経験したメンバー、及びこれから新しく参加するメンバーが、日本ルワンダ学生会議の活動を「楽しむ」ことができるようにと願っている。そして私自身も、この団体に初めて参加した時と同じ気持ちで、次の新しい世界に挑戦したいと思う。

～再々会～

横浜市立大学国際総合科学部
宮本　寛紀

私がルワンダ人メンバーに初めて会ったのは、2009 年の年末のことであった。第 3 回本会議の最中、翌日に東京でのダンスイベントを控えており、その前日にリハーサルで初めて言葉を交わし、彼らの歌とダンスに圧倒されたのだった。その時の感動は、今でも鮮明に覚えている。それ以来、ルワンダに行きたいという願望は次第に強まり、念願叶って 2010 年夏にはルワンダを訪れ、第 4 回本会議に参加した。そこで、東京で会ったルワンダ人メンバーとの再会も果たし、様々な経験を経て、たくさんの思い出を作ることも出来た。

そして、今回の第 5 回本会議を迎えたわけである。ここまでくると“初めて”といった感動は味わえなかったものの、“また再会できる”といった気持ちで胸がいっぱいであった。だからこそ、関西国際空港で降り立つ彼らを出迎え、真っ先に出た言葉は「久しぶり！」であったことは言うまでもない。

今回の本会議を振り返ると、印象に残ったことはたくさんあるが、ここでは特に印象深かかった 3 つのトピックを取り上げたいと思う。1 つ目は、会計という役職に就いていたが故に考えたこと。2 つ目は、ダンスイベントで一緒にダンスを踊れ

たこと。3 つ目は、団体の将来について話し合ったことである。

1. 会計を終えて

私は、2010 年度に入ってから団体内で会計という役職に就き、団体としての活動に伴うお金の管理をしてきた。具体的に言えば、報告書やドキュメンタリーDVD の作成費、イベントの運営費、第 4 回本会議の開催中にも宿泊費やタクシー代などといった収支の処理をしていた。しかしながら、今回の第 5 回本会議に関しては、それらの会計処理とは全く違った意味を持っていた。なぜなら、いくつかの財団から多額の助成金をいただき、ルワンダ人メンバーの滞在中にかかる彼らの出費すべてを管理しなければならなかったのである。それが大変な仕事であるとか、領収書をもらうことが面倒であるとかそういうことが言いたい訳ではなく、ルワンダ人メンバー全員分の出費を管理するということは、食費から何から全ての支払いをすることであり、それが主導権は全てこっち（日本人側）にあるような気がしてならなかったのである。

団体の理念でもある相互理解を達成するためにも不可欠である対等な立場の確立といった面から考えても、「水欲しい？」とか「何食べたい？」などと聞くこと自体が、とても上からな気がしてならなかった。実際に、来日したルワンダ人メンバーの中にも、お金をすべて出してもらって来ているから惨めだと言っていたメンバーもいたのである。それを聞いた時は、どこか罪悪感さい感じてしまった。

日本人がルワンダを訪れるだけではなく、ルワンダ人も日本に来ていると聞くと、すごいことをやっている団体だといった印象を受けるかもしれない。私自身も、この団体に入る前にそれら活動のアクティブさも含め惹かれたというのも事実である。しかしながら、お金はほとんど日本人が用意し（助成金ではあるが）、それでまかなっているといった状況は、主観的にも客観的にもどう見たって、とても対等な立場であるとは言えない。ただ、それを考え始めてしまうと“対等”とは何なのかといった議論から始めなければならなくなるし、賛否両論あることは確かで、この現状を今すぐに変えるなどといったことは容易ではないことは十分理解している。

よって、私自身の現在の結論としては、この現状をどうすれば打開することができるのか、金銭面はもちろんのこと、精神面でもどうすれば克服していけるのかなどといったことを、日本・ルワンダ両国のメンバーで共に考え、話し合っていくことが重要なのではないかと思う。もしかしたら、その解決策は長い年月をかけなければ生まれないかもしれない。しかし、共に考えて答えを導き出そうとする姿勢そのものが最も重要になってくると思う。

2. ダンスのコラボレーション

今回も、第 3 回本会議と同様に、東京の目玉企画としてダンスイベントを開催したわけだが、前日のリハーサルに入る前、ルワンダ人メンバーから日本人メンバーに対して提案が出された。それは、日本人メンバーも一緒に踊ろうといった提案であった。しかし、当日はほとんどの日本人メンバーが運営スタッフとして仕事がそれぞれに割り振られていたため、私と久保の 2 人だけ最後のコラボレーションに参加するといったかたちで一緒に踊ることとなった。

前日のリハーサルで簡単に身振り手振り教わり、そのまま本番を迎えたため、不安はあったものの、とにかく楽しもうといった気持ちで舞台に上がっていた。ちょうど１年前は客席から見ていたのに、１年後には自分が踊っている側にいると思うと不思議な気持ちになった。とても上手いとは言い難いダンスになってしまったが、彼らから借りた衣装を着て、一緒に踊っているというだけで、気持ちが１つになれた気がした。またしても“ダンス”や“音楽”の持つパワーに圧倒されたのであった。もちろん、学生会議などで議論するのも有意義だし、面白いのだが、また違ったコミュニケーションの方法としてダンスというものがあると気付かせてくれたとともに、ダンスを重要な伝統文化の１つとして彼らが大切に守り続けている理由が、今まで以上に理解できた。

３．　団体の将来について

最後に、今回の本会議開催中に最も考えさせられた団体の将来についてである。これから先、日本ルワンダ学生会議がよりよい団体に成長していくために、日本・ルワンダ両国の学生はどのようにしていけばいいのかといったことを話し合ったわけだが、もちろん単純な話し合いにはならなかった。日頃から、日本人メンバーとルワンダ人メンバーの間では、インターネットなどを通して十分なコミュニケーションはとれているとは思っていたのだが、そうでも無かったのである。日本人メンバー同士は、週に一度はミーティングで会っているものの、ルワンダ人メンバーとは、実際に顔を合わせて話が出来るのが、夏の渡航と冬の招致の１年に 2 回だけであるため、お互いに何を考えているのかをあまり把握しきれていないことに気付かされたのであった。

つまり、意見の食い違いが起きてしまったのである。あまり細かいことは記述しないが、やはりお互いにコミュニケーションを取るということは、とても重要だということが改めて証明されたかのようであった。それは、日本人メンバーとルワンダ人メンバーの間だけでなく、日本人メンバー同士でも言えることである。

ただ、前述した会計の箇所でも書いたが、共に話し合うこと自体が意味を持っていて、たとえ答えがすぐに出なくてもいいのだと思う。そのように試行錯誤していく中で、団体は成長し進化していくものであるとも思った。

以上、3 点のトピックに絞り感想を述べたが、第 5 回本会議全体を通して考えてみると、自分自身の成長を感じることができたと改めて思う。より多角的に物事を捉え、団体として個人として、それぞれ深く考えることもできたと思う。私情により、第 6 回と第 7 回の本会議には参加できないのだが、それ以降の本会議を企画し、参加することが今から楽しみである。

～イチゴイチエ～

大阪大学外国語学部　片山　夏紀

私がルワンダに興味をもったのは、高校生の時だった。1994 年の虐殺に関する新聞記事を読み、民族がいがみ合ってこの紛争が起こったのだという、浅はかな勘違いをしていた。大学入学後にルワンダ研究者の武内進一氏の論文を読み、この紛争は民族の争いなどではなく、植民地時代やルワンダ政府の統治・経済悪化・国際

社会の無関心など、様々な現象が複雑に絡み合って起こったのだと知ったのは、ずっと後のことだった。

それ以来ルワンダ関連の文献を読み漁り、自分の目でルワンダを見たいと現地へ渡航し、卒業論文のテーマとしてルワンダ紛争を取り上げ、おまけに大学院でも同じテーマで研究を続けるのだから、思い起こせばあの高校時代のとんだ勘違いが、今に繋がっているのかもしれない。

それゆえ、大阪の交流会にて、アドルフとアルフレッドが虐殺の体験談を語ってくれたことは、大きな大きな衝撃であった。それらは今まで読んできたどの文献や映画よりもリアルで、私の胸に突き刺さった。幸運にも命拾いした彼らは、想像を絶するような苦しみや悲しみや痛みを抱えながらも、「二度と虐殺を起こしてはならない」と繰り返した。それまで私は「平和」を漠然とそこに存在するものと捉えていたが、彼らにとっての「平和」とは、今まさに自分達の手で作り上げていくという熱意に溢れるものだった。彼らの虐殺の体験談は、凄惨をきわめた悲劇では終わらずに、伝統舞踊を含めた彼らの豊かな文化を通じて、それらをどうやって乗り越えてきたのかを教えてくれた。それは紛争の再発を予防するという覚悟と希望に満ちた、日本人の私たちも考えなければいけない「平和」の本質的な問題を説いていたように思う。このような生の体験談を、一人でも多くの日本人に伝える機会を設けること、そこに日本ルワンダ学生会議(以下 JRYC)の大きな活動意義があると考えている。彼らと過ごす中で、個人的に紛争の経緯を教えてもらったことも、大変貴重な経験であった。

「イチゴイチエ・・・」。アルフレッドが、たどたどしく発音しながらも、気に入って使っていた日本語だ。この言葉通り、JRYC メンバーや日本招聘に協力して頂いた方々との出会いも、一期一会の縁である。出会いの蕾を枯らすことなく、やがては花となり種がなるまで育て続けていくことで、団体の発展と基本理念である「相互理解」の深化という大きな収穫に繋がっていくと思う。

～大切なこと～

早稲田大学教育学部
志賀　まりも

ルワンダという国について事前に本を読み、勉強会などで学んではいたが、ルワンダ人と会うまで私の頭の中では、ルワンダは大虐殺が起こった国であり、アフリカの国であるという漠然としたイメージしかなかった。映画化された大虐殺のイメージやアフリカの抽象的な言葉にもなっている貧困や紛争。実際これらの固定観念を持ったまま参加した東京企画だった。第三者の意見のようになってしまうが、私は普段からこの団体の人の行動力や考え方、社会に対する高いアンテナを持っていることに感化されていた。これまで自分や自分の周囲のことにしか注意を払わないで過ごしてきた私の生活とは別世界のように感じられたからだ。ミーティングなどでもあまり自分の意見を言えずにいる私にとって、拙い英語で臨む今回の東京企画は、不安で一杯だった。しかしルワンダ人は笑顔で積極的に話しかけてくれ、またこちらの伝えようとする思いをくみ取り、

真剣に耳を傾けてくれたので、私の不安は解消された。

渋谷で行われたダンスイベントで私は初めてルワンダのダンスを見た。彼らの全身からパワーがみなぎるダンスに言葉では表現しきれないほど感動した。同じ大学生にして文化をあれほど愛し、大切にしている彼らを私は羨ましくも思った。どの国にもその国の文化や歴史があり、それに誇りを持って生きていることが伝わってきたからである。彼らは伝統ダンスを通して平和を訴えている。その、文化・国・歴史を重んじる姿勢に学ぶものが多かった。そして私自身が日本についてあまりにも知らないことが多いことに危機感さえ覚えた。

今アフリカの中でもめざましく経済成長を遂げているルワンダの未来は明るいと思った。なぜならルワンダ学生から、自分達が国の担い手であることを自覚している熱意が伝わってきたからだ。反対に、今物質的には豊かな日本にいる自分がいかに将来に対してまた現状に対してあまり考えずに生きているかが浮き彫りになった。
今まで抱いていた固定観念は学生会議や、ホームステイを通してすっかりなくなった。それは、彼らをルワンダ人としてみるのではなく友人として見ることが出来るようになったからであると思う。

私は今回の招致の間、なぜルワンダ人は笑顔が絶えないのか考えていた。日本は学生会議のプレゼンでもあったように、物質的には豊かだが、格差社会や無縁社会など多くの問題を抱えている。ルワンダではダンスや音楽でコミュニケーションを取ることができ、それはルワンダ社会だけでなく学生同士だけでなく、世界とも繋がることが出来ると今回の Peace Concert を通して思った。このことから、日本も無縁社会とは言われているけれど、何か文化的なものを通して人との繋がりを持つことが出来るのではないか。それは世界と繋がることへの架け橋となるはずである。そして地域の繋がりがあり、無縁社会とは縁のないルワンダが経済成長をしていく中で、その、人間として大切な部分を失わないようにして欲しいと思った。また私自身も含め、日本は個人主義に走らず、社会や世界に目を配るべきだと思う。そして文化の違いや相手を思いやることが必要だと思う。

今回の招致で日本にいては経験することの出来ない貴重な体験をすることができて、今回の招致で学んだことをこれからの学生生活、社会に出た時に、活かしていきたい。

～相互理解の一歩として～

早稲田大学文化構想学部　久保　唯香

私たちは共感という術を知っている。共感しているとき、うれしいと感じる。自分が楽しいと、相手も楽しいと感じてほしい。自分が真剣な

とき、相手もその気になっていてほしい。私たちは考えや感情が共有できるという可能性に、ときどき過剰に期待してしまう。自然と発生するこの価値観と、国境と文化を越えて交流しているという事実とがたまに衝突した、第5回学生会議本会議だった。

企業訪問が今回の招致の核となった。ルワンダ人メンバー来日前、私は日本の企業が築き上げてきた組織の持続性や将来性、そして社会的責任の果たし方をルワンダ人メンバーに紹介したかった。近年日本では環境や市民生活の改善に企業が大きな役割を果たしている。ルワンダでも企業の役割を応用できないだろうか。この可能性を共有できるものだと確信して会議に臨んだ。この企画では名古屋の Toyota にはじまり、NHK、SONY、Big Issue、日本の誇るべき企業を訪問し、貴重な意見交換を行うことができた。

しかし、学生会議を重ね、共に過ごす時間が長くなるにつれて、自分の目的が揺らいでいると気づかずにはいられなかった。むしろ、招致前に抱いていた目的は、自己中心的な考えに過ぎなかったのではないか、とさえ思い始めたのである。

ある東京での学生会議では、ルワンダで導入されている貧困解決策を取り扱った。行政が貧困と認められた家庭に牛を提供し、牛を育てた家庭はその子種を地域内の家庭に共有する仕組みである。しかし日本社会に住む私には様々な疑問が生じた。ケンカは起こらないのか。政府は何を基準に牛を提供するのか。他に貧困を解決する手立てはなかったのか—。

ところが、次第にこの政策がルワンダ社会でいかに効果的で理にかなった仕組みであるかが分かってきた。同時に、この政策はルワンダで可能であっても、日本では不可能だと気がついた。

ルワンダと日本は社会が違う。ルワンダ人メンバーが日本へ来て、日本企業を学ぶことは意味のあることである。しかし、それらと真剣に向き合い導入するかどうかはルワンダ人自身が決めることである。そして、それらの方法が社会を改善するかどうかは、日本社会が成功したか否かではなく、すべてはルワンダ社会にかかっているのだ。

私はせっかくの来日だからと日本のやり方を必死に「強要」しようとしていたのかもしれなかった。同じ空間で日本の「最先端」の手法を学べて嬉しいという感情を共有しようとやっきになっていた。

私の目的は「教える」「共有する」から「相手をもっと知る」「尊重する」方向に変わっていった。感情や価値観の共有をゴールにするのではなく、できる限りの尊重をしようと考えたのだ。しかしこれに気がついたときにはすでに企画はほとんど残されていなかった。新たな目的の達成は次回へ持ち越しとなっている。

ところで、自分が逆の立場となり、この共感の価値観をルワンダ人メンバーにみた出来事があった。我々が開催した年末のコンサートイベントで、日本人メンバーとしてルワンダ人メンバーと伝統的なルワンダのダンスと踊ったときである。ルワンダ人メンバーは強いリーダーシップで生き生きとした表情で舞台を動かし始めた。それまであれこれと日本を紹介してきた私はそこに自分と共通する感情を覚えた。ルワンダの伝統ダンスは思いのほか難しく、自分の動きはフラダンスか盆踊りかを疑うほどだったが、このイベントを通して彼らの躍動的な心の動きに触れることができた気がした。

第 5 回学生会議で、国際理解の複雑さや難しさを知ったことは言うまでもないが、ルワンダ人メンバー含め、日本人メンバー、各地で出会った方々と意見を交わし、たくさんの見地を得たことは、何にも代えがたい。まずルワンダらの長旅に

耐え、常に日本人メンバーを尊重する姿勢を貫いてくれたルワンダ人メンバーに感謝したい。そして、この企画の成功のために、力を貸してくださった各地域の皆様と助成財団に敬意を表したい。最後に、心から尊敬する仲間と、自分の活動を支え続けてくれる家族に、ありがとうございました。

～第一歩～

早稲田大学教育学部　品川　正之介

去年の今頃は、ルワンダ人がうちにホームステイをするなんて夢にも思っていなかったであろう。また、その頃の自分はルワンダに対して、いやアフリカにたいして多くの誤解や偏見を持っていた。日本では、アフリカの人々と交流する機会というのは、アジアやヨーロッパの人々と比べまだまだ少ない。家族や友達にルワンダ人がホームステイに来ると伝えた時に彼らが口にしたことは「民族衣装を着てくるのか」とか「何を食べるのか」はたまた「槍とか持ってくるの？」など、様々な誤解に満ちていた。当時自分が持っていた誤解や偏見は、まだまだ日本の多くの人が持っているものなのではないかと思う。

この第五回本会議を経験することで自分にとっての日本ルワンダ学生会議、そして団体理念である「相互理解」が本当の意味で始まる、そう思っていた。今までミーティングでルワンダについて勉強したり、団体理念の相互理解について皆で語ったり、アフリカ関係の各種イベントに参加したりといろいろ活動をしてきた。かつて自分が持っていた誤解や偏見も少しずつなくなっていったつもりであった。しかし、先輩から聞く話や本や各種文献だけではわからないものがあると思っていた。やっぱりルワンダ人と生で関わってみないと何も始まらない、そんな気持ちが最近ずっと付きまとっていた。だからこの第五回本会議は自分にとっての新たな第一歩だと思っていた。

そんな気持ちを胸に初めてルワンダ人と出会って交流していく中で一番感じたことは「同じ」という感覚だった。

遠い離れたルワンダに生活する彼らと僕らとの間には「同じ」と感じられる要素がいっぱいあった。一緒に話して笑ったり、まじめに議論をしたり、時には恋愛のトークで盛り上がったり、ピースコンサートを作り上げたり、一緒に時を過ごす中で感じた一体感。言葉でうまく表せられないが、日本人とルワンダ人という区別はあったとしても、それ以前に同じ人間同士なのだと感じた。

しかしそんな中、時折はっとするように「違い」というものも感じさせられた。もちろん僕と彼らの間には文化とか慣習とかそういう違いがあるが、ここで言いたいことはそういう違いではない。

ルワンダ人が来日した初日、大阪大学でのレセプションパーティが開かれた。そこで彼らは自身のジェノサイドの経験について話してくれた。初めて直接聞く生々しいジェノサイドの体験談に衝撃を受けたのはもちろんだが、それと同じくらいに衝撃を受けたのは彼らの笑顔だった。レセプションパーティということもあり、プログラムにはゲームやダンスなどの楽しい企画が盛り込まれていたのだが、そこで彼らが見せる楽しそうな表情、楽しそうに踊る姿に衝撃を受けたのだ。な

ぜあれほど辛い体験をしてこんなに楽しそうにできるのだろうか。ジェノサイドの経験と、彼らの見せる楽しそうな笑顔のコントラストが激しすぎて頭が混乱しそうだった。

普段彼らが見せる笑顔や楽しそうな姿からは、あのジェノサイドを連想することは難しい。僕らと彼らの「違い」。彼らの過去を振り返ると、確かにジェノサイドの歴史がある。そのうえで、それを受け止めたうえで、今笑顔でいられる彼らの強さは心に響くものがあった。

彼らの言葉一つ一つには、あの悲劇を二度と繰り返してはいけないという気持ちがこもっていた。また、この第五回本会議の中では彼らの祖国を思う気持ちを何度となく垣間見た。Take Action の議論（ルワンダでのボランティア活動をするか否かの議論）では、自国の貧しい人やストリートチルドレンのために何ができるのか真剣に考えていたし、将来は国のためになりたいと言っている姿を見て、刺激を受けたのと同時になんだか自分がちっぽけな人間である気がしてならなかった。

第五回本会議の終盤、一つ考えさせられることが広島で起きた。たしか広島企画の最終日であったか、原爆ドームの前で写真を撮ろうということになった。原爆ドームを背に写真を撮ることとなったのだが、ルワンダ人メンバー、また日本人メンバーも面白い写真を撮ろうといって変な恰好をしてみたり、ポーズを決めたりしていた。この時正直に言って相当に頭にきた。ルワンダのジェノサイドのメモリアルの前で同じことをされたらお前らはどう思うんだ、そう考えていた。しかしこれは逆に考えるとそれほど日本は今平和になったのだということでもあるのかもしれない。もしくは戦後 60 年以上たつ中でかつての悲劇は薄らいでしまったのかもしれない。

もちろん過去の日本が経験した戦争については学んだし、今まで中学、高校時代、また今回の企画でも被爆者の方からお話を伺う機会があった。戦争には反対だし、二度とあんな悲惨なことを繰り返してはいけないということは心に留めているつもりだ。しかし、別にこれは楽観的だとかそういう問題ではなく、はっきりいって今の平和な日本に暮らす自分にとって、また多くの人にとって戦争というものを身近に感じることは難しいのではないか。未来のルワンダの子供たちが、ルワンダで起きた悲劇を決して忘れることなく心にとどめつつも、遠い過去の話のように思えるような平和な世界に暮らしていてほしいと思う。そして日本も同様そういう平和な暮らしが続いていてほしいと思う。

今回の第五回本会議はまさに第一歩となった。いろんなことを考えさせられたし、純粋にホームステイをはじめ日々の学生会議や活動は楽しかった。またこの団体の将来を日本側とルワンダ側で真剣に意見をぶつけ議論したことは忘れられない。自分にとってこの第五回本会議はかけがえのない経験になったことは確かである。そしてこの団体で活動する意義、また相互理解とは何なのかという答えが少し見えてきたような感じがする。しかし反省点を考えると嫌になるほどたくさんある。それも含め「第一歩」なのかもしれない。これからの活動では今回一歩しか進めなかったのが、二歩、三歩ともっともっと進めるように努力していきたいと思う。

～充実～

ルワンダ国立大学

Amahoro Clarisse

今回の会議はよく計画されていたけれど、スケジュールに多くの活動が詰め込まれすぎていた。必要な活動に対して、時間が短すぎたと思う。12 月 18 日と 19 日の 2 日間は参加者が多くいたけれど、その次の 2 日間は参加者が減っていた。Toyota を訪れた時の会議では参加者が増えていた。

東京に着いて亮輔の家にいた時から、スケジュールは大きく変わった。夕方、会議の予定が少し変わったことを聞き、そしてディスカッションの結論は出なかったけれど、JRYCについて日本のJRYCメンバーも含めてディスカッションをした。私達は第 5 回学生会議の終わりには結論を出すと決めた。しかし残念ながらJRYCルワンダと日本の双方の多くの誤解から、1 月 6 日の関西大学と関西空港でも結論は出なかった。その誤解は主に双方の普段の活動の現状の把握不足からきたものだ。

12 月 24 日は多くのJRYCメンバーがNHKとSONYを訪問した。12 月 25 日はプレゼンテーションの日で、多くのメンバーは時間通りに来なかった。その日クリスチャンとして教会にクリスマスのお祝いをしに行った。

12 月 31 日、日本に住んでいるルワンダ人、ルワンダ大使と会った。ルワンダ大使は JRYC の活動のひとつでもあるピースコンサートのお礼を何度も言っていた。私はまた、千田家で彼らの子供のようにもてなしてくれ、新年を祝ったことも覚えている。主に外国人と協力するという点で、異なった方法でスキルを身につけられたため、第 5 回学生会議に参加できたことを感謝している。

～前へ～

ルワンダ国立大学

Habimfura Maurice

私が参加したルワンダ、日本、両方の会議を振り返っても、第５回学生会議は、私にとって、唯一、日本ルワンダ学生会議（以下 JRYC）の将来を心配させるものだった。私は JRYC ルワンダ、日本どちらも、それぞれの方法で経験をふむことができると確信している。個人的に、私はこの団体で活動したことに喜びを感じている。最後に JRYC 日本が JRYC ルワンダと末永く、協力して行う活動を楽しむことを応援している。

～出会い～

ルワンダ国立大学

Ishimwe Alice

日本での滞在はとても楽しく、私はたくさんのことを学んだ。新しい友達に出会い、自動車がどう生産されているのかを自分の目で見ることができ、テレビ局の中に入ることができ、日本人の宗教や日々の生活も知ることができた。日本でのステイは私の人生でもっとも面白い経験だった。自分と異なる生活を知るチャンスは誰にでもあるわけでなく、私はこれを実現してくれたJRYC の日本メンバーにとても感謝している。参加証書までもらうことができ、とても嬉しく思っている。

～ How Amazing was Japan in My Life ～

ルワンダ国立大学

Ntaganda Alfred

世界で最も発展した国のひとつ、日が昇る国、1 日の始まる場所、ムツヒト・ヒロヒトの国、ヒロシマ・ナガサキのある国、サムライの国…。簡単な日本の紹介はこのようなものである。日本で開催された第5回本会議の間、学生会議で私たちは面白い議題を準備して素晴らしい議論ができた。これは私にとって、将来の団体の進化を確信できるものだった。私にとって日本での生活には何の問題もなかった。日本の人々は国の発展のため、忙しく働いていた。

私がこの活動に初めて参加したのは 2007 年のことだった。当時ただ外国から来た学生達と冗談を言い合うだけだったのが、このような素晴らしい活動になるとはまったく考えていなかった。2008 年に学生会議に参加した時も、活動の目的はまだよくわかっていなかったのだ。しかし大介、宗像、由美、有香子といった友人ができ、また私たちルワンダ人メンバーの努力があれば活動がより良いものになると気付いてから、私は学生会議での意見交換に一層力を入れるようになった。はじめ私は自分の過去に負い目を感じており、自信を持って発言することができなかった。しかし彼ら日本人は、自分に自信を持つということを教えてくれた。私は強い人間であり、目標に必ず到達できると言ってくれたのだ。それから私は日本と日本人が大好きになった。私は授業でも、日本はアメリカさえ凌ぐテクノロジーの発展した国であると聞いていた。日本に行く方法を探してみたい、と考えるようになったのだ。しかしそれは私にとって難しいことであった。

そんな中 2009 年の学生会議で、日本人メンバーが制作し、私も出演するドキュメンタリーを観

た。それは私のモチベーションを再び高め、嬉しいことに JRYC ルワンダの副代表に選ばれることとなった。そして幸運にも、私は日本で開催される第 5 回本会議のメンバーに選ばれることができた。コンピュータ・エンジニアリングの学生でもある私にとって、それは日本を自分の目で見て知識を増やすチャンスであった。良いエンジニアになりたければ日本で修士課程を学ぶべきだ、と授業では言われていた。この点でも私は日本にとても興味をもっていた。

飛行機で旅をすることさえ初めてであったが、間違いなく私は幸せだった。日本に滞在している間は多くを学ぶことができ、たくさんのことを経験した。この旅に関する私の気持ちを言葉で表すのはとても難しいことである。

～マジメかっ！！～

大阪大学外国語学部　藤原　稔久

どうも。

深夜にヒロシマの繁華街の銭湯に乗り出して湯冷めして体調を崩して翌日のディスカッションをブッチしたふぢわらです。

みんながまじめすぎるのでふざけましたすいません。敢えて一般人の視点に立ってこの団体の活動を評価してみました。

ほな。

～日本は不思議～

ルワンダ国立大学

Abijuru Adolfe

日本—日の出の国、一日が始まる国、睦仁天皇と裕仁天皇の国、ヒロシマとナガサキの国、さむらいの国—

第五回で日本に行けると聞いたとき、それら全てが頭に浮かんだ。

会議では充実したディスカッションと興味深いトピックが展開された。日本人の生活は普段から忙しくて仕事に熱中していることは世界中で知られている。また、日本はインフラが整う先進国だ：空港、鉄道、大きな道路、高層ビル、トヨタやソニーのような産業、東京や大阪のような街、日本は最も技術的に進んでいる国の一つだ。

貧しい国に住む人の中には、先進国の人は皆天国のような暮らしをしていると思っている人がいるが、それは間違った考えだ。日本でも人々は日常生活で困難に直面している。例えばホームレスの問題や雇用されていない人々。しかし日本人はそれらに対して適切な問題解決の方法を持っている。

また、日本人は第二次世界大戦の敗戦でショックを受け、アメリカの人々を嫌うようになった。しかし和解のプロセスは進んでおり、今では広島平和文化センターの理事長はアメリカ人だ。

一方で、日本は確かに発展した国ではあるが、

外の世界にあまり興味が無いように見える。日本人は言語に関してはまだ保守的で日本語が主に使われている。ほとんどのことが日本語で書いてあって、外国人は日本語を習得しないと日本で暮らすことは難しいだろう。日本人はまだ外国人恐怖症なのではないか。しかしそれは、国際的な言語の拡大によって消滅する言語がある中で、逆にアイデンティティーの保護になる。

日本の家族は客を迎えるのが好きで、お店でもお客様へのサービスは良い。しかし時には利己主義や孤独による自殺など、経済発展の負の側面としての社会問題に繋がる。

愛知ではピースあいちを訪問し、広島での本番に備えているようだった。そこで見た紛争地帯を示す地図で、私の国がソマリアやイラクと同じ扱いになっていたのを見て驚いた。聞くと、地図を変更するのにはお金がかかる、と答えられた。私がその質問をする前に、彼らは韓国と北朝鮮を追加することを考えていると言っていたのに、私の国の表示を変える余裕はないのか。そもそもその施設は 2007 年に建てられているが、その時ルワンダは戦地だったと言えるだろうか？こういった事は人々に誤解を与えてしまう。しかし、私たちには日本ルワンダ学生会議の日本人メンバーいて、ルワンダが安全な国であって、夢も希望も実現できる、国民が誇れる国であることを日本で伝えてもらえる。

また今回の旅の中でもその機会はあった。

12 月 27 日にはピースコンサートでルワンダダンスを披露し、鈴木氏と文化について語った。そのコンサートでは私はジェノサイドの体験を会場の日本人と共有する機会があった。

広島では原子爆弾の影響と現実を知ることができた。大阪と名古屋ではジェノサイドが何なのか、ツチに対するジェノサイドがどう起きたのか説明することができた。大阪の生徒は、国際関係やアフリカの勉強をしているので、ツチに対するジェノサイドの説明に興味を持ってくれた。

～本当に大切だったこと～

早稲田大学文化構想学部
片岡　美月

最初に関西空港で彼らを出迎えた時、特にルワンダの女子学生が、長旅で疲れて、口数が少なかった。関西空港から大阪駅へ向かうバスの途中、何を喋ったらよいのか分からなくて、隣のルワンダメンバーの顔よりも、窓の外の夜景を見ていた時間の方が長かった。仲良くなりたい、もっと喋りたい、知りたい、日本を楽しんでほしい。単純な願いが、沢山頭の中で渦巻いた。

大阪のレセプションパーティで、名古屋のピース愛知で、東京のピースコンサートで、ルワンダメンバーが、ジェノサイド体験を語ってくれた。熱心に、力強く、だが感情的にはならず、堂々と、真摯に、聞き手と自身の体験と真っ正面から向き合って、語ってくれた。それは決してお涙頂戴の感動ストーリーではなく、どこか遠くの恐ろしい出来事でもなかった。彼らが私達に求めていたのは、そんな感情的で瞬間的なリアクションではなかった。大阪で、アルフレッドは「この話しを皆に伝えたい。これを聞いたら、他の人に正しく伝えてほしい。伝言ゲームのように、だんだん話し

が変わっていくのではなく、正確に伝えてほしい」というようなことを言った。そうだ、私は彼らのこの願いを汲み取らなくては、いや、汲み取りたい。ただ本を読んで文字を詰め込むだけでなく、「正確に」、つまり、その文字の向こうに生身の人間の幾千幾万の血と肉があることを忘れずに知らなければ、伝えていかなくてはー。素直に、本当にそう思った。

これら 2 つの素朴な感情が、本当は相互理解の最初のステップだったのではないか。また同時に欠かすことのできない要素だったのではないか。本会議を終えて、関西空港から大阪駅へ向かうバスの中で、数週間前と同じ明かりを見ながら、強くそう思った。

確かに仲良しと相互理解は違う。共感と相互理解も違う。これら 2 つは、自分と相手を同一化しようとする働きである。仲良しは、自分と相容れない（仲良くなれない）人物に対して排他的であるし、共感は、自分の視点で相手を判断し、相手の自分と共通する部分にだけ着目する。上記の素朴な感情が、これらと容易に結びつき易いのは事実である。だが、上手く育ててゆけば、すくすくと、人為的でなく自然に、相互理解へと伸びてゆく種でもあった。

私は彼らと楽しい時を過ごした。学んだことも沢山あった。しかし、その種をいつの間にか無くしてしまったのではないか。相互理解という漢字四字に囚われ、その向こうに人間がいることを忘れていた。

これらは後悔ではない。後悔は、東京へ向かうバスの中で充分にした。これらは反省である。反省は、次回へ、未来へ、活かされるものだ。肥料となり、種を育てるものだ。相互理解という、目に見えない理念を掲げている団体だからこそ、こうして紆余曲折しながら、更に成長してゆくことができるのだろう。

～言葉にできないんだもの～

早稲田大学法学部
嶋田康平

そう言って感想を書くことを渋った。実際に、最初に作成された約 50 部の報告書に私の感想は載っていない。今でもその気持ちは変わらないが、大山代表に「言葉にできないことを言葉にしなきゃ。」と言われ、さらに他の人の感想を読むうちに無理やりにでも表現しなければという気持ちになった。

私が感じたのはある種の違和感のようなものであった。目の前のホームレスを放り、ルワンダメンバーとの学生会議のことを考える自分。同じ空気を吸い、同じ言語を話し、同じ社会に生きていて、困っている人が自分の周りに溢れんばかりにいる。その人々を無視して、どこか遠くの国の人と稚拙な英語で真面目な議論を演じている自分への憤りだったのかもしれない。

そんな違和感は他にもあった。物質的にも精神的にも裕福でなければ、“ボランティア”に参加することができないのではないか。「相互理解」という高尚な理念は、アフリカの遠く離れた国の人間とではなく、まず同じ社会に共生する者同士、まさしく“隣人と隣人”との間で掲げられるべきなのではないか。こう書き連ねていくと、日本ルワンダ学生会議の活動を否

定しているように見えるかもしれないが、全く違う。日本ルワンダ学生会議のメンバーとして、第 5 回学生会議に参加したからこそ、そんな違和感や矛盾に気付いたのである。自分の身近にあるものや、自分の住む社会を全く違う視点でとらえ始めているのである。

第 5 回学生会議が日本ルワンダ学生会議にとっての前進か、あるいは後退か、そんな大それた判断はできないし、する気もない。ただ、団体の一員である私個人にとって今回の経験は、私の中に深く根を下ろし、とてつもないほどの影響をもたらしたことは間違いない。

コラム 大晦日だよ！全員集合！ 海原 早紀

日本で暮らすルワンダ人はいったい何人いるのだろう・・・・？大使館関係者、日本で働いている人、留学生、結婚等で永住している人、正確な数字はわからないけれど、その数はきっと多くないと思います。一方で、少ない人数だからこそ皆仲良し！今までも私たちがイベントに一人を招待すれば、知らないうちに他の人も来てくれる、なんてことがありました。

さてさて、そんな日本在住ルワンダンが大晦日に大集合するランチに、光栄にも招待してもらいました。NUR の 5 人はもちろん、私海原と久保も特別参加！今回は特に大使館の第一書記官ベネディクト氏のお子さん誕生祝いということもあり、新宿のプリンスホテルのビュッフェをいただきました。

総勢 20 人ほどでしょうか。最初からわかってはいたのですが、そのうち日本人は私たち 2 人と主催者の旦那さんと合わせて 3 人だけ。日本のレストランにいるのに、完全にアウェーで、飛び交う会話はもちろんキニアルワンダ。私はクラリスとルワンダ婦人の間に挟まれ、キニアルワンダが全部わかるふりをして頷いていたら、アリースに笑われる始末。。。

そして、時はスピーチタイム！ルワンダンはちょっと形式ばったスピーチが大好き。大使に始まり、皆自己紹介と一言を添えて順番に喋っていきます。これももちろんキニアルワンダ。そして私もスピーチをする番になった。「ムラホ」から初めて二年ぶりくらいに口にするフランス語で自己紹介をしてみました。皆暖かく見守ってくれてありがとうございました！

赤ちゃんのお祝いカードを書いたり、プレゼントが贈呈されたり、久保が大使に日本語を教えたり（笑）私たちはとても楽しい時間を過ごしていました。

ふと気付くと、なんだか子供が増えている気がする。。。？部屋の隅っこで子供たちが集まって遊んでいるのですが、ここに隣のテーブルから日本人の男の子が遊びに来た！さらに面白いのは、ベネディクト氏のお子さんが 2 人（キニアルワンダしか喋れない）、ランチ主催夫妻のお子さん 3 人（日本語しか喋れない）と全くよそから来た日本人が仲良くしているというマルチカルチャーな状態！子供ってやっぱりすごいです。言葉なんて関係ないんでしょうね！私も負けてられないと思いました。

最後に記念写真を一枚。日本でこんなにたくさんのルワンダンに囲まれるなんて幸せです！！

【付録】

メディア掲載
後援
助成団体様
ご協力いただいた団体・個人の皆様
編集後記
記念写真
おわりに

◎2010年12月23日中日新聞にて記事掲載◎

大量虐殺の凄惨さ訴え

ピースあいち ルワンダ学生グループ

山が揺れるほどの悲しみだった。

ジェノサイド（民族大量虐殺）で百万人が犠牲になったとされるアフリカ・ルワンダの学生グループが二十一日、戦争と平和の資料館「ピースあいち」（名東区よもぎ台）を訪れ、日本の大学生らに凄惨な体験を伝えた。

ナガンダ・アルフレッドさん（三五）は一九九四年四月、水くみの途中、知人から「もうすぐ殺されるよ」と宣告された。翌日、なたや棒を持った男たちが自宅に押し入り、とっさにベッドの下に隠れた。五人の家族は連れ出され、帰らなかった。道路には隣人や親族の遺体が横たわっていた。

殺害される理由はツチ人というだけだった。絶望の余り自殺する人、なたで切り殺されるよりもひと思いに死ねる銃殺を頼む人。八歳のアルフレッドさんには過酷すぎる光景だった。バナナで食いつなぐ逃亡生活は一カ月にも及んだ。川を渡ってウガンダ国境を越え、保護された。

現在は祖国に戻り、大学でコンピューターサイエンスを学んでいる。初めて来日し、東京や名古屋で自動車や人の多さに驚いたという。「ジェノサイドは世界のどこでも起きる可能性がある。日本の若者に危険さを知ってほしい」と訴えた。

ピースあいちの学生サポート団体「PATH」が、六人のルワンダ学生を受け入れている東京の「日本ルワンダ学生会議」と開催。小牧市出身の早稲田大三年大山剛弘さん（二一）は「戦争の悲惨さは活字でしか知らなかった。友人に起きた悲劇を知れば知るほど自分のことのように思う」と話した。

（丸田稔之）

ジェノサイドから生き延びた体験を語るナガンダ・アルフレッドさん（右）＝名東区よもぎ台で

後援

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）
ルワンダ国立大学（National University of Rwanda）
在ルワンダ日本大使館
駐日本ルワンダ共和国大使館
アフリカ平和再建委員会（ARC）

助成団体様

独立行政法人・国際交流基金
財団法人・双日国際交流財団
公益財団法人・三菱 UFJ 国際財団
財団法人・学生サポートセンター

ご協力いただいた団体・個人の皆様

トヨタ自動車
博物館・ピースあいち
平和活動グループ PATH
日本放送協会（NHK）
ソニー株式会社　橋谷義則様および社員の皆様
アフリカ平和再建委員の皆様
NPO 法人日本紛争予防センターの皆様
ビッグイシュー日本　佐野未来様、石塚秋一様
赤々舎の皆様
竹内万里子様
Cafaire の皆様
日中学生会議の皆様
日本コリア未来プロジェクトの皆様
国士舘大学教授　鈴木裕之様
平和のためのヒロシマ通訳者グループ（HIP）代表　小倉桂子様
広島平和文化センター理事長　Steven Leeper 様
中日新聞社会部　丸太稔之様
NPO 法人　Peace Village の皆様

ジャンベ奏者　SUGEE 様
多摩美術大学ジャンベ部の皆様
ラジオメインパーソナリティ　神田亜紀様
ICU ドーリムコンペ
Amway Plaza　高橋様
愛知県立大学学生・中西枝里子様
ホームステイ受け入れ先のご家族の方々
財団法人　和敬塾
学生会議に参加してくださった全ての方々
大阪大学 JAZZ 研究部 desafinado
大阪大学西アフリカの太鼓＆ダンスサークル Talibe
(企画準備・会場設定・通訳・懇親会準備を手伝って下さった)ボランティアの皆様
大阪大学外国語学部アフリカ地域文化学科スワヒリ語専攻所属のアシャ・ハミス・ハマド教授。
　そして、授業にてあたたかく JRYC メンバーを迎えてくれた 1 年生の皆様

（順不同）

☆編集後記☆

こんにちは、今回、報告書の編集長をやらせていただきました、クリスティーナです。最後まで読んでいただきありがとうございます。

メンバーが増え、今回の報告書にはたくさんの人が関わり、量も内容も今まで以上に濃い。自分でも編集し、こんなに長い報告書を最後まで読む人がいるのかーと思うくらいになってしまいました。その分、JRYC が人種のるつぼであること、個性にあふれていることが分かる報告書になったのではないかと思います。この報告書はただの報告書ではなく、私たちの 3 週間の思い出の結晶です。

【集合写真】

おわりに

まず、遠いルワンダの友人を含め、海外にいる友人たちは先日日本を襲った大地震を心配し、優しい励ましの言葉をかけてくれました。同じ土地にはいないけれど、心はつながっています。JYRC メンバー一同、そして JRYC とそのメンバーを応援してくださっている方々より、関東・東北地方太平洋沖大地震で亡くなられた方へお悔やみ申し上げます。一刻も早い復興をお祈りいたします。

2010 年 12 月、前半は風のように過ぎていった。

日本ルワンダ学生会議本会議も 5 回目を迎えた。日本への招致は今回が 2 回目。まだ体系的な手順があるわけでもなく、メンバーに入れ換わりがあるため昨年の経験を 100%活かせるわけでもない。昨年発足した関西支部との連携は前例がない。大阪、名古屋は団体として初めてのフィールドである。準備は手探りの状態で進んだ。

ルワンダへの渡航経験がない私は、当初ルワンダ側へメールを送るのも憚る始末であった。無理もないと思う。耳にした話や書物から得られる情報からは、人の実態はつかめないからだ。私は相手を知らない。相手も私を知らない。どんな食べ物が好きで、何に興味があるのか。言語、生活習慣、価値観、流行…。分からないことがたくさんあった。会いたい一心で企画書と向き合いスケジュールを組む。しかし結局、私は積極的にルワンダ側と連絡をとることができなかった。実態のない人とコミュニケーションととることがいかに難しく、奇妙であるか、そしてその環境下において相互理解がいかに厳しいものであるか、私はこの招致前の期間に身をもって学んだ。

大阪駅にほど近いホテルで、私は初めてルワンダ側メンバーと対面した。渡航経験があり、日本で開催した第 3 回学生会議にも参加している代表の大山は、関西国際空港での再開と出会いにこう言った。「おれたち(久しぶりに会ってこんなに嬉しいなんて)恋人みたいだな。」しかし、私はまずこう思った。「やっと会えた…」。

5 人のルワンダ側メンバーと私たちは、関西メンバーが主催した学生会議とパーティに始まり、名古屋、東京、広島で、産業や平和構築に関連する機関への訪問、及びその関係者との交流に勤しんだ。特に「産業」をテーマに様々な分野における企業を訪問した本会議では、多くの方々のご理解とご協力のおかげで、工場見学や対談といった実体験を通して日本という国を学ぶことができた。

晴れてルワンダ側メンバーに出会った私は、早々から大きな悲しみに影のようにつきまとわれる感覚を味わった。大阪のパーティで、名古屋のピースあいちで、東京のイベントで、移動中の車中や何気ない会話で、ルワンダ側メンバーが自らの言葉で語った自らの歴史。それは幼い自分の記憶であり、ルワンダという国の過去であり、そして現在の姿だった。私は、ル

ワンダにおける悲劇がいわゆるジェノサイドそれだけでないと知った。ジェノサイドから 16 年以上たった現在も、消えることのない歴史の上で精神障害や性的虐待、戦争孤児にまつわる問題に立ち向かいながら、ルワンダは今日を迎えている。彼らは歴史の中に生き、そして今も確かにルワンダの社会に生きているのである。当たり前の事実かもしれないが、初めて実態としてふりかかった感覚だった。

彼らに日常があり、その日常がジェノサイドの歴史を思わせないほど平凡で、なんら特別ではなく、そして素晴らしく多様性に富んでいることは、彼らをみていれば一目瞭然だ。私たちが音楽を好むように、音楽を聴く。たくさん寝るし、夜ごはんは質素を望むが、朝ごはんはよく食べる。目上の人には礼儀をつくす。宗教や習慣、それぞれが個性をもっているが、その個性の存在が特別なことなんて、ない。

暗い影につきまとわれながら、そして彼らのまぎれもない明るさに照らされながら、私は幾度となくこの交流の意義を確かめた。そしてこの活動を行う者としての責任を感じざるを得なかった。学ばなくてはらない、そして伝えなくてはならない、と。あの友人たちが住むルワンダは、どんなところだろう。どんな人がいるのだろう。何がおいしくて、何を楽しみに生活しているのだろう。もっと近づきたい、そして、今度は私が私の大切な故郷、日本の真髄を伝えたい。

第 5 回学生会議開催にあたり、各地で大変多くのご協力をいただいた。ルワンダ側メンバーは、日本側メンバーのみならず、ご協力いただいた方々との交流を通して、私たち日本人を実態としてとらえてくれたことだろう。私たちがテクノロジーに囲まれて生きているだけでなく、多くの問題に対峙しながら暮らしていることも、感じたに違いない。

「ルワンダプロジェクト」から日本ルワンダ学生会議が発足して 3 年が経とうとしている。新しいメンバーが加わり、新しい問題も生まれている。実態をつかみきれないメンバーが増加することも一つである。ルワンダと日本が協力して成り立つ、むしろその協力の証として実施するはずの学生会議が、どちらか一方の意思と要望で進んでしまう危険があるからだ。

私たち日本ルワンダ学生会議メンバーは今後、私たちが抱える問題の解決へ向けて、常に互いをよく知り、尊重する姿勢を前提としなければならない。むしろ、私はこれら問題ひとつひとつに真摯に取り組んでいくことが団体理念である「相互理解」へつながると信じている。

大学生として、日本人として、人間として、この活動に関われることを誇りに思いたい。遠いルワンダに住む友人に思いをはせながら、日本とルワンダ双方のより良い未来を考え創造し続けていきたい。

日本ルワンダ学生会議
早稲田大学文化構想学部 1 年
久保　唯香

この事業は、独立行政法人国際交流基金・財団法人双日国際交流財団・公益財団法人三菱 UFJ 国際財団・財団法人学生サポートセンター・ICU ドリームコンペの資金協力の下で行われました。各活動も多くの方々のご協力の下実現できました。今回の日本招致を支えてくださった皆様に改めて深く御礼申し上げます。

日本ルワンダ学生会議　第 5 回本会議活動報告書

2011 年 4 月 19 日　第二版発行

発行元　日本ルワンダ学生会議

編集　Gan Kristina

連絡先　japan.rwanda@gmail.com